

祈つてやることはないんです、これはユダヤ人なんですからね」つてね。ところが本當にしない！
『嘘をおいひ、お前さんは悪魔に唆かされてわたしを丸め込まうとおしだけれど、わたしだつてどつこい、ユダヤ人は尻尾があるぐらゐの事は心得ておますよ！』『そんな馬鹿なことを、ユダヤ人にしろユダヤ人でないにしろ、人間に尻尾があつてたまるもんですか。』といつた譯で大論争になつちまつた。僕はユダヤ人のため濡衣を乾してやらうとする、お母さんは乾させまいとする。僕は尻尾なんか無いといふ、お母さんは斷然有るといふ。僕が『ない』といへば、お母さんは『有る』といふ。『ない』、『ありますよ！』つてな調子でね、しまひにはすつかりお母さん逆上しちまつて、ただもう『クシ、シシ、クシ、シ、シ』つてまるで雞みたいな金切聲を立てて、僕の鼻へ兩の手の平を叩きつけて來る始末。ねえ、君、考へてもみたまへ、これでもまだ女性に自由を與へよなんて提灯を持つ奴が世間にやゐるんですからねえ。自由結構。僕だつて女性の自由には賛意を表するに吝かでないが、但しそれにやちやんと筋が立つてゐなくちや困るね。若い、頭の進んだ女性が、行動を拘束されたくないと言ふなら、よろしく自由を與ふべしだが、しかし婆さんにはねえ。……いや、僕は敢て先頭に立つてそんな事には反對する。のみならず、この事を文學で篤と扱はうとする人のないのが寧ろ怪訝に堪へないね。それをいい事にして有害極まる奴ばらがのさばるんですよ。あのザハリーヤつて坊主までが、これ幸といきなり女性解放論者になつちまふ！ さうですとも、あの男は斷然お母さんの味方なんですよ。『君に神を信じない権利があるのなら、お母さんも同じく人間として、神を信じる権利があるわけですなあ！』なんて抜かしやがる。いいですか、同じくつていふんですよ。そんな事を言つ

てけしかける奴がなかつたら、お母さんは疾うの昔に降参して讓歩したに違ひないんですよ。さうなりやお母さんはお寺詣りをやめちまつて、聖餅焼きの商賣にもおさらばをして、ビジューキナの邸の乳母になつてたに違ひないんですよ。ところが、うちのお母さんをけしかけて僕に齒向はせるのは、どうもあのアヒラか、さもなけりやあのトゥベローゾフ御大自身らしいんです。」

「いや、もう澤山ですよ、願ひですからやめて下さい！」

「何が澤山なもんですか、こつちはちやんと證據を握つてるんだからねえ。トゥベローゾフは昔から僕が嫌ひだつたらしいが、此頃ぢや僕の自然科学眼に恐れをなして、すつかり僕を憎んでゐるんです。何しろ僕は奴さんをうんとこせ叩きのめしてやつたもんでねえ。」

「何だつてまたあの人を叩きのめしなんぞしたんです？」

「僕は百ぺんぐらゐ奴さんを叩きつけたもんですよ。現に先週ももう一ぺん叩いてやつた。奴さん、學校の視學室で、例によつて長々とお説教をやり出した——祭日といふものは言ふに言はれぬ一種特別なものを含んでゐる、つて調子でね。そこで僕、衆人環視の中で猛烈と喰つてかかつてやつた。僕はその衆人環視の眞只中でね、祭日の算出には數學でちやんと證明濟みの謬りがあるといふことを、頗る簡單明瞭に指摘してやつたのさ。わが國の祭日そも何處にかある、てな調子でね。あんたが例へば降誕節を祝ふとする。ところが外國ぢやちやんと十三日前に祝つてしまつてゐるんだ、てな調子でね。どうです、僕のいふ通りでせう？」

「そりやあ十二日でせう、十三日ぢやありませんよ。」

「なるほど、十二日だつたつけな、だがそんなことはどうだつていいさ。ところが奴さん忽ちテールを手の平で叩いて、喚き出したもんだ。『ええい、ここな算術家めが、用心するがええぞ、この罰には今にお前の大事な物理が辛い目に逢ふぞよ!』つてね。まづ第一に、奴さんのいふ物理、つていふのは一體なにを指すものかね? ねえ、さうぢやないか、これぢや無知としか言へんぢやないですか、シニズムとしか言へんぢやないですか。それからもう一つお伺ひしたいが、果してこれが答辯と謂へるものかしら?」

客は噴き出して、それでも答辯には違ひないが、なるほど如何にも奇妙な答辯です、と言つた。

「全くその通りでさ! 勿論愚の骨頂さね。ところがこんな事がほかにもまだどつさりあるんです、序でにもう一つ例を挙げれば、昨日も晩がた僕がビジュニーキナの邸から歸つて来る途中で、僕の少し前のところをあの萬屋のダニールカが歩いてゐた。知つて居るでせう。あの飲んだくれのダニールカですよ、わづか二ルーブリが欲しさにグリーチの邸まで出掛けて、アヒルラがバタを搾つてゐた間にまんまと馬泥棒をやつてのけたあの男さ。僕はそこでダニールカと話をしはじめた。どうしたね、どこへ行つて来た歸りかね、つて僕が訊くとね、町長さんのところへ行つて来ました、郵便局長の奥さんから毒をことづけられましたね、そのとき皆さんで新聞を読んでおいでなのを小耳にはさんだんです、何でもレーヴェリとかいふエストニヤの町ぢや、死人がちつとも腐らずに百年もそのままになつてゐたが、今度それを葬つてやるやうにお布令が出たさうですよ、といふ返事だ。『そんな出来事のことつたことが何處まで本當だか知りませんがね、そのあとであんたのことも話が出ましたつて』とダニ

ールカが僕に教へて呉れたんです。僕は勿論すつかり動揺しちまつたが、奴さん僕を慰めてね、『いや當のあんたの事ぢやありませんよ、あんたが大事にしてゐるあの死骸のことなんですよ』つて言ふんだ。ねえ君、どうだらう、實に陰謀も甚しいぢやないか! 僕はそこでダニールカに二十コペイカ玉を握らしてやつたが、これも蓋しやむを得ん次第ですよ。いい事ぢやないに違ひないがとにかくスパイは必要なものだ。スパイは必要なりといふのは僕の持論でね、この點僕とビジュニーキナとは全く意見が一致してゐるんですよ。苟も新學説を建てる者は、どうしてもスパイを使はずにやつて行けない、といふのは社會の動向を究める必要があるからです。それはさうとして、ええと、……どこまで話したつけなあ? ああさうさう! 僕はそこでダニールカに二十コペイカ玉を握らせてね、洗ひざらひ話して呉れと頼んだ。そこで奴さん喋りだしたがそれによると例の新聞を讀んぢまふと、補祭の奴が僕の骨の一件を持ち出したといふんです。『わたしは實はわざわざ、この新聞を持つて来たんです、かねがねあの事が氣になつてゐたもんでね』だとさ。嘘も休み休みいふがいいや。あの男はついで何一つ讀むなんてことはしない奴だし、實はこの新聞といふのはダニールカがリヤーリンに頼まれて胡桃を包んで奴のところへ持つて来たんだからね。それから奴さんの曰くさ、『ねえヴォーイン・ヴァシリイチ、水死人をあのヴァルナーヴァへ渡したのは、あなたと醫師の飛んでもない失策ですよ。だが取返しは附けようと思へば附きますね。』町長は勿論僕の氣質をのみこんでゐるから、とてもそりやこの僕が手放しはしまいと云つた。いかにも僕は決して手放しはしないさ。ところがアヒルラの言ふには、『なあに、あの骨をあいつの所から持ち出して、安らかに葬つてやることなんぞ、お茶の子

「さうさうでさあ。』町長の言ふには、『ぢや骨を召上げろといふ命令を署長へ出すかね?』ところがあの強盗野郎めが言ふにや、『わたしは何にも要りませんよ。命令なんか無くつたつて直ぐさま持ち出して、子供用の小ぢやな棺へ入れちまつて、萬事解決といふことにしてお目に掛けませう』だつとよ。』プレボテンスキイはいきなり骨の上へ猛烈な勢で身を伏せて、まるで鳶が降りて來たのに憎え立つた雛つ子を母雞が翼をひろげてかばふ有様さながらに、兩の腕で骨をかくしながら、神経質な聲を上げた。――

「いやいや、どう致しまして! 僕が生きてゐる限り、これを渡してなるものか。第一きみがたもそろそろお神輿を上げたらいいぢやないか、何ぼ何でも些か氣が長すぎるぞ!」

「そりや何のことです、『その人たち』が氣が長すぎるといふのは?」

「いや、君にやお分りになるまいかな?」

「革命のことですか、え?」

教師は仕事をやめて、妙な薄笑ひを浮べながら、こくりと一つうなづいた。

一一

「そんな情報をダニールカの口から吐き出させると」とヴァルナーヴァは言葉をついだ、「僕はそ

の足でビジューキナのところへ引返して、逐一報告をして、さて一時間ほどして家へ歸つてみると、驚いたね、既にして骨はきれいに一本もないぢやないか。どこへ行つたんだ、何處へ失せたんだ、つて僕は喚き立てたね。すると奥様が、僕の垂乳根の母君が、かう返事をなさるんだ。『お怒りでないよ、ねえ可愛いヴァルナーシエンカや(いやはや、まつたく便利な名前をつけて呉れたもんさね、ヴァルナーシエンカでござれ、チエルターシエネクでござれ、何とでも自由自在に曲げられるんだから、ねえ)、お怒りでないよ、上司がお召し上げになつたんですからね』だつとさ。何て馬鹿な眞似をする、何て馬鹿なはなしだ、一たいその上司といふなあ何處のどいつだ、つて僕が喚くとね、『お前の留守の間に補祭のアヒルラさんが窓のところへ見えてね、すっかり集めて持つて歸られたんですよ』といふ返事だ。ええ君、お氣に召しましたかね、『上司がお召し上げになつて、アヒルラが持つて歸つた』とさ。なんぼ君にしたつて、假にも脳味噌があるんなら、脳味噌がつまつてゐるんなら、補祭がなんで上司なんだ? つて訊きたくならうぢやないか。すると母君の仰しやるには、『ねえお前、そんな失禮なことを言ふものぢやありませんよ、かりにも聖油の塗布を受けたお人ぢやありませんか!』だつとさ。ねえ君、一つ考へて呉れ給へな! いや君は笑つておますね、君は可笑しいんですね。ところが僕は、いよいよこの強盗の本據へ乗り込んだ時にや、可笑しいどころの騒ぎぢやなかつた。さうとも、アヒルラはかねがね僕のことを臆病者だと觸れ廻すし、世間でもみんなさう思つてゐるんだ。ところが僕は昨日僕が決して臆病者に非ざる所以を實證してのけたのさ。何しろまつすぐアヒルラんとこへ乗り込んだものねえ。行つて見ると、奴さんぐうぐう寝てゐる。僕はそこで窓をこつこつ叩

いて、かう言つてやつた。『ねえ、アヒルラ・アンドレイイチ、僕の骨を返して呉れませんか？』すると奴さん第一に先づやつとこさで目を覺ましてね、どうだらう、いやに尊大ぶつて大きく出やがるんだ。『お前さん何で骨がいるんだね？』『お前さん』だなんて馴々しいにも程があるぢやないか？變に親密ぶりやがるぢやないか？』『お前さんは骨のない方がすつきりしてよ。』『僕がすつきりしようとしまいと、あんたの知つたことぢやないぢやありませんか。』『いや、ところがどうして、大ありだよ。わしは僧侶だからね。』『それでもあなたは、他人の財産を取上げる権利まではないでせう？』『だが骨はたい財産だらうかな？ それにお前さんも、そんな財産を持つことは許されんことだくらゐは覺えて置くがいいよ。』そこでかう言つてやつた、『ところが他人の物を盗むことは僧侶にも矢張り確かに許されんことだせうね。あなたはつきりイギリスの法律をよく御存じがないんですね。イギリスでそんな真似をしたら絞首の刑に處せられるですよ。』『よしよし、お前さんの方からそんな色んな法律のことを持ち出して來るんなら、序でにこれも覺えて置くがよからうぜ。今度の事でお前さんを訴へて、憲兵隊へ突き出したら、お前さん早速その場で腰んとこまで生理めにされて、二本の管でぶつ叩かれるんだぜ。これがお前さんの好きなそのイギリスといふやつさ。どうだね？』さぞいい氣持がすることだらうなあ？』そこでかう言つてやつたよ、『へえ、あんたは中々の物識りですねえ。管が何本といふところまで知つてらつしやるんですからねえ。』すると奴さんの言ふにや、『當り前さ、知らないでどうする。そりや實に簡單明瞭な道理なんだよ、——つまり、自分で痛い目に逢つてみてこそ、兩側にかう管を持つた奴が立つて、それでもつて厭つとこせ叩きつけて來るその味が

身にしみて分るのさ。』僕曰く、『そりや、さぞいい圖でせうなあ。』奴さん曰く、『さうとも、よく覺えて置くがいいぜ。で悪いことは言はないから、今日のところは俺の言ふことを聽いてな、馬鹿げた考へはさらりと棄てて、おとなしく引退つたがよからうぜ。』さう言つたかと思ふと、奴さんまたとすんと寢床に轉げ込む音がきこえた。茲に於てか僕は、ははあ奴さん言はんでもいいことまで口を滑らかしをつたたと、びんと頭へ來たことは勿論だが、ままよ序でもつと口を割らしてやれと思つてね、かう言つてやつた。『でもあなたは、ねえ補祭さん、あなたは別に憲兵隊に勤めて司直のことに携はつてをられるわけでもないんでせうな。』すると奴さん、滑稽ぢやありませんか、僕が仕掛けた鼠とは露きづかないでね、べらべらと泥を吐きをつた、『俺が憲兵隊に勤めてをらんと言ふことが、なぜまたお前さんに分るんだね？』ところが俺んとこにはちやんと白手袋があるかも知れんぜ。もしこの上おれの安眠妨害をやるんなら、一つお前さんに見せてやつてもいいがね』つて抜かすんです。もちろん僕は、のほほんといつもの出るのを待つ氣はなかつた。だつて第一そんなもの有難くも何ともないし、第二には探りたいと思つたことは全部もう聞き出しちまつたし、それに奴さんの喧嘩買ひの悪い癖もよく心得てゐるんでね。……『いやそれには及びませんよ、そんな證據をわざわざ見せて頂かないでも結構ですよ』と言ひ棄てるなり、すぐその足でビジュイーキンの家へ駈けつけてね、早速逐一ダーリヤ・ニコラーエヴナに報告に及んだんです。ダーリヤ・ニコラーエヴナは僕が今いつた意見に悉く賛成でね、實は自分としても、この町の連中は一人のこらす祕密警察の手先をつとめてゐるんぢやないかと思つてゐます、つて言ひましたよ。』

「そりや誰のことです、祕密警察の手先を勤めてるといふのは？」と、相手は仰天してヴァルナーに訊ねた。

「いやなに、この町の色んな連中ですよ、中でも坊主どもだね、サヴェーリイとか、アヒルラとか。」

「こりや驚いた。あんたもそのダーリヤ・ニコラーエヴナも、平たく言ひや、正氣の沙汰ぢやありませんぜ。」

「どうしてそんな事があるもんか。かうした事にかけちや、ダーリヤ・ニコラーエヴナは中々鼻が利くんですからね。何しろあの女は随分たびたびさうした手合から酷い目に逢はされてるんですからねえ。」

「そりやダーリヤ・ニコラーエヴナが口から出まかせを言つてるんだ。——あの女は誰からも酷い目になんか逢はされちやあませんよ。」

「そりや誰のことです？　ダーリヤ・ニコラーエヴナのことですか？」

「さう。」

「千萬かたじけない次第で！」と、剽軽な最敬禮をやりながら教師は答へた。

「そりや又なんのことです？」

「相濟まん次第ですがね、實はあの女、何べんも答をくらつたことがあるんですよ」と、さも鼻高とプレボテンスキイは言つた。

「子供の頃にせう。それにしたつて大して喰ひはしなかつた筈ですよ。」

「ところが然らずでね、子供の頃どころか、實に婚禮の二日前といふ次第なんですよ。」

「愈々出でて益々奇怪なことを承るもんだなあ。」

「奇怪でもなんでもないですよ。儼たる事實なんですからねえ。」

「いや、われながら物識らずで畏れ入ります、——そんな事實があらうとは知らなかつたなあ。」

「だからそれ、僕の言はないことぢやないでせう——苟も判断せんと欲せば、先づ知らざるべからず、ですよ。そもその事の起りはですね。當時ダーリヤ・ニコラーエヴナが親父さんの家を飛び出さうと決心したことから始まつたんです。」

「何だつてそんな決心を？」

「なぜと仰しやるんですかね？　君にも似合はんことを訊かれるものですね！」

「いや、僕がそれを訊いたのはつまり、あの女のお父さんが、あの女を追ん出したり、壓制を働いたり、自由を束縛したりしさうもない人だからですよ。」

「なあに、そんなことはどつちだつていいんですよ！　別に自由を束縛されはしなかつたが、とにかく無性に家を飛び出したくなつて、實際にも飛び出しちやつたんですからね。そもその親父さんと暮したところで始まらんぢやないですか？　ビジューキンはあの女の弟の家庭教師をしてたんだが、この先生があの子の考へに賛成してね、そこで御兩人よろしくやつておたわけだが、やがてそれぢや正式に結婚して、親父さんがかれこれあの子のことに口出しが出来ないやうにしちまはう、といふこ

とに一決した。ところが親父さんはあの女がビジュューキンのところへ嫁くことを許さない、それのみかあの男を出来損ひの大馬鹿野郎と見てゐる。だがあの女にしてみりや、假にも内縁関係を結んぢまつた以上、今さら後へ退くわけにも行かないんで、一意邁進したわけさ。……つまり、あの女は、自分をほかの男のところへ片付かせようなんてことは、考へる餘地もなくなるやうに工夫してね、その一件を残らず洗ひざらひ眞正直に親父さんに話しちまつたのさ。ええ、君、僕の言ふことを聴いてるのかい、ヴァレリヤン・ニコラーエヴィチ？」

「聴いてるところぢやない、君の口を出る一言ごとに好奇心が益々うづいて來ますよ。」

「そりやその筈ですよ、これから益々佳境に入るんですからね。そこであの女はずばりと明らさまに、その由々しき一大事を親父さんに打明けたんですがね、すると親父さんは、正に次に述べるが如き卑劣な手段に訴へたんです。つまり親父さんはあの女に、『ぢやあ明日、叔母さんとこへ行つて、叔母さんにもひとつ話してお出で』と言つたんですよ。ダーリヤ・ニコラーエヴナは何の疑ふ氣持もなく、二つ返事で出掛けて行つたところが、親父さんと叔母さんと二人がかりであの女をふんづかまへて、散々に答でもつて折檻した。そこであの女はすぐその足で憲兵隊の役人のところへ轉げ込んで、かう訴へ出たんです。——『どうぞ證人に立つて下さいまし、そしてペテルブルグへ申告してくださいまし、かうなつてはもう隠しては置けません、——かりにも親たるものがどんな惨い仕打ちをするのか、天下に公開するがいいのです』とね。するとその役人の曰く、『いや、證人に立つのも申告するの眞平御免を蒙る。わしは父御と全く同意見ぢやから、もし父御がもう一べん折檻をやらうと仰

しやるなら、よろこんでお手傳ひをするつもりぢや』ですとさ。事茲に至つては萬事休す矣ぢやありませんか？ つまりこれが僕の今いふ秘密警察なんです。生みの父親だ、生みの叔母さんだと思つてゐたら、豈圖らんやそれが、やつぱり紛れもない秘密警察の手先だつたわけなんですぜ！ それからといふもの、ダーリヤ・ニコラーエヴナは口癖のやうに、わたしは得をしたことが少くも一つある、それはあの人たちの正體がすっかり分つたことだ、と言つておますがね、昨日も僕がアヒルラについて發見したことを話してきかせたら、かう言つておましたよ。『そりやそれに違ひありませんわ、あの男はスパイですとも！ かうわたしたちの身邊に危険が迫つた今になつては、一番大切な問題はあなたのその骸骨を取返して來て、一生懸命それを研究し抜くことですわ。なにせよる夜中のことだから、何ぼあのアヒルラの奴だつてまだ骸骨をどこかへ片附けちまふ心配はないし、今すぐこの足であいつのところへ忍び込めば、取戻せることは請合ひですわ。ただね、つかまらないやうに用心なさいよ、さもないと忽ちのされちまひますからね……』と。」

『『のされる』ですつて？』

「あの女はさう言つたんです。だつてアヒルラの手口をすっかり心得てるんですからね。だがあの女はまたかうも言ひましたつけ、——『なあに、平氣ですわ、わたしの厚い毛布の襟巻で頸をすつぽりくるんで、頭にはわたしの綿入れ頭巾をかぶつて行きなさい、さうさうその通り。それなら萬一つかまつて打たれたにしたつて、ふわふわして痛くはありませんわ。』といふわけで、僕はあの女の教へるままにすつかり武裝をととのへて、出掛けて行つたんです。奴のところの中庭へまたやつて來てみ

ると……犬が吠えつきましたかね、そこはダリーヤ・ニコラーエヴナが先見の明で、犬にやりなさいといふ譯で揚げ饅頭を一片れ渡して呉れたんです。それを犬に食はせて、はいつて行くと、すぐ眼の前に手押し車が置いてあつた。その車へ寄つてみると、すつかりその中にはいつてゐたんですよ——僕のあの骨がね！」

「なるほどね、勿論そこで善は急げといふわけですね？」

「言ふにや及ぶでさ！ 僕はばつとダリーヤ・ニコラーエヴナの頭巾を脱ぐが早いか、その中へ骨をしつかり包み込んで、一さん走りに退却したんです。」

「そこで目出度し目出度しといふわけですね？」

「何が目出度しなんでしょうか？ それどころか、戦はまさに酣なんですよ。先をつづけませうかね？」

「さあどうぞ、願ひしますよ！」

一一一

「ちや先づ、僕が今日なぜ教會へなんか出掛けたのか、その事の次第から始めるとしませう。實は今朝はやく、アレクサンドラ・イヴァーノヴナ・セルポローヴァがこの家へ見えたんす。君は勿論、

僕と同様あの女のことは知つてをられる筈ですね。あの女は信者で、あの女が色んな事について抱いてゐる信念は頗る幼稚な舊弊なものです。とにかく何やかやと僕のお母さんに援助を與へて呉れるので、僕もまあ目をつぶつて、あの女とは喧嘩をしないことにしてゐるんです。だがこんなことを話してどうするんだつたつけない？ ああ、さうさう！ あの女がこの家へ見るとね、お母さんが僕にかう言つたんですよ、『さあ、起きとくれ、何てまあ寝坊助なんだらうねえ、お前さんこれから一走りアレクサンドラ・イヴァーノヴナを教會までお送りしてお呉れ、收税役人さんとの犬がこの方に飛びかからないやうに氣をつけてね。』といふわけね、僕はお伴をして行つたんです。君も知つての通り、僕はついで教會へ行つたことはいないんだが、あすこなら大丈夫アヒルもサヴェーリイも手出しは出来ないことは、僕ちやんと心得てゐたんで、安心して出掛けたんですよ。ところがね、向ふで立つて待つてゐるとき、ふつと思ひ出したのは、自分の部屋の錠をおろさずに来たことです。骨の置いてある部屋のね。そこで一さんに駈けて歸つた。歸つてみると、お母さんは留守だ。壁を見ると、南無三、骨が一かけらもない！」

「葬つたんですね？」

「その通り。」

「冗談ぢやなしに、葬つたんですね？」

「いやもう御念には及びませんよ。うちのお母さんに冗談もくそもあつたもんですかい！ 僕はお母さんの前に両手をついて頼みはじめた——お母さん、ねえお母さん、これからは誓つてお母さんを敬

ひますから、どうか僕の骨のありかを教へて下さい、つてね。すると、『うるさくお訊きでない、ヴ
アルナーシャ、あのお骨もこれで成佛できるといふものだよ』といふ返事です。僕はそこで一切の手
段を盡しましたよ、——泣いても見せた、自殺しちまふと威かしてもみた、果ては今後は神様にお祈
りを上げますと約束してもみた、——だがいつかな泥を吐かないんです！僕はもう口惜しくつて腹
の中が煮えくり返るやう、すぐその足で學校へ出ましたが、心の底では今日の夜中になつたら歎でも
つて教會の構内にある墓を一つ掘り返して、新しい骨を手に入れてやらう、そして降参しない證據を
見せてやらう、と確く決心してゐた次第なんです。實際僕はそれを斷行するつもりだつたんですよ。
ところで、こいつもやつぱり、犯罪を構成するんでせうかね？」

「するどころか、そりや大罪ですよ。」

「そらね、だから言はんこつちやありませんよ！そもそその大罪を犯さしめんとした者は何者で
すか？……現在の母親なんですぜ。しかもそれが必ず行はれるところだつたんですぜ。ところが突然
そこへです、有難いことにや男の兒が一人僕の教室へやつて来て、川岸で豚が人間だか馬だかの骨を
ほじくり出しましたつて言ふんです。僕はそれこそつきり僕の骨に違ひないと思つて駈けつけてみ
ると——案の定その通りでしたよ！そこに人垣をつくつてた人達はどうしても『埋めろ』と言つて
聽かない。……僕は退いて呉れと言ひ返す。と、その押問答の最中に、耳についた聲はあのアヒル
ラだ。……僕は骨を拾ひ上げるが早いのか、どんどん逃げ出した。アヒルラの手が僕の上着にかかる、
僕は身をかはす……發止忽ち据がひつちぎれる。アヒルラの手が僕のカラーにかかる、僕はまた發

止！……カラーがすつ飛んぢまふ。アヒルラの手がこつちのチョッキにかかる、僕はまた發止……
チョッキは忽ち眞二つ。奴の手がこつちの頸つ玉にかかる、——僕はまた發止とやつて逃げのびてね、
今この通り此處に坐り込んでせつせと骨を磨いてゐるところへ、君が御丁寧にまた僕を頼へ上らせた
といふ次第なんです。僕はつきりまたアヒルラの奴だと思つたもんでね。」

「いや、そいつは大變だ、アヒルラはきつとやつて來ますぜ、しかも塀を乗り越えて來ますぜ！
だつてあの男は補祭ですからねえ。」

「奴が補祭だつて！君こそその『補祭』だと言ふべきですわねえ。尤も奴がそれになりたくつてう
づうづしてゐるのは事實ですがね。昨日あの萬屋のダニールカが僕に話して呉れたんだが、奴は別れ
際にトゥベローゾフに向つて、かう言つたさうですよ、『では、サヴェーリイ師、わたしがあのヴァ
ルナーヴァ退治の目的を達しないうちは、わたしをアヒルラ補祭と呼ばずに、軍人のアヒルラとみん
なでお呼びなすつて下さい』とね。なあと平氣でさあ。奴は勝手に軍をするがいいや、僕はちつとも
怖くはありませんよ。僕はあれ以來はつきり方針が立ちましたからねえ。僕はもうこれ以上この土地
には住まんことに決心したんです。僕はペテルブルグの二三の人と文通をしてゐますが、その中のさ
る殿様が或る事業を興すことになつてね、それをしほに僕はペテルブルグへ出ることにしましたよ。
實はね、僕は今までもちよいちよい瀬踏みをやつて見たんですよ。つまりあのダリーヤ・ニコラーエ
ヴナと合作で、そこへ三つ四つ小さな記事を送つてみたんですが、その都度、『もつと辛辣に願ひた
し』といふ返事なんです。あつちへ行きやあ僕は辛辣にやりますよ、あつちへ行きやあ、遠慮なしに

びしびしやりますよ。だが此處ぢやあねえ、骸骨と引換へにこつちの命をすんでの事に失くすやうな體たらくぢや、あんまりメートルも上げられませんや。だがまた一方ぢや、をかした事があればあるもんで、あのペテルブルグにだつて、愚劣なことが持ちあがつてゐるんですよ。他でもないが一ばん進歩的な諸新聞までが、僕らの町を風靡しつつある自然科学熱を擲擧しだすといふ騒ぎなんですぜ！君はあれを読みましたか？」

「なんだかそんな風な記事を読んだやうな気がしますね。」

「いやあ！ ぢやあ君もさう解したわけですね？ そこで一つお伺ひ申したいが、そんならそれで一たいなぜ奴等は、僕らに蛙を研究しろの何のつて盛んに煽つたんですかね？」

「知りませんねえ。」

「知らんですつて？ よし、ぢやこれは君にはつきり申し上げとくが、奴等これがこの儘で済むもんぢやありませんぞ！ さうですとも。僕は今やこの僕の骨を携へて、一路ペテルブルグへのぼるんです。そしてあそこへ行つたらこの骨でもつて奴等の面を、奴等のしやつ面をがんと一つ喰はしてやるんです！ そこで僕を治安判事のところへ突出さうとどうなりと奴等の勝手ですよ。」

一三

「ホ、ホ、ホ！ 見上げた御決心ですことねえ！」——不意にセルポローヴァがさう口を出した。彼女はその瞬間までこんもりした櫻の繁みに佇んでゐたので、話に夢中の二人はちつとも気がつかなくかつたのである。

プレボテンスキイはボタンを外したシャツの胸もとを掻き合せ、腰を浮かせると、片一方の手で煉瓦の粉だらけになつたズボンを引き上げて、かう口走つた。——

「いやどうも、アレクサンドラ・イヴァーノヴナ、おゆるしを願ひます、大變な恰好をしてゐまして……」

「どう致しまして、お仕事の最中にみなりも何もあつたものですか。けどお家へおはいりなさいましな。お母様が御飯ですつて呼んでいらつしやいますよ。」

「いや、アレクサンドラ・イヴァーノヴナ、僕は食事には行かんです。もうお母さんと一つ屋根の下に暮すことは出来ないんです。もうすつかり縁が切れちまつたんです。」

「そんなこと仰しやつて、よくも恥かしくおあんなさらないことねえ。お母さんはあなたを愛しておいでぢやありませんか！」

「恥かしく思へなんて仰しやつたつて無駄なことです。お母さんは僕の仇敵どもと誼みを通じてるんです。僕の大事な骨を埋葬したのもお母さんだし、僕がひよつとして燈明で煙草を喫ひつけたからといつて、そんなことまでに腹を立てる始末なんで……」

「また何だつて煙草をわざわざお燈明なんかでおつけになるの？ ほかに火の氣がないんですの？」

「あんな馬鹿な！」

セルボローヴァはにつこり笑つてかう言つた。――

「まあ御挨拶ですこと。」

「いや、あなたのことを申したんぢやないんです、僕は燈明のことを言つてるんで。だつて要するに火には違ひないぢやありませんか。」

「でせう、だからほかの火でおつけになりやいいのよ。」

「どつちみち燈明なんか、ほかにこれといつて使ひ途はありませんからねえ。昨日は昨日で、うちの犬に深皿からスープを飲ましてやつたところが、お母さんまたぞろめそ泣き出しましてね、腹立ちまぎれにその深皿を割つてしまひましたよ。『これはもう使へやしな。犬が嗅ぎ知つちまつたもの』といふんです。ねえ、一つ伺ひますが、ヴァレリアン・ニコラーエヴィチ、君は物理學を知つておますね、一たい何かを嗅ぎ知るなんて藝當が出来るもんですかね？ ただ嗅いぢまつたとか、嗅ぎ出したとかならいざ知らず、嗅ぎ知つたとは一たい何事です！ こんな事を言ふのは馬鹿だけぢやありませんか！」

「でも、何もわざわざそのお皿で飲ませてやらないでもよかつたのでせう？」

「そりやそんなものです、が何だつてそれをしちやいけないんです？」

「お母さんに悲しい思ひをさせないためにですよ。」

「へえ、あなたはさうお考へですかね！ 僕に言はせると、苟も奸策に類したことは正直な人間の

敢て潔しとせざるところですよ。」

「ぢや、馬肉のハムを年寄りのお母さんの目の前で食べるのは潔しとするところなんですか？」

「いやあ、これは！ そんなことまでも愚痴をこぼしたんですね！ 實は僕、知識慾が旺盛なあまり、知合ひの韃靼人のところで燻製にした仔馬の肋肉を買つたんです。正直のところや實に珍味ですよ。僕はダーリヤ・ニコラーエヴナ・ビジューキナと二人で朝食にその肋を二本平らげて、あの女の子供たちにも食べさせたんですが、残る一本をお母さんにお土産に持つて歸つたところが、知らぬが佛のお母さんは舌鼓を打つて食べましてね、大いに褒めて呉れましたつけ。そのあとで不意に種明しをしたところが、どえらい騒ぎになりましたねえ。」

「一ぱい食はせたつて譯なのね」とセルボローヴァはにつこり笑つてダリヤーノフに向つて言つた。「まあそんな話は食事前にはやめにしませうよ。……それよりか早く食事に参加ませう。」

「いや、さつきも申し上げましたね、僕は行きませんつて。僕は行かんです。」

「折角の心盡しの御馳走に何だつてまた腹をお立てなさるの？」

「別に腹を立てるわけぢやありませんがね、僕はこの場を離れる譯に行かないんです。何しろ僕は今のところ八方塞りの態たらくでしてねえ。」

セルボローヴァは小聲で笑ひだしたが、そのままダリヤーノフに腕をあづけると、教師を骨のそばに残して食事に行つてしまつた。

聖餅焼きのプレボテンスカヤ後家さんは、寸の詰つた小つちやな顔をして、二六時ちゆうびつくりしてゐるやうな善良な眼をして、その眼蓋の上にはフランス語のアポストローフみたいな恰好をした眉毛が蔽ひかぶさつてゐる——ざつとかうした御面相の小柄な婆さんだが、ダリヤーノフの顔をみると、先程は長いことノックなすつたのにさつぱり氣がつきませんで失禮しましたと詫びを言ひ、すぐそれに續いて彼が坐つてゐる食卓の上へかがみ込んで、ひそひそ聲でかう訊いた。

「うちのヴァルナーシャにお會ひになりましたか？」

相手は、ええ會ひましたと答へた。

「あの子は、方圖もなく、わたしを責め殺すんですよ、ヴァレリヤン・ニコラーエヴィチ」と婆さんは訴へた。

「まさかそれほどでもありますまい。あなたは何をそんなによくよされるんでせうな？ あの子はまだ子供なんですよ。もう少し年がいつて、嫁さんでも貰つたら、また變りますよ。」

「變りますつて……。駄目でございますよ、第一、ねえあなた、あの子に嫁を持たせるなんて、とても出来た相談ぢやありませんわ。あの子はもう今までに、方圖もなく氣性がねぢけてしまつたんで

すもの。神様といふものを、方圖もなく信じないんでございますよ。どんな精進日でも、あらうことか御受難週にまで、牛乳や牛肉をそりやもう方圖もなく食べるんでございますよ。それにわたしは、あなた、本當のところを打割つて申しますとね、夜になるともう方圖もなく骸骨が怖くつてね。しよつちゆう骸骨のことで方圖もなくぶるぶる震へておますんですよ。……」

小柄で内氣なこの婆さんの小さな兩眼の上で、例の黒みがかつたアポストローフがびりびりと震へたかと思ふと、彼女はぶるりと一つ身ぶるひをして、舌もつれのした言葉をつづけた。

「それにまた、何でございますよ、しよつちゆうわたしは、方圖もなくそりや怖い夢を見てばかりゐるんでございますよ。あまりの怖ろしさに、目が覺めるが早いから、『聖シメオン様、わたくしの夢を占つて下さいまし』つて、囁かすにはゐられない程です。それでも、もし家の中に話相手があれば、まだしも我慢のしやうもありますけれど、御覽のとほりわたしときたらしよつちゆう一人ぼつちで、二六時ぢゆう骸骨と一緒に暮してゐる始末なんです。そりや何ぼわたしだつて、お葬ひの濟んだ亡者なら怖くはありませんけれど、うちのヴァルナーシャがいつかなお葬ひを承知しないんでございますよ。」

「まあまあ、さうあの人に腹をお立てなさるな、——あんないい男ぢやありませんか。」

「そりやあね、いい子ですわ、いい子には違ひありませんわ。わたしだつて何も、あの子が悪い子だなんて根も葉もないことを言ふつもりはございませんわ。わたしはあの子の幸福な母親でしたし、あの子にしたつて、哲學科の六年へ進級するまでは、そりやもう方圖もなく、わたしに親切にし

て呉れました。その頃のあの子は、寄宿から歸省します度に教會へもお詣りしましたし、わたしもあの子をサヴェーリーイ様のところへ連れて参つたりしたものです。サヴェーリーイ様はあの子を方圖もなく可愛がつて下さいましたほどで、お閑な時などは何かと勉強のお力添へをして下さつたものでしたのに、突然手の裏を返したやうに——母親のわたしにもあの子にどんな魔がさしたものでやらんと合點が行きませんけど、變に利口ぶつたことを申すやうになりましたのです。それ以來といふもの、寄宿から歸つて参ります度ごとに目に見えて段々わるくなりまして、學句の果には善い事と見れば一々齒向ふやうな始末になつて、ザハトリヤ師のところまで洗禮がありました時なども、あらうことか當の法主様に喰つてかかるやうな不料簡を起しましたのです。ああ、わたしはこれが苦になつてなりませんですよ、皆さま！」と婆さんはさも辛さうに額に八文字を寄せて言葉をつづけた。——「今度はまた、ついをとつひわたしの耳にはいつたのですけれど、あの收税役人の妻女のビジューキナと二人して、あらうことか蛙にソースをかけて食べましたのですよ！ ああ！ 本當に情なくつて情なくつて！ 母親の身にとつて、これは何といふ辛いこととございませう？ それがまたお腹が減つて喰べるものがないとも言ふのでせうか？ あの子は墮落してしまつたので御座いますよ。あなた方はどうお考へになりますと、わたしとしましてはあの子が墮落したとより他に考へやうが御座いませぬのです。ザハトリヤ様は『家庭説教』の折りわざとあの條りをわたしに讀んで聞かせて下さいました——或る立派な息子が魔に憑かれたところが、十人がかりでも抑へつけることが出来なかつた、といふあのお話でございます。ヴァルナーヴァもそれなんですございませう！ もう誰の手でも抑へつけるわけ

には参りませんわ。そのくせ怖ろしいほど臆病者で、つい近頃まで、まだ一年とは経ちませぬけど、わたしは夜になつてあの子が出掛ける時には自分で送つて行つてやつたもので御座います。ところがあの子は自制を失くしますと、『僕は仲間を賣りはせんぞ！ 斷じて賣りはせんぞ』などと喚き立てましてね、こんな風に腕を振り廻したり、『いや、どいつもこいつも叩き斬るんだ、叩き斬るんだ！』なんぞと口走るんですございませう、わたしはこんな辛い日を暮らして、今にもあの子が警察へ引つ張られて牢屋へ送られはしないかと、しよつちゆうびくびくしてをりますのですよ。」

聖餅焼きの婆さんは又もやちよろりと姿を消したかと思ふと、臺所へ行つて涙をハンカチで拭いて、再び姿を現して、またぞろ喋りはじめた。——

「實を申しますとわたしは、毎日々々靈水をあの子に飲ませてをりますの。もちろんあの子はそれとは感づかずに知らぬが佛ですけど、わたしは飲ませてやつてをりますの。ただ一向利目がございませぬのですわ——もつたない話でございますよ。サヴェーリーイ様はいつもかう仰しやいます。『あの子はどこか遠いところへ、タシケントへでも追つ拂ふのが一番いいのちや』とね。『それはまた何故でございませう、まだ母親の慈愛で直せるものかどうか驗して見ればなりませぬのですか？』とわたしがお伺ひを立てますと、『いや、あれは、慈愛などで直る見込はないからう』とのお言葉です。法主様は、あの子には情に感じる働きが全くないと思つておいでなのでございませう。けれどわたしの身してみますれば、それならそれで益といふと益が増しますので……』と言ひさして、婆さんは又もや姿を消した。

「なんて不仕合せな人でせうねえ！」と、出て行く婆さんの後姿を見送りながら若い夫人がささやした。

「全くその通りです」と相手は合槌を打つて、更にかう言ひ添へた。「ところがあの大馬鹿ときたら未だにふんぞり返つてゐて、食事にも出て来ないんですからねえ。」

「あなた呼びに行つてらつしやい、本當に引つ張つていらつしやい。」

「駄目ですよ、まるで馬みたいにじやじやばつてゐて、とても来やしませんよ。」

「いいえ、来ないことがあるもんですか？　ぢやかう仰しやいな、これはわたしの命令だつて。わたしは實は祕密警察の手先で、今すぐここへ来るやうにあの人に命令してゐますつて。さもないと、あの人がペテルブルグへ出るつもりだといふことを密告しますつて。」

ダリヤーノフはからからと笑ひ出して、席を立つてヴァルナーヴァを呼びに出て行つた。一方教師は、その時までの時間を使つて例の寶物をどこかへ匿してしまつてゐたが、そろそろ健康な食慾を感じだした矢先だつたので、再度食卓へ招かれる段になると、意地を立て通すのに些か努力を要したけれど、それでもすぐにはうんと言はなかつた。

この物好きな殉教者を、自縛自縛の窮境から救ひ出すため、使者に立つた青年はさも曰くありげに相手の耳もとへかがみ込んで、セルボローヴァの言つた通りであることを耳うちした。

「あの人もスパイか！」と、顔一めんさつとばかり紅潮させて、ヴァルナーヴァは大聲を上げた。「さうなんですよ。」

「おまけにてつきり……」

「何です？」

「てつきり君も？……」

「いかにも、僕もさうですよ。」

ヴァルナーヴァはさも親しげに相手の手を握りしめて、かう言つた。――

「いや感謝しますよ、よくも打明けて下さつた。」さういふと彼は、一點の疚しさもない本心から、唯々として食事の席へ向つた。「さあどうなりと御勝手に、僕は君に服従しますよ。」

一五

芝居はまんまと當つた。ヴァルナーヴァは食卓へ現れる口實が出来たばかりか、威風堂々と登場する口實までが出来たのである。彼は衆寡敵せず敵の手に落ちた勇將の如き概を以て、ダリヤーノフと向ひ合つた食卓の狭い一端に席を占めた。その間にはさまつた第三の端にはセルボローヴァが着席し、第四の端は空席のままだった。聖餅焼の婆さんは決して息子と食卓をともしないのが例で、今も客たちと席を共にせず、給仕をするだけであつた。婆さんは今やどつさり學問のある息子を目のあたりに仰ぎ見るを得て頗るもつて恐悦のていで、喜色と憂色とがこもこもその面上に角逐を演じて、

その脛は赤く腫れあがつてゐた。下唇は小刻みにふるへ、よぼよぼのその兩脚は歩くのぢやなくてのべつに走り廻るのだつた。おまけに彼女は走つてゐるときも立ち停つたときも、自分の顔が誰にも見られないやうな向きを取らうと一生懸命に努めてゐた。

「かうなつては貴女にじつとしてゐて頂くわけには行きませんか？」とダリヤーノフは巫山戯てたづねた。

「いいえ、とても出来ませんです、ヴァレリヤン・ニコラーエヴィチ」と婆さんは浮々した調子で答へ、又ぞろ部屋から駈け出して行つて、誰に頼まれたでもない涙を小さな臺所で、大急ぎでこくりとこくりと嚙み込んだ。

お客さん達は婆さんを傍に引きつけて置かうと悪だくみを廻らして、彼女の料理を褒めそやすのだつた。ところが婆さんはそのお褒めは當りませんと謙遜して、わたしはほんの簡単な手料理しか出来ませんと言ふのだつた。

「ところが、その簡単なお料理が大そう結構なのですわ。」

「いいえ、どうして美味いことが御座いますものですか。ただ取柄は、からだのために一番いいぐらゐなものだと皆様さう仰しやつて下さいますけど、それとてもどうか分つたものでは御座いませぬ。論より證據、このヴァルナーシヤなんぞは、しよつちゆうこの料理ばかり食べてをりますけれど、御覽のとほり骨と皮ばかりで御座いますよ！」

「ふむ！」とヴァルナーヴァは答めるやうな眼附で母親を一瞥してかぶりを振つて見せた。

「本當にお前さんはどうしたんだらうねえ！ 全くのはなし、ねえヴァルナーシヤ、お前さんは骨と皮だよ！」

「御丁寧に二度までそれを仰しやるのですか！」と教師は切つて返した。

「何でもないぢやないか、ねえヴァルナーシヤ、何のお前さん腹を立てることがあるものかね？」

朝はお前さん牛乳を方圖もなく飲みなされるし、お茶は白パンでもつて方圖もなく食べなされるし、焼肉や麥粥だつてもその通りにしてあるのだけれど、一たん食卓を立つが早いか忽ち元の空阿彌で、方圖もなく骨と皮ばかりだもの、——てつきり何かの病氣ですよ。ねえお前、願ひだからわたしの言ふことを聽いてお呉れでないか、息子や……」

「お母さん！」憤然とした大音聲でもつて教師は彼女を遮つた。

「何をさう腹を立てることがあるものかね、ヴァルナーシヤ？ わたしのお願ひといふのはね、お前あさ起きがけに、『主よ、ねがはくは我が空虚をば満たしたまへ』とお祈りして、それからなにを頂くやうに……」

「お母さんてば！」前よりもなほ大聲でプレポテンスキイは呶鳴つた。

「まあお馬鹿さんだことねえ、何をさう腹を立てるのさ？ わたしはかう言つてゐるだけぢやないか——『主よ、ねがはくは我が空虚を満たしたまへ』とお祈りをして、それから有難い聖餅をお頂き、つてね。と申しますのはねえ皆さま」と彼女はお客さん達の方へ向つて、「わたしは自分とこの子のために、いつも一きれ別にして置くんでございますよ。それはあの世へ参りましてからも母子して一

つ幕屋に住めますやうにと、その願掛けなんでもございませうのに、この子はてんで頂かうともしませんのですよ。一體どうしたことございませう？」

「どうしたこと？ あんたはその譯が知りたいんですか？——ちや申しませう、その譯はね、僕が何處にしろあんたと一つ處に住みたくないからですよ！ いいですか、この世であらうと、ほかの何處であらうとですよ。」

ところが、教師がこの宣言をまだ述べ終らぬ先に、婆さんは眞蒼な顔になつて、わなわなと顫へだし、その途端に祕藏の釉薬のかかつたお皿が二枚その手から滑つて、がちやんとばかり床にぶつかる、粉微塵に割れてしまつた。

「ヴァルナーシャ！」と彼女は絶叫した。「これはお前がわたしと縁を切つた御告げですよ！」

「さう、さう、その通り、縁切りですとも、縁切りですとも！ 此處でさへ僕はもうあんたには厭厭してしまつたんだ。この上は何もあの世ばかりぢやない、たとへ何處の世の涯であらうと、もう二度と再びお目にかかるのは御免ですよ。」

「シッ！ シッ！ シッ！」と聖餅焼きの婆さんは泣く泣く息子をおしとどめ、相手の鼻の下を手の平でびしやりびしやりと叩きはじめた。それは縁切りの文句が耳にはいらぬやうにとの努力だつたが、ヴァルナーヴァは委細かまはず、母親の手の音よりもすつと大きな聲で嗚り立てるのだつた。すると婆さんは聖像の前へ駈けつけて、その力無い手の十本の指をばらばらに開いたまま、御影の前で振りまはしながら、狂亂の體で叫びはじめた。——

「お聴き下さいますな、あれの言ふことを、主よ！ どうぞお聴き下さいますな、お聴き下さいますな！」さう言ひながら、部屋の間隅にばつたり例れて、咽び泣きはじめた。

この見る目も傷ましい、全く思ひもかけぬ情景は、プレポテンスキイ唯ひとりを除いた並居る人々みな胸を掻きみだした。教師は平氣の平左で、相變らず旺盛な食欲をもつて口を動かしてゐたが、セルポローヴァは食卓をはなれて、逃げ出した婆さんのあとを追つて部屋を出て行つた。ダリヤーノフは聖餅焼きの婆さんがアレクサンドラ・イヴァーノヴナに抱きついたのを目にした。そこで彼は立ち上ると、婦人たちのゐる部屋の扉をしめて、自分は窓ぎはに佇んだ。

プレポテンスキイは依然口を動かしてゐた。

「アレクサンドラ・イヴァーノヴナは何時御歸館ですかね？」と彼は、口をもぐもぐやりながら訊いた。

「日が蔭つてからですよ」とダリヤーノフは素氣なく答へた。

「おやおや悠暢なことだ！」とプレポテンスキイは音を引伸ばしながら言つた。

「さうそ、あの人を訪ねてまだトウベローゾフが此處へ来る筈ですよ。」

「トウベローゾフが？ 此處へ？ 僕らの家へ？」

「さう、あなたの方の家ですよ。但し君に會ひにぢやない、アレクサンドリーナに會ひにですよ。」ダリヤーノフは以上の會話をプレポテンスキイには背中を向けて、中庭を眺めながらやつてゐたが、ここぞと教師の方を振向くと、殆ど氣が附かないほどの微笑を透して斯う言つた。——

「ところで君は、やつぱりトゥベローゾフが煙つたらしいですね！」

「僕が？ 僕があいつを煙つたがつてゐるつて？」

「ええ、さう。僕が、あの人が此處へやつて来るつて言つた時、君は鼻まで青つぽくなつたらしいぢやありませんか。」

「鼻まで青くなつた？ 冗談ぢやない、なあに君がそんな氣がしたただけの話ですよ。ぢや僕があいつなんかによびくともしない證據を、今すぐお目にかけますうかね。」

さう言ひ棄ててプレポテンスキイは椅子から身を起して、そそくさと外へ出て行つた。ヴァルナーの自棄くそになつた頭の中に、この瞬間はたして如何なる勇猛果敢な考へが生れて次第に成熟して行つたかは、神ならぬ身の客が夢想だもし得ないところであつたが、親愛なる讀者は次章によつてそれを知られるであらう。

一六

部屋から外へ出ると、プレポテンスキイは小さな納屋の中へ素早く姿を消したが、そこで上衣を脱ぎすけると、乾草の山へ這ひあがり、そこから今度は、天井板を二枚やつとのことこじ開けると、そのかなり狭い隙間から潜り込んだ先は、表からびつちり錠の下りた小さな倉庫だつた。この倉庫に

はありとあらゆる世帯道具が仕舞つてあつた。桶や棚板が置いてある、大きなハムがぶら下げたてある、乾した麝香草や薄荷草やインンドの束が架木の上によきによき突き出てゐる。教師はそんなものには目も呉れず、傾斜した蓋のついてゐる背の高い松材の櫃の上へ這ひあがると、その櫃の中から取り出したのは、まるで鏡を商ふ店にある硝子みたいに清らかな、大形の菩提樹製の平鉢で、それを小脇にかかへると忽ちもとの納屋へ降りはじめた。その納屋には例の薄倅な骸骨が彼の手で頗る巧みに隠匿されてゐたのである。

教師の跡をつけ廻してゐるやうな者は人つ子一人、いな鼠一匹はしなかつたのだが、何しろ當人が前々から「被害」の妄想を描きつけた男だから、萬事につけ安心がならなかつた。そこで彼は天地萬象の眼をくらましてこつそりと身を潜め、例のやりかけた仕事を誰からも邪魔されずに爲あげよう、而も時機を失せず且つ壯大華麗にやつてのけようと、せつせと働きはじめた。かうしてヴァルナーが納屋に籠つた時から、もの一時間ほどたつて、そろそろ表が黄昏れて來た頃、聖餅焼きの婆さんの家の古色蒼然たる木戸にさがつた鐵環が、がちやりと鳴つた。

それはトゥベローゾフの御入來であつた。納屋にひそんでゐるヴァルナーの耳にもありありと、法主の偉大な體軀がずしりずしりと足を踏みしめてゆく下で、玄關口の朽ちた段々が撓つてみしりみしり云ふ音が聞えて來た。それから法主がセルポローヴァとプレポテンスカヤ婆さんに向つて述べる挨拶と祝福の聲が聞えて來た。とはいへヴァルナーは相變らず納屋から出ようともせず、また彼が果して何をやらかさうと目論んでゐるのかも未だ表へ現はさなかつた。

「ところでナインの寡婦^{オホカ}どの、あんたの學者息子はどうしたな？」とサヴェーリイ師は後家さんに向つて口を切つた。後家さんは玄關口の露臺に白い小卓を持ち出したところだつた。一同はその上でお茶を飲むことになつてゐる。

「うちのヴァルナーンシャでございますか？ つい先刻までをりましたつけが、法主様。——きつと怖氣がついて、どこかあなた様の眼から隠れたのでございませう。」

「現在のわが家にゐながら、隠れるなどといふ法があるかな？」

「あの子は、法主様、あなた様をひどく怖がつてをりますので。」

「おやおや、わしを何で畏れることがあるものか？ それより自分を畏れて身を慎しむがよいわい。」とトゥベローゾフは、ダリヤーノフとセルボローヴァに向つて、昨日の眞夜中アヒルラがその冒険を以てこつぴどく彼を仰天させた次第を物語りはじめた。

「誰に頼まれてした事ぢやらう？ 誰に教はつてした事ぢやらう？ 誰の指圖でした事ぢやらう？」と教師は分別して、自分でその間に答へた、——「いいや誰でもありません。自分からヴァルナーン・ヴァンリーイチを懲らしめてやらうと思ひついて、町ぢゆうに噂の種を播きをつたのさ。」

「では法主様、あれはあなた様のお差圖ではございせんのでしたの？」と婆さんがたづねた。

「まあ考へても見なされ。このわしがあのやうな愚かなことを指圖するものかな！」とトゥベローゾフはやり返して、そのまま話頭を他へ轉じてしまつたが、さうかうするうちに更に半時間ほどは流れて、客たちはそれぞれ家路につく用意をしはじめた。ヴァルナーン・ヴァンはなほも姿を見せなかつたが、

その代りには、セルボローヴァの馭者が玄關先へ馬車を廻して來たのと同髪をいれず、教師の潜伏してゐた納屋の戸がぼたりと大きな音を立てて開くと、當の彼が威風堂々と觀客一同の眼前に出現して、彼らの度膽を抜いたのである。

プレポテンスキイは平生どほりの服装をしてゐたが、両手でもつて頭の上に支へ持つてゐるのは、母親のところから分捕つて來た新しい平鉢で、その上には今や整然として例の人骨が載せてあつた。

そもそもプレポテンスキイがこんな荷をかついで現はれたのは一體どういふつもりなのかと、誰しもが決し兼ねて唯呆れ返つてゐるひまに、教師は荷物を頭に載つけたまま歩武堂々と玄關口の前を過ぎ、その上に立つてゐたトゥベローゾフに向つてべろりと舌を出してみせると、そのまま墓地を通つて往來へ出て行つてしまつた。

聖餅焼きの婆さんの家に集つた客たちは唯もうあれよあれよと言ふばかり、この示威行進の成行きはどうなることかと思物せずには居られなかつた。ヴァルナーン・ヴァンのあとについて、彼等がひつそり閑とした往來へ出てみると、教師は靜かにそろりそろりと歩を運びながら、頭に載せた荷を用心深くそつと支へてゐたが、その有様はさながらそれが乾枯びた骨を載せた唯の板ではなくて、壊れやすい高價な皿かなんぞの中に、更にもつと高價な酒かなんぞが満々と縁まで溢へてある、といつた感じだつた。とその時うしろの方から突然、息切れで跡絶えがちの小さな泣聲がきこえて來て、客たちの背後に、眼も鼻も涙でくしゃくしゃになつた聖餅焼きの婆さんが姿を現はした。

※ ナインの寡婦——ルカ傳第七卷十一以下を参照。

氣の毒なこの老婆はわなわなと身をふるはせ、五本の手の指の先を一緒くたにぎりぎりとして揉みしだきながら、かうささやくのだった。――

「まあどうしたんだらうねえ？ 一たい何を町なかまで擔ぎ出したんだらうねえ？」

さう言ふうちに、事の次第を見て取つた彼女は、ぎやつと一こゑ不氣味な悲鳴を上げると、年に似合はぬ章駄天ぶりで息子のあとを追つかけはじめた。よぼよぼの婆さんが跳び上つたり撥ね上つたりして駈けてゆく有様は、飛び方の下手な鳥が舞ひ上る前に地上でウォームアップをつけてゐるのに髣髴たるものがあつたが、一方ヴァルナーヴァは相變らずそろりそろりと歩いて行く。だがそれにしたところで、この婆さんが何ぼ馬力をかけたにしろ果して息子に追いつけるかどうかは、多大の疑問の餘地を存してゐた。といふのは息子はもう往來のあつちの端まで行つてゐるに、婆さんはやつと今こつちの端を出るところだつたからである。首尾よく参りませうや参りますまいや――の際どい瀬戸ぎはで、ひよんな事が持ちあがつて、この行列や追つかけの場面に、がらりと思ひがけないどんでん返しを打たせたのである。

何を思つたか知らないが、とにかく後家婆さんが疾風の勢ひで學者息子のあとを追つかけたした恰もその時、どこやらすつと高いところで、こんな陽氣な大音聲が響きわたつたものだった。――

「ヤエイ！ ウル・ル・レ・レ。その男を殴るな！ 殴るな！ 殴りなさんな！」

その場面に居合せた一同は思はずその叫び聲のした方角を振り仰いだ。覺れば隣の屋根のてつぺんに襤褸を着た男がのぼつてゐて、細い竿を一本手に持つてゐる。よく獵師が鳩が飛び方を覺えるまで

威かすのに使ふあの竿である。この大音聲を發した男は、誰あらうこの古^{スクレイ、ゴロド}市の金棒引きで何でも屋で無一文の空つけつで、綽名を萬屋^{ばんや}のダニールカと呼ぶ、のらくら者の町人だつた。彼はちやうどその時、自分の飼鳩を威かしてゐたのだつたが、皆様の御座興までに、序でに教師まで威かしてのける機会を逃さなかつたわけである。萬屋のダニールカの目的は上乘すぎるぐらゐ巧く達せられた。といふのはプレポテンスキイが、この警戒の絶叫を耳にするや否や、忽ち歩調を一變して、牡鹿のやうなスピードで突進し始めたからである。

猛烈な勢ひでヴァルナーヴァが空つぽの往來を駈け出すと、それと一緒にその頭上の平鉢に載つてあつた例の骨も、われ劣らじと躍り出し、跳ね上り、四方八方へばらばらと散亂しはじめた。ところが悪い時には悪いもので、一難いまだ去ること遠からざるに、そんなのは土臺くらべ物にならなほほどの大災難が行手に持ち受けてゐたのである。他でもない、とつっきの四辻のところ、教師ヴァルナーヴァの怯え立つて白黒する兩眼の前にぬつとばかり、平生の巨軀の二三倍はあらうと思はれる大きさに立ちはだかつた大入道は、鬼神をあざむく彼の補祭アヒルラその人であつた。

諺に曰く、前門の虎、後門の狼。

可哀さうに教師はアヒルラの姿を一目見るなり、その兩脚がすくみ上つて動かなくなつてしまつた。ところが一瞬間の後には、まるでぎゆつと壓しつけられたゼンマイのやうにその兩脚がぶるりつとしたかと思ふと、したたかな跳躍一跳び二跳び三跳びには、平靜状態にある人間なら十ぺん跳んでも届かないやうな距離にまで、ヴァルナーヴァを運び去つてゐた。そのお蔭でヴァルナーヴァは殆ど危地を脱した形だつた。といふのは、今や彼は例の消費税吏の妻君ビジュニーキナの家のうちやうど窓下まで来てゐたので、おまけに何たる幸運ぞや、當の學者婦人が開け放つた窓邊に立つてゐたのである。

「これを取つて！」と、せいせい息を切らしながらプレポテンスキイは絶叫した。「僕あスパイと坊主に追つかけてらるんですつ！」さう言ひながら彼は骨を載せた平鉢を窓の中の彼女の手へ押しつけたが、自分は今もうへとへとでそれ以上は一步も動けず、壁へぐつたり寄りかかつたところへ、丁度そのとき追ひついたアヒルラが、これも息を切らしながら、彼の手をぐいと掴んだ。

補祭と教師がかうして肩を並べた有様は、やつと鬼が子をつかまへたところで一休みしてゐる友達同士といった風だつた。補祭の面上には些かの怒氣の跡もなく、寧ろ愉快さうな顔つきだつた。ふうふう言ひながらあたりを見廻してゐた彼は、道のまん中に埃のなから二本によつきり突出てゐる人間の肋骨に眼をとめると、プレポテンスキイに向つてかう言つた。――

「おいどうしたね、お前さん早くあの大事な距アシトウゲル骨を拾つたらいいぢやないか？」

「向ふへ行つて下さいよ、さうしたら僕ひろひますから。」

「なある、合點だ。ぢや行くとしようか」と補祭は、持ち前の開けつびろげな虚心坦懐さでもつて

窓の下へ歩み寄ると、爪先き立ちに部屋の中をのぞき込んで、かう言つた。――

「一言申し上げときますがね、相談相手の奥さん、この教師の味方をなさるなあまつたく餘計なお節介といふもんですぜ。」

ところが、この相談相手の奥さんから應分の返事があると思ひきや、アヒルラの前にすいと現はれたのは他ならぬ自由主義を奉ずる消費税吏のビジュニーキンで、それが例の骸骨の髑髏を補祭につきつけて見せた。

「お願いします、後生だからそれだけは仕舞つて下さい、さもないと私は本氣で腹を立てますよ」と慇懃な調子でアヒルラは頼んだが、その返事の代りに家の中からは無禮きはまる高笑ひが聞え、窓ぎはに突立つてゐる當の消費税吏も、矢張り笑ひながら髑髏の顎をがくりがくりと鳴らしてゐた。

「この異端者どもめ、ぶつ殺して呉れる！」すばりとアヒルラはさう言ひ放つと、礎のすぐ横にあつた巨きな丸石を雙手に掴み上げて、大丈夫二十五貫はあらうと見えるこの爆弾を是が非でも無禮な奴ばらに投げつけずには措かぬ勢ひだつたが、ちやうど彼が兩眼をぎらつかせて、まさに件んの大石塊を放たんとしたその瞬間、背後から何者かがぎゆつと彼の手を掴んだかと思ふと、聞き覚えのある聲が權柄高にかう響いた。――

「やめんか！」

それはトウベローゾフの聲だつた。サヴェーリイ法主がおつがない顔をして、忿怒と息切れとでわなわなと身を顛はせながら、立つてゐたのである。アヒルラは師の命にしたがつた。彼は激怒のあま

り眞赤になつた兩眼で消費税吏をぎろりと睨めつけると、力任せに巨石を傍へ投げつけたので、その機みに石はものの一吋五分ほども地中へめり込んでしまつた。

「家へ歸れ」とサヴェーリーイ師は彼の耳にささやいて、自分もその場から遠ざかつた。

アヒルラは口答へもせず、そのまま大人しく極り悪さうに家路についたが、その様子はさながら行儀のいい生徒が悪戯をしたところを捕まつたみたいであつた。

「やれやれ！ 何たる愚かしい苦々しい出来事ぢや！」トウベローゾフは、先刻まで話相手にしてゐたダリヤーノフが自分に追ひついて肩を並べた時、殆ど息もつかずにさう言つた。

「いや、御心配には及びませんよ。このまま無事に納まるでせうから。」

「無事に納まるですと？ いいや、アヒルラは裁判沙汰になるでせうて！ あんたの耳には入らなんだかな、あの男が石を振りあげながら嘸鳴つた文句が？ あの男は一人のこらすぶつ殺すつもりだつたのですぞ？」

「ところが見てゐて御覽なさい、萬事一場の笑ひ話で鼻がつかますから。」

「どうしてどうして。なかなか笑ひ話で鼻がつくどころではありませんわい。第一これは笑ひごとではなくして烏澁ウセの沙汰です、そこへ世間のやくざ者どもが附け入つて來るに相違ありませんわ。」

そこで法主は歩を速めると、杖の先で不興氣な蔓々たるC字形の引つ搔き傷を地面につけながら、まっしぐらに家路についた。

扱てこの年代記の續く第二篇では、右のいきさつがどういふ結末になつたか、この二人の豫言者のうちどつちが言ひ當てたかを、追々に説くこととしよう。

第
二
編

聖メフォーヂイ・ペスノリススキイの日の幕をとちた夜に次いで、やがて明けはなれたその朝は、晴朗で穩かな一日を約束してゐた。それどころか、この分なら今日はこの世にありとしあるもの悉くが安穩に違ひないと、そのやうな期待もてる朝だつた。つまり天象地象も安穩であらうし、またこの年代記の第一編でわれわれの馴染になつた古^{メジールイ・ゴッド}市の人達の心も安穩であらうと、そんな氣持のする朝だつたのである。當の法主もやはりさう確信してゐた。昨日の疲れは、あとで手厚く彼をねぎらつた。すなはち彼はぐつすりと眠り、平和な夢を見て、あさ目が覺めると、ひよつとしたら自分が昨日した心配は單なる取越苦勞にすぎなかつたのかもしれない、ひよつとしたら神様は、これまでも度々さうなされたやうに、あの暗雲をも吹き拂つて下さるかもしれない、實際この世に暗雲の垂れをめることは随分あるが、そのため禍の生じた例はないではないか、などとそんな考察をめぐらしたものである。

『さうとも、わしらはもともと性悪な民ではなくて氣立の善い民ぢやからな』と老人は、この性悪ではなくて氣立の善い民のため朝の彌撒を修すべく、至極安穩な氣分でお寺へ向ふ途々、しきりにそんなことを考へてゐた。ところがこの和やかさは實は見掛け倒しだったのである。靜かな水の面の底ふかく、鰐が居眠りをしてゐたのである。

トウベローゾフは彌撒を濟ませて家へ歸ると、前夜ねむつたその同じソファに坐り、例の『覺え書』をしたためたその同じ卓子に向つて、お茶を飲んだ。法主夫人はただ良人の給仕をつとめるだけであつた。つまり彼女が一碗のお茶と小さな銀盆を良人に差上げると、その銀盆の上にサヴェーリイ法主は、ポケットに入れて持ち歸つた聖餅を載せたのである。

思ひやりの深いナターリヤ・ニコラーエヴナは、良人の安らかな憩ひを尊重して、下手な問でも出して彼のおごそかな物思ひの邪魔になつては大變と、畏れ慎んでかしづいてゐた。彼女は小間使の娘に向つてひそひそ聲で、旦那様のパイプに二本ともジュニコフ商會の刻煙草を填めて、お盆の隅へ出してお呉れなと言ひつけると、片手を頤の下に支つて、法主が一杯目を飲み終へて二杯目を所望するのを待つてゐた。

ところがその所望を待ちもあへず、彼女の注意は時ならぬ物音の方へ奪はれてしまつた。どこか彼等の家の近所で急ぎ足で駆ける人の足音や、がやがやと入り亂れた話聲がして、時にはそれが激昂した叫び聲に變るのであつた。法主夫人が自分の寝間の窓から覗いて見ると、その物音や叫び聲は、非常な速力で、しかも眞直ぐ彼等の家をめがけて押し寄せて來る一群の人々が發するものだつた。彼等へた。

は歩きながら押し合ひへし合ひ、腕を振りまはし、いがみ合ひ、ふとぢやぢや張つて動かなくなつたかと思ふと、また突然ほとんど駆け出すやうにして前へ動くのだつた。

『あれは何だらう?』と法主夫人は思つて、廣間の方へ出て行くなり、良人に向つてかう言つた。――

「御覽なさいまし、サヴェーリイ様、何だか大勢してやつて参りますよ。」

「いやなにお前、民は夥しけれど人物は絶えて無し、ぢやよ」とサヴェーリイは落着き拂つて答へた。

「いいえ、冗談ぢやございませんよ。とても大勢の人ですわ。」

「まあ道中氣をつけて、散々歩き廻つたがよからうて。ところでお前、お茶をもう一杯呉れんかのう。」

法主夫人はコップを手に取ると、それに新しいお茶を注いで良人の前に出してから、又もや窓邊へ歩み寄つてみたが、わいわい騒いでゐた群衆の姿はもう見えなかつた。その一團の代りに、わづか三四人の男がその邊に思ひ思ひに突つ立つて、さもさも困つた途方に暮れたといった顔附で、じろじろトウベローゾフの家を眺めてゐた。

「さあ大變、もしやもう何處か自家がめらめら燃え出しちやありませんかしら、ねえサヴェーリイ様!」と、怯えあがつた法主夫人は良人の部屋へ駆け込みながら絶叫したが、とたんに闕の上で立ちどまると、卒然として事の次第を悟つた。

法主夫人が目にしたのは、自分の家の中庭に補祭のアヒルラが、だぶだぶの法衣の袖を打振り打振

り飛ぶやうに疾驅しながら、例の萬屋のダニールカといふ町人の耳朵をぐいぐい引つ張つて來る姿だつた。

法主夫人はこの光景を良人に指さして見せたが、法主がソファから立ち上るひまもあらせず、控室の扉がどしんと荒々しく開いて、司祭長邸の廣間へぬつと姿をのぞかせたのはアヒュラで、そのすぐ背後にはすつかり度を失つて满面紅潮したダニールカの耳を、ぐいとひつさげて引従へてゐる。

「法主様」とアヒュラは、ダニールカの耳を放しざま、兩の手をトゥベローゾフへ差出しながら、口を切つた。

サヴェーリイは彼を祝福した。

アヒュラのあとからダニールカもはいつて來て、まるで一緒にその祝福を受けたやうな形になつた。すると補祭はぐいぐいと町人を二歩ばかり退らせ、又もやその耳をしつかり掴んで、かう喋りはじめた。

「サヴェーリイ様、まあ一つ考へてみても下さい、往來を歩いてゐると、急にがやがやいふ人聲が聞えました。町人が雨のことを話し合つてゐるのですが、その連中が、あの昨夜の雨はお師匠様の雨乞ひの祈禱のあとで神様が降らせなさつたのだ、と申しますと、此奴めがへとアヒュラは左手の人さし指を、變な目配せをしたダニールカのちやうど鼻の頭へ當てがつて、此奴めが、そんな馬鹿なことがあるもんかと申すのです。」

トゥベローゾフは顔を上げた。

「此奴めが、あらうことかあるまいことか、こんなことをほざきやがつたんです」と、補祭はぐいとダニールカを引張つて又しても言ひ出した、「きのふ村團で雨乞ひの勤行があつてから降つたやうべの雨は、ありや決してお祈りのお蔭で降つたんぢやない、つて言ふんです。」

「そんなことを何處で教はつて來たのぢやな？」とトゥベローゾフは素氣ない調子でたづねた。すつかり動顛してしまつたがダニールカは黙りこくつてゐた。

「ねえ、どうでせう、法主さま！ 此奴めが申すには」と補祭はつづけた、「あの雨の降つたのは、ただ單に自然の力だつていふんで。」

「どうしてそのやうな判断をしたのぢやな？」と、トゥベローゾフは口をつぼめて手の平に残つた聖餅の粉を吹き寄せながら、さう呟くやうに言つた。

「疑惑からでございます、法主さま」と、ダニールカは小さくなつて答へた。

「疑惑であらうと自惚れであらうと、お前のやうな無學文盲の輩の知つたことではないわい。さればこそ因果應報と言うてな、お前も分に相應した痛い目に遭うたわけぢやよ。それが分つたら、ここな口輕男め、さつさとわしの家から出て失せい。」

異端者きどりのダニールカをわが家の敷居から追ひ出してしまふと、司祭長はふたたび端然と腰をおろして、無言のままお茶の残りを平らげたが、それが逐一片づいたあとで、やつと補祭アヒュラに向つてかう言つた。――

「ところでお前は、なあ補祭どん、まだすつとこの先もかうして亂暴を働いて行くつもりかな？」

餘計なお節介はすつぱりやめにして、腕に物を言はせることはするでない、お前に篤と言ひきかせたのはこのわしではなかつたかのう？」

「それが駄目なんで、法主さま。どうしても我慢がならなかつたんです。だつてわたしは、あの男が神様や風土記のことをどえらく悪しざまに言ひやがるのをお師匠様に申し上げようと、随分ながい間かんがへてゐたんですからねえ。けれど初めのうちは、あいつの馬鹿に免じて、何もかも今の今まで大目に見てゐてやつたんです。」

「なるほど、大目に見てやる必要のない時に大目に見てゐてやつたといふわけぢやな。」

「本當なんです、ずゑぶん大目に見てやつたんです。ところが彼奴が、儀式のことを兎や角いひ出すのが耳にはいると……」

「なある。そこでお前は一體どうしてやつたのかな？」

法主はにつこりした。

「もう、どだい堪忍袋の緒がきれちまつたんで。」

「なある。そこでそれ、みんなの見てゐる前で殴り合ひをやらかさねばならなかつたのかな？」

「みんなの見てゐる前でやつたのが何でさう悪いんでせう、法主さま？ わたしも祭壇に仕へる身ですから、場所がどうあらうと信仰を護るのは義務ぢやありませんか。あのニコライ聖人だつて、現にみんなの見てゐる前でアールイを……」

「それは聖ニコライの話ぢや、お前などとは譯が違ふ」とトゥベローゾフは彼を遮つた。「しかと

心得て置くがよいぞ、お前のやうな阿呆はな、阿呆は阿呆なりの分際をわきまへて、他人のことに喙を入れずにおれば充分なのぢや。それを何でさう撞木杖を振り廻すのぢや？ 撞木杖には頭と先と端が二つあることをお前は忘却したとみえるな？ この駱駝めが、いまだにその馬鹿力を頼みにしてゐるのか！」

「はい、當てにしとります。」

「當てにしとると？ それなら今後はもう當てにするなよ。お前を救つて呉れたのはお前の腕力ではなくして、それ、これが、これがお前を救つて下されたのぢやぞ」と法主は、補祭の法衣の袖を引つ張りながら言つた。

「何と仰しやいます、法主さま、それはわたしをお叱りになるのですか？ 何ぼわたしだつて、自分の僧位の尊さぐらゐは心得てゐます。」

「ほほう！ 自分の僧位の尊さを心得てをるとな？」

さう言ひながら法主は補祭の方へ一歩すすみ寄つて、手の平で自分の膝頭をはたと打つと、かうささやいた。――

「ではお伺ひ申すがな、補祭どんや、あの乾物屋の店先で、番頭どもと一緒になつて腰掛けて、巻煙草をすうてをつたのは、あれは一體どこの御仁ぢやな？」

補祭はへどもどして、口から放題を並べ出した。――

「いやあれは、わたしは本當にその、法主さま……なるほどあれはわたしが悪かつたんです、け

れど、實をいふと、つまりその、法主さま、ありやほんの不注意でやつたことで、まつたくのその、不注意でやつたことでして。」

「しやれのめして巻煙草を吹かしよるやうな伊達な補祭が、どこの世界にをるものか、向後は氣をつけるがよいと今度會うたらあの男にさう言つてやるがよい。」

「いいえ、まつたくのところ法主さま、決してもうそんな心算ぢやなかつたんで。なんでわたしがあんな事得意がりなど致しませう？ 現に煙草の戒を破つてゐるのは、僧職の中で何もわたし一人ぢやないんですから。」

トウベロゾフは補祭の頭のでつぺんから足の先まで、意味深長な眼差しでじろりと眺めたが、やがてぐいと頭を反らすと、彼にかう訊いた。

「さう言ふのは一體どのやうな意味かな？ では法主どん、お前さん自分でも煙草をすふと言ふのかな？」

補祭は閉口してしまつて、何とも返事が出なかつた。

トウベロゾフは、彼の愛用する三本の櫻の長煙管が立ててある部屋の隅を片手で指して、かう言つた。

「なあ補祭どん、このわしはどうぢやらう、煙草をすふかな？」

補祭は黙つてゐる。

「御苦労ぢやが言うてみて呉れ、わしは煙草をすふのう？ わしはパイプをすふのう？」

「パイプをすはれます」と補祭は答へた。

「パイプをのう？ 結構ぢや。そのパイプをわしは何處ですふかのう？ わしは家にゐるとき喫ふのう？」

「家ですはれます。」

「時によるとお客に行つたとき、仲のよい友達のところへ喫ふのう。」

「お客に行かれた時もすはれます。」

「ぢやが店さきで番頭どもと一緒になつて喫ひはせんぞよ！」椅子のもたれへ身を投げ返しながらさう大音聲を上げたトウベロゾフは、意味ありげに手の平を指で叩きながら、かう附け加へた。「さあ自分の場所へ立ち戻つて、せいぜい自分のことを氣を付けるがよい。わしはな、すねふんと幾度も幾度もお前の血氣を抑へて來たのう。ぢやが今度といふ今度こそは氣を付けるがよいぞ。寺のしきたりも日に日に新しうなりをる、裁きの仕方今までは變つて來るし、慣はしも自ら別になつて來るもので、どのやうな事も一つとして陰にかくして置けんやうになる、一切合財のこらす明るみに出るやうになる。その時はもう、このわしとでもお前のかばひ立ては出來んからのう。」

さう言ふと法主はその巨きな片脚でもつて薬椅子の上につつ立つて、用心しいしい片方の手で黄色つぽいカナリヤの籠をおろしはじめた。

『ちえつ！ なんてこつたい、せつかく信仰を擁護したのに、またもやすかを喰つちやつたわい！』とアヒルは獨り言をいつたが、そのまま法主の家を出ると、急ぎ足で小さな黄塗りの家へと向つて

行つた。その家の開けはなたれた窓々からは、淡色髪の子供の頭がいつぱい折り重なつて覗いてゐる。補祭はあたふたとこの家の昇降口を昇つて、それから玄關へ通ると、お額を梁でこつんことをして、さて天井の低い廣間へはいる扉をあけた。

その廣間では、小さな腕を後手に組んで、かさかさに瘦せた小つぽけなザハリーヤが歩き廻つてゐた。司祭は祭服の下衣を一着に及んで、その落ち窩んだ胸の上に長い銀鎖を垂れてゐる。

ザハリーヤ師の家へはいつて行つたアヒュラの顔附は、法主殿の家へはいつて行つたときとはまるで違つてゐた。またその歩きつきもまるで別物だつた。トゥベローゾフの家を出たときの補祭の當惑顔は、ザハリーヤ師の家に近づくにつれて消えて行つて、鬨際にあらはれた時は、ひどく穩かな顔附に一變してゐた。補祭はさもどかしさうに、鬨をまたがぬうちから口をひらいた。

「ねえ、ザハリーヤ和尚！　ねえ……親愛なる和尚さん。……ねえつてば！……」

「どうしたつていふのだね？」と、柔和な笑みを浮べてザハリーヤ師はきき返した。「何をさうせかせかしてるんだね？」さういふと、返事を待たずに、萎びた小和尚はまた歩きはじめた。

補祭は先づ手はじめに愉快さうにからからと笑つて、それから大聲で、

「いや、ねえ和尚、實はね今しがたわたしは小つびどくやられちまつてねえ。いやはや和尚、あんまりやつつけられたもんで、頭がびんびんするほどさ。早くちよつぱりでいいから氣附薬を持つて來て貰つて下さいよ。」

「氣附薬をね？　よろしい。ところで、一體だれにさう叱られたのだね？」

「言はずと知れた、うちの司法大臣でさあね。」

「はあん！　サヴェーリーイ和尚か。」

「餘人に非ずでさあ。話をすりや長いことだが、何しろ初つ端から奇々怪々なら幕切れまで奇々怪怪ときてるんでさあ。わたしとしちやあ大いに忠勤を勵んだつもりだつたんだが、ところが和尚はびんからきりまで踏んだり蹴つたりでね、何だか知らないが風向きがどだい妙ちきりんでね、とどの結着ときたらまるで附にも何にも落ちない、てんでお話にも何にもならない始末なんでさあ。」

とはいへ補祭は、椅子に腰をおろして、盆に載せて出されたヴォトカの一杯を飲みほすと、今しがたダニールカやトゥベローゾフ師とあつた事の次第を、細大もらさずザハリーヤ師に物語つた。ザハリーヤは物語の間ちゆう、相變らずびよんびよん跳ねるやうな歩きつきで歩きまはつてゐて、ただほんの一秒ほどちよいと立ちどまつたり、時々はまたちよろちよろ部屋を駆け廻つてゐる淡色髪の子供の頭を、今度はこれ、お次はあれといった工合にお道筋から取り除けたりしてゐたが、やがて補祭がすつかり話し終ると、その物語の最後の一言といつしよに、鬚の先つぽを唇で噛みしだきながら、何か曰くありげにかう口走つた、——『なある、なる、なる、だが大したことはない。』

「といふわけでね、わたしとしちやあ、和尚がかんかんに怒つてゐるとしきや考へられないんでさあ、それにまた……」

「それにまた何だね？　さあさ、退いた退いた、腕白さんや！　で、それにまたどうしたね？」とザハリーヤは、子供たちをお道筋から押しつけながら先を聞きながらつた。

「それにまた、折も折、わたしがパイプのことを言ったその言ひつづりが、今から考へりやひどくまづかつたんで」補祭は説明をした。

「なある、そりや勿論さうだ……言をもちひずといつたところだ……幾分そのせぬもあつたかも知れんな。……退いた退いた、腕白さんや！……だがね、かうも考へられるなあ、つまり和尚はべつにお前さんのことで腹を立ててるんぢやない、とな。いや、寧ろてつきりそれに違ひないな、そりやお前さんのことぢやないよ。」

「だからわたしだつて、わたしのことで怒つてるんぢやないと言ふんですよ。第一わたしのことで腹を立てるわけがないぢやありませんか。あんたも知つての通り、わたしはお世辭ぢやなしにあの人に心服してるんですからねえ。」

「さうさ、確かにお前さんのことぢやないよ。つまり和尚は……わしはさう思ふがな……。これこれ、さう通り道をふさがんで退いた退いた、腕白さんや！……つまり和尚は心からその……分るかね？」

「歎いてるんでさあ」と補祭は言つた。

ザハリーヤ師はその小さな手を自分の胸のあたりで振つて、にがい澁面をつくつて、吐き出すやうに言つた。

「憤慨してをられるのだ。」

「深傷を負つたんだ」とアヒルラ補祭はきつぱり断定して、「知つてまさあ。何しろあの人はいしよ

つちゆう教師のヴァルナーフカのことと腹を立ててるんですからね。ようし、あのヴァルナーフカの奴め、今にもつと酷い目に遭はしてやるぞ、もつと酷い目に！」

さう言ふなり補祭は、そのうへ詳しいことは説明もせずに、ザハリーヤに別れを告げて立ち去つた。家路をたどる路で、アヒルラはダニールカとひよつこり行き會ふと、相手をとどめてかう言つた。

「ねえ、ダニールカ君、どうぞお願いだからこのわたしのことを悪く思はんで呉れよ。成程わたしはお前さんにお仕置はしたが、全くのところわたしのキリスト信者としての義務からやつたお仕置なんだからねえ。」

「人前でよくも恥をかかせなすつたねえ、補祭さん！」とダニールカは、聲を失らせて、とはいへ萬ざら和睦がしたくなくもなささうな調子で答へた。

「で、どうだい、わたしがお前さんを酷い目に逢はせたんで、今度は、このわたしにどんな返報をしようつてのかね？ なるほどわたしはお前さんを酷い目に逢はせたさ。だがね、ありやあついで向つ腹が立つたもんでね。……わたしは何も悪気があつてあんな真似をしたんぢやないんだよ。だつてほら、覚えてるだらう、去年のことさ、お前さんが町長のうちの玄關でサヴェーリーイ和尚の袈裟を着込んで、灌水刷子でもつて潔めの水を振りかけてる現場をわたしが抑へたときも、ちやんとお前さんにかう言つて置いたぢやないか。『ようく考へろよ、ダニール、風土記のことなら何でも御座れの俺も、學問のことになると大して分つちやぬないがな、とにかく儀式のことに觸るのは止めにしなよ』とな。わ

たしは確かにさうお前に言つたらうがな？ 『儀式のことに、ダニール、觸るでないぞ』とな。」

ダニールは不承々々こつくり頷いて、かうぼやいた。――

「さう仰しやつたかもしれませんな。」

「いかん、いかん、ごまかさんで白状するんだ！ 俺はたしかに言つたぞ、儀式のことだけには觸るでない、と確かにさう言つたぞ！ ところで、俺はなぜそんな事を言つたらうな？ ほかでもない、それは俺たち僧侶の謂はば生命だ、魂だ、だから觸るでないといふんだ。今度はお前さん合點が行つたかな？」

ダニールは外方そっぽを向いて、にやにや笑つてゐるだけだつた。彼自身としても、補祭が自分の耳をつかんで往來を引きすつた光景を思ひだすと、腹の皮のよれるほど可笑しかつたが、この會話の場面に居合せた他の町人たちときたら、矢張りぶつと噴き出したいのをやつとのことで我慢しながら、冗談半分に、補祭さんはあんまり厳しすぎると口々に非難するのだつた。

「いやいや、そりや補祭さん、あんたは厳しすぎますよ！ 何ぼ何でもあんまり厳しすぎますよ」と彼等は口々に言ふのだつた。

アヒルは、この非難を耳にすると、ちよつと思案して、やがて慈悲深さうにほつと一息つくと、身近におた二人の町人の肩へ手をかけて、かう言つた。――

「厳しい、とあんた方は言はれるな。いかにも、わたしは厳しい、それはあんた方の言はれる通りだ。だがその代り、わたしは公平だよ。假にこの一件を治安判事のところへ持ち出したとして御覽？――

こんなことぢやとても濟まんぞ。――即座に孤兒院のため三ルーブルの寄附をとられちまふんだ！」

「そんなことがあるもんですか。判事さんの中にや、よくやつたつていふんで、あべこべにぼんと一ルーブル銀貨の酒代を呉れる人だつてありまさあ。」

「ほら見ろ！ いいやお前さん、何といつたつて俺はあくまで公平だよ。」

「公平が聞いて呆れますよ。あんたが公平だとしたら、補祭さん、それこそ鴉も立派に驚で通りま
さあ。」

「そりやまたどうしてだい？」

「どうしてつて、だつてダニールは唯、學問のあるお方の仰しやつたことをそのまま受け賣りしただけなのに、それがそんなに悪いことでせうかね？ だから本當をいふとあんたはあのヴァルナーヴ・ヴァンシーリイの性根を叩き直すのが本筋なんですぜ。何しろそんなことをわし等に言つて聽かせたのはあの先生なんですからねえ。ダニールなんぞは、あの先生が雨の降るのは自然の力だ、雨乞ひのせぬぢやない！ つて言つたつけが、もしやさうではあるまいかと、ただ疑つてみただけの話なんですからねえ。だから、もしあんたがあの先生を叩きのめしたんなら、それこそ立派に法に叶ふといふもんですよ。」

「あの教師をかい？……」補祭は両手を大きくひろげると、唇を上下ともくると鼻の方へ突き曲げて、そのままの姿勢で一秒ほど町人たちの前に立つてゐたが、やがてかう囁くやうに言つた。――
「法か！……その法といふなあ、つまりお命令のことなんだ……ところがサヴェーリイ和尚の御命令

がない……だからどだい出来ない相談さ！」

二

それから四五日たった。トゥベロゾフは、例のアヒュラ補祭の不謹慎な振舞ひが何か面倒な表沙汰にでもなりはしまいかと心配したのは、全くの自分の取越苦勞だつたのだと、やうやく安心が行つた。萬事は依然として泰平無事だつたからである。人々はその單調な田舎町の生活を紛らしたい一心から、仲直りをするためにわざわざ喧嘩したり、またもや喧嘩をするために仲直りをしたりしてゐた。泰平の夢をさわがすやうな物の氣配は何ひとつなかつた。それどころか、トゥベロゾフまでが思ひもかけず愉快な一日に恵まれて、清淨無垢な歡喜のうちにその日を過したほどであつた。その日といふのは、アヒュラがその信仰熱心のあまり例の萬屋のダニールカを相手に衆人環視のなかで一悶着もあげた日から程なくやつて來た、町長夫人の名の日であつた。招かれた客が一人残らず町長夫人の名の日の祝ひの席に參集して、盛んに口腹の慾を満たしてゐる最中、主人はふと窓ぎはへ歩み寄るなり、いきなり頓狂な大聲をあげて妻に言つた。――

「こいつは大變だぞ！ おい、ちよいと御覽、どえらいお客様が舞ひこんで來たわい！」
「どなたですの、どなたが見えたんですの？」と町長夫人は訝を返した。

「まあ自分で見なさい。」
そこで名の日の御本尊をはじめ、その部屋に居あはせたお客さん一同も、われがちに窓へ飛んで行つて見ると、丘の坂道をそろりそろりと、まるで三つ頭の蛇が腹這ひの光景よろしくの恰好で、三頭の身の丈たかい淡黄毛の駒に曳かせた堂々たる馬車が、下りて來るのであつた。轅馬はしきりに尻込みをして、四本の脚を突つ張つて、さながら誰かに譴責を與へようと近づいてくる老將軍にそっくりだつた。つまり唇を左の方へひん曲げてみたり、右の方へひん曲げてみたり、頭を振り立ててみたり、かと思ふとまたもやしきりに四つ脚を突つ張るのである。その一ぱう二頭の副馬はといふと、まるで鼻づら一寸のところを槍騎兵のラツパを捜し出さうとでもするやうに身をくねらせたり、かと思ふとまるで途方に暮れた羊のやうに背中を丸めて縮みあがつたりする。眞紅の大鈴は輪を描いて端へがらんとぶつかつては、またべたりと貼りついて鳴りをひそめてしまふ。ただ小鈴の束だけが鈍い音を立ててゐるが、その音とてもただ申譯に鳴つてゐるといふだけで、さつぱり朗々たる響きを出さない。さうかうするうちに、この三つ頭の蛇はやつと坂を下りきつて、まつしぐらに飛ばしはじめた。馬たちの脊椎が見えだし、副馬が尻尾を颯々と振り立て、蠶が一陣の風にざわざわと狂ひ立つ。三頭の馬はやつと肩をならべて、飛ぶやうに橋をわたる。彫りのある金めつきの頸圈の弓形が見えだし、大型の、やけに大時代な、青銅を蹄に打つた、三頭立ての丸胴の馬車が見えだした。馬車の上に仲よく二人、まるで小さな安樂椅子にでも坐つてゐるやうな工合に肩を並べてゐるのは、二人の小つぽけな人間で、一人は男、もう一人は女であつた。男の方は濃緑の吳縞服連の大外套をまとひ、ふかふか

した長毛の天鷲絨でつくつた小さな大黒帽をかぶつてゐる。片方は菩提樹いろの天鷲絨の襟のついたマサーク色のどつしりと重さうな絹の外套をまとい、茶色のリボンのついた頭巾をかぶつてゐる。

「やれやれ、あれはプロドマーソフ家の侏儒さんたちだ！」

「まさかね！」

「御自分でよく御覽じろ！」

「なある、全くその通りだ！」

「當り前のことよ。そらね、あのニコライ・アフナーシエヴィチが、こつちを見てお辭儀をしたぞ。そうらマリヤ・アフナーシエヴナも、しきりに會釋をしてゐるぞ。」

侏儒たちの姿を認めると、そんな大聲があちこちから湧きあがつて、満座の人々は何がなしにすっかり嬉しくなつてしまつた。主人側は食ひあらされた御馳走を新來のお客さんのため新しく調へるのに忙がしく、今までの客人たちは侏儒たちはいつて來る筈の扉口を熱心に見まもつてゐたが、待つこと暫し、やつと御兩人が姿をあらはした。

先頭にはいつて來たのは、小さな八歳ほどの男の兒ぐらゐの脊恰好の爺さんで、後に従ふのはそれより幾らか大き目の婆さんであつた。

爺さんは全身これ清淨と良識の權化ともいふべき男だつた。侏儒の顔といふとまづ大ていは黄色い斑點だの小皺だので臺なしになつてゐるものだが、彼の顔面にはそのやうなものの片影もなかつた。彼の身體つきは頗る均齊がとれてゐて、そのまるで球のやうにまん丸な頭は、短く刈り込まれた銀髪

で一めんに蔽はれ、小さな、茶色の、熊のやうな眼をしてゐた。一ばう侏儒の女の方には、弟に見るやうなすつきりしたところがなく、からだはぶくぶくと膨れあがつて、少々抜けたやうな肉感的な口つきをし、眼つきもどんよりと鈍かつた。

侏儒のニコライ・アフナーシエヴィチは、この夏の暑い最中だといふのに、暖かさうなフランテンの長靴をはいて、もじやもじやの粗羅紗のズボンを着け、黄色いフランネルのチョッキに、金ボタンのついた茶色の燕尾服といふいでたちだつた。彼の着てゐる下着は一點の非の打ちどころもないほど清潔をきはめ、彼の可愛らしい兩頬は、山のやうに盛り上つた繻子の襟飾りでしつかり支へられてゐた。女侏儒の方は黄色い絹マントを羽織り、大きなレースの襟をつけてゐた。

ニコライ・アフナーシエヴィチは、部屋へはいりしなに兩手をきちんとズボンの縫目通りに伸ばし、それから更めて大黒帽を握つた右手を心臟のあたりまで上げ、前の足を引いてびたりと後足へ附け、そつくり返つて今日のお祝ひの當人の方へ向き直ると、物靜かな坦々としたいかにも老人らしい聲で、かう口上を述べた。

「わたくしどもの主ニキータ・アレクセイイチ・プロドマーソフ、並びにバルメン・セミョーノヴィチ・トゥガーノフ殿は、御自身ならびにそれぞれの奥方さまよりの御祝詞を、あなた様すなはちオリガ・アルセンチエヴナに言上いたすやう、やつがれどもに御いひつけなされまして御座ります。姉さんや、もう一ぺん申し上げて下され」と彼は、傍に立つてゐる姉を顧みて、やがて彼女がその祝詞を述べると、ニコライ・アフナーシエヴィチは右足を引いて町長に一禮し、かう先をつづけ

た。

「してまた、閣下すなはちヴォーイン・ヴァンリーエヴィチ様、ならびにお集りのお歴々の方々に、お目出度きこの日を篤く御祝ひ申し上げます。さてそれから、閣下、畏れながら言上仕りたく存じまするは、かくやつがれ並びに姉を御祝詞言上役として差出しましたにつき、やつがれの主あるしよりも、またパルメン・セミョーノヴィチ・トゥガーノフよりも、賤しき使者を差立てましたことを厚く御詫び申しあげます。實は只今少々他用にてからだがふさがつてをりまするによつて、その御詫びは今夕あらためて自身言上いたすとの御申傳へでござりまする。」

「パルメン・セミョーノヴィチがここへ見えるとな？」と町長は大聲を上げた。

「はい、やつがれの主あるしニキータ・アレクセイイチ・プロドマソフ殿と御同道にて、ペテルブルグへ上られます道すがらのことで御座りまするによつて、旅装束にて参上の失禮は何とぞ御容赦を願はしく、との事にて御座りまする。」

との通知を耳にした一座は、ちよつとざわめいたが、その騒ぎに乗じて侏儒はトゥベローゾフの前へ祝福を戴きに近づき、小聲でかう言つた。――

「パルメン・セミョーノヴィチより、あなた様に今晚ここに居て頂きたいとの御頼みでござりまする。」

「畏りましたとお傳へ申せ」とトゥベローゾフは答へた。

侏儒はザハリヤの祝福を受けた。アヒュラ補祭は、自分にも恭しく一禮した小さい爺さんの手を

ぎゆつと握つたが、すると相手はにつこり笑つて、かう言つた。――

「なにとぞ御慈悲をもちまして、お手柔かに願ひまする。あなた様の力試しをして頂きましたは、やつがれ叶ひませぬ！」

「どうだね、ニコライ・アフナーシイチ、その先生は強いかな？」と、主人が冗談を言つた。

「何ぶんにも力試しの好きな御仁であらつしやいまするで」と爺さんは答へた。「人もあらうに、この片輪をまでお相手になされますわい。」

「で、あなたは御達者ですの、ニコライ・アフナーシイチ？」と、婦人連が四方八方から侏儒をとりまいて、その小さな手をわれがちに握りしめながら、口々にさう尋ねた。

「奥様がた、やつがれが何で達者なものでござりまするものか！ お返事の致しやうもない始末でござりますわい。まるでもう意氣地がなうなりましたな。そろそろ聖ペトロの祭になりますのに、相變らず寒くて寒くてなりませんので！」

「寒いですつて？」

「これはまた異なお尋ねでござります。このやうにすつぽり兎の袋で縫ひぐるみになつてをります有様から、よろしう御賢察を煩はします。とは申せ、奥様がた、これには何の不思議もござりませんわい。何せこの役立たずも、八十の坂をはや越しましてござりまするでな。」

一同はわれがちにニコライ・アフナーシエヴィチに向つて色んな質問を浴せかけたり、次から次へと方々の椅子に掛けさせたり、御馳走攻めにしたりした。彼は一同の質問にこたへて聰明な當意即

妙の返事をしたが、御馳走は一切ことわつて、もう久しいあひだ少食を旨としてゐるし、また食べるにしても蔬菜類に限ることにしてゐると言ふのだつた。

「その代りには、この姉が食べて呉れまするでな」と彼は姉を顧みていふのであつた。「まあお掛け、姉さん、たと頂くがいいぞ、頂くがいいぞ！ なにをさうしやちこばることがあるものかな？ わしがお相手をせんでは工合が悪いなら、では卒爾ながら、オリガ・アルセンチエヴナ様、その小皿のうへの揚饅頭に詰めてある人參をひとつ頂かせて下さりませ。……いやそれで結構、たくさんでござります。たくさんでござります！ さあこれでよからうな、姉さん、お頂き、わしはもう充分だによつてな。わしに物を食はせたとこで、今となつては詮もない事ですわい。出来る仕事といつては絲の靴下を編むぐらゐなものでしてな、それとてもはや、さつぱりらちが明きませんわい。昔はこの姉よりもずつと巧者に編みましたもので、イギリス刺繍までやつてのけたほどでしたがの、今ではもう何を編みにかかつても絲をこんぐらかしてばかりをりますわい。」

「さうぢやつたのう、ニコラ、ほんとにお前は編物が上手ぢやつたのう！」と、この侏儒がやつて来た途端からすつかり元氣づいて浮々してゐたトゥベローゾフが、さう合槌を打つた。

「いや、サヴェーリイさま！ 年は争はれせんわい、年は争はれせんわい！」と侏儒はにつくりして、冗談にまぎらしてさう言つた。「それにまた、和尚さま、わたくしを厳しく叱つて下さる方がなくなりましたで。奥方さまがおかくれになつて以來といふもの、すつかりからだがなまになつてしまひました。いやはやどうも、居ながらに御馳走を頂戴できるし、ぬくぬくと着ぶとらさし

て頂いて、しよちゆう怠けてばかりをりまする始末でござりますよ。」

司祭長はさも嬉しさうな微笑をうかべて侏儒の眼をじつと見やつて、かう言つた。――

「かうしてお前を見てゐると、のうニコラ、わしはまるで妙な昔噺を目のあたりにするやうな心地がするわい。それを讀めばもう心置きなくこの世におさらばしたくなるやうな昔噺をな。」

「ところがそれは、和尚さま（侏儒はこれをわしやうと言ふのだつた）、その有難いお伽噺は、わたくしどもに先立つておかくれになりましたわい。」

「だがニコルーシカ、お前さんはそろそろあの奥方のことをお忘れしたらうなあ？ あのマルファ・アンドレーヴナさまのことを忘れしたらうなあ？」と、侏儒のまほりをせかせかと歩き廻りながら、補祭のアヒュラがさう訊いた。さつきからニコライ・アフナーシーヴィチが妙に氣味わるがつて敬遠してゐた當の人物である。

「お言葉のとほりでございますよ、補祭さま、何せこの年でござりまするでな、もうはや夙の昔から、わたくしはあの世へまゐつてあのお懐かしい、人ごころをお慰めくださる奥方さまにお仕へ申したいと、存じてをりまする」と侏儒は、アヒュラの方へかゝる半ば顔を向けたきりで、ひどく小さな聲でさう答へた。

「世間のうはさでは、あの老夫人はよく人の心を慰めたものださうですて」と補祭は一座の誰に向つてともなしに話しかけた。

「あの方が人の心を慰められたといふことを、お前は一たいどんな意味にとつてをるのかな？」と

トゥベローゾフは訊いた。

「つまり面白い人だつたんでさあ！」

法主はにつこりして片手を振つたが、ニコライ・アフアナーシエヴィチはアヒルラの言葉を聞きとがめて、儼とした調子でかう言ひ直した。――

「お慰めくださるのでございますよ、あなた、お慰めくださるのでございますよ、面白いお人などと申すのではございませんよ。」

「何をさう一生懸命説き伏せようと掛つてゐるのだね。なあ、ニコラ、それよりいつそ話してお聞かせしたがよいわ、あの人はお前をどんな工合に憤慨させたつけな？　どんな風にしてお前にその償ひをして下すつたけな？」と法主は水を向けた。

「いやもう法主さま、とんだ昔噺でございますよ、殿様。」

「この男が、憤慨させられたいきさつを物語りますとな、實に情味の籠つたい話になりますのでな」と、トゥベローゾフは一座の人々を顧みて言つた。

「それはもう、あなた、奥方さまは人間を憤慨させることも慰めることも、自由自在にお出来になつたかたでしてな、随分と憤慨させましたし、慰めて下さりもしました。しかもその慰めて下さりやうがまた、天主さまの天使ついででもなければとても出来まいと思はれるほどのお優しさでしてな」と、即座に侏儒は引き取つた。「人の心の奥底をまで見通されて慰めて下さるのでございます。そしてそのお手の合圖ひとつで、こちらにとつてこの世で望み得る限りの福をお授け下さるのでござ

いました。」

「まあそんな風に言はないで、お前が憤慨させられたといふその話をはつきりお聞かせ申したらいいではないか。」

「さうさう、話して下さいな、ねえニコラーシヤ、お話しなさいな！」

「ぢやあ、まあ、あなた様方が冗談半分にさう仰しやるにせよ、それとも冗談ではなくして、本當にその話がお聞きになりたいにせよ、とにかく一座お揃ひで御所望とあるからには、御意にそむくわけに参りませぬゆゑ、お話しいたすと致しますせう。」

「どうぞ、ニコライ・アフアナーシエヴィチ、話して下さいな。」

「お話しいたしませんとも」と侏儒はにつこりと笑つて答へた、「お話しいたしませんとも。何しろこの物語は、心の晴々するやうな話でありますからな。」

さう前置きして侏儒は語りはじめた。――

三

「これからお話しいたしますことはみんな、わたくしが以前の主人の手許から買ひ取られて参つて、一年ほど経つた頃のことでございます。わたくしは、その一年といふもの身も世もあらず歎き暮

したのでございました。何せ、お察しも下さいますまいが、血縁の者とも離され、一家の者とも別れて参つたのでございますからな。そんな工合で鬱いだ氣持で居りましたものですから、申すまでもなくわたくしは、お傍に出てお給仕をいたすのは羞控へてをりました。奥様のお耳にはいつたり、奥様のお目にとまつたり致しては、何とも畏れ多いことでございますからな。ところが、それもこれも、みんな無駄骨だったのでございます。と申すのは、今は亡き奥方さまは、何から何までちゃんとお見抜きだつたからでございます。わたくしの命名日が間近になりますと、奥様はかう仰せになりました。

『ねえニコライ、お前に何か贈物をしたいんだけど、何にしたらいいだらうねえ？』

『奥方さま、この上わたしが何の贈物を頂くことがございませう？ わたくしはこれでもう過分なくらゐ満足してをりますものを。』

『そんなことがあるものかね。ぢやあお前に一ルーブル上げるとしませうか。』

さう仰せになる以上、わたくしとしては御辭退も出来ませず、奥様のお手に接吻して、かう申しました。――

『御親切にほんたうにありがたうございます。』

さう申しあげて、わたくしはまた腰をおろして靴下を編みはじめました。當時でもわたくしの眼はまだよく見えましたもので、近衛隊にいらつしやる若殿様のアレクセイ・ニキーチチのおはきになる撚糸の靴下をさへ編んで差上げたものでございました。さうして靴下を編んでをりますうちに、思は

ず泣きだしてしまつたのでございます。なぜ涙が出て参つたのやら吾ながら分りませんが、まあつい、命名日を間近にひかへて血縁の者のことなどがそこはかとなく思ひ出されて、泣けて参つたのでございます。ところがわたくしは、奥様の肱掛椅子の眞向ひにありますが足臺に坐つて編物をいたすならはしでございますので、マルファ・アンドレーヴナは自然わたくしの涙にお目をとめられて、かうお尋ねになりました。――

『ねえニコライ、お前なぜ泣いてゐるの？』

『いえなに、奥方さま、つい何がなしに涙が……』と、わたくしはお返事をいたしました。が、まったくお察し下さいませ、その涙のいはれを何と申し上げていいものやら、とんと見當のつくわけのものではございません。わたくしは席を立つて、奥様のお手に接吻して、またもや足臺に腰をおろし、かう申し上げました。『奥方さま、なにとぞこの端なない涙にお目をおとめ下さいますな。かうして涙を流しますのも、所詮はわたくしの愚かさゆゑでございますから。』

そこで二人ともまた腰をおろして、仕事にかかつたのでございました。わたくしも靴下を編みますし、奥様もやはり靴下を編んでおいでになりました。さうして奥様は暫くのあひだ針を進めておいでになりましたが、やがて出し抜けに、かうお尋ねになりました。――

『ねえニコライ、明日わたしがお前に祝つて上げる一ルーブルを、お前はどうするつもりなの？』

『奥方さま、わたくしの親父に、たしかな便びんに托して送つてやるつもりでございます。』

『残る一ループルはお袋に送ります。』

『ぢやあ三ループルだつたら？』

『弟のイヴァン・アファナーシエヴィチに送つてやります。』

すると奥様は御感を催されたげに頭を振られて、かう仰せになりました。

『みんなに分けて上げるには、お前さんには随分とお金があることだねえ！ そんな小つちやな形をして、それぢやあ一生かかつても稼ぎ切れないねえ。』

『わたくしをこのやうな姿にお造りになつたのも、天主さまの思召しでございますから——さう申し上げて、わたくしはまたもや泣き出してしまひました。お察し下さいまし、またしても、こみ上げて参つたのでございます。わが涙がわれながら腹立たしく、それでまた泣けて来るのでございませぬ。今は亡き奥様は、じつといつまでもそのわたくしの姿を見守つておいでになりましたが、やがて無言のまま、かう一本の指でもつてお磨きになりました。わたくしがおみ足のところに跪きますと、奥様はわたくしの頭をお膝の上にお載せになつて、まだ涙のとまりませんわたくしと一緒に、はらはらと御落涙になりました。それから立ち上げられて、かう仰せになりました。——

『お前は、ねえニコラーシャ、神様をお怨み申したことはないかい？』

『なんで神様をお怨み申しませう？ ついぞお怨み申した覚えはございません！』

『さう、それでは神様は、そのお前の心根に賞でて、お慰め下さるに違ひありません。』

さう仰せになると、奥様は立ち上げられて、管理人のデメンチイに階下の事務室まで出向くやうにと

わたくしにお申附けになり、御自身もそこへ降りておいでになりました。

『お泣きでないよ、ニコラーシャ！ 神様が慰めて下さるからね』と奥様は仰しやつたのでございます。

そのお言葉の通り、ほんとに神様のお慰めが降つたのでございます。

ここまで来たとき、ニコライ・アファナーシエヴィチは不意にその薄い臉をしきりに瞬かせはじめたかと思ふと、すばやく椅子から跳びおりて、一さんに部屋の片隅へ走つて行つて、白いハンカチで兩眼を拭つたのち、羞かしさうな微笑を浮べて元の席へ歸つて来た。あらためて腰をおろすと、彼は

今までは打つて變つた、まるで別人のやうな莊重な聲で、次のやうに語りはじめた。

「さて次の日、わたくしは朝早く床をはなれました。そつと忍び足で部屋を出て、手水を済ませました。と申すのは、わたくしは奥方さまの御寢臺の足もとの、衝立をへだてた絨毯の上にやすむことになつてをりましたから。それから教會へ参りましたが、それは朝禱が終りましたからアレクセイ神父様にお祈りを上げて頂く心組みだったのでございます。そこで御堂へはいりまして、まつすぐ祭壇をめざして、アレクセイ神父様の祝福をいただきに歩いて参りますと、今は亡きアレクセイ神父様が何かかうふだんに似合はず嬉しさうな面持で、わたくしに向つてさも喜ばしげに挨拶のお言葉をささやいて下さいました。申すまでもなくわたくしとしましては、それは今日が祭日でもあり、またわたくしの命名日にも當つてゐるせぬだ、と考へたのでございます。ところが皆様、そのあとが大變なのでございます！ わたくしが聖餅を頂いて左の合唱席へ退出いたしますと（と申すのは、わたくしは今

は故人となりました番僧のエフィームイチと一緒に左の合唱席で蚊の鳴くやうな聲で唱ふことになつてをりましたので、不意にそのときわたくしは會衆の中に、お袋や親父や、弟のイヴァン・アファナーシエヴィチの姿をみつけたのでございます。親父やお袋のすがたは、會衆の中にまぎれてまださうはつきりとは見えませんでした。弟のイヴァン・アファナーシエヴィチは何せその……まるで近衛の兵隊さんのやうな大男でありますので、すぐさま目についたのでございます。これは幻を見てゐるのだ、とわたくしは思ひました。何しろその日は、親兄弟に會ひたくてなりませんでしたから。ところが幻ではないので！ 見てゐますと、お袋は（つまらぬ百姓女ではございましたが）、身もだえして泣いてゐるのでございます。これはきつと御主人様から外出のお許しを頂いて、遙々わが子に會ひに来て下すつたのだ、とわたくしはさう考へました。申すまでもなくわたくしは、御堂の静けさを見ださぬやう、ふた親や弟のところへ歩み寄りまして、ていねいに頭を下げますと、そのまますぐさま祭壇へ進みまして、もはや唱歌の方はよしてしまひました。……これははつきり申し上げられますが、とても歌へませんでしたので！ さてそれから、朝拜もお彌撒もどこほりなく済みまして、そこで……。御免くださいまし、またしても愚かしい涙がこみ上げて參つて、お話が途中で切れさうでございます」とニコライ・アファナーシエヴィチは、大急ぎでハンカチを兩眼に當てて言つた。「わたくしがお彌撒のあとで祭壇を罷り出まして、特にわたくしのお願ひした祈禱を修しますため祭司長のお前へ進みますと、どうでございませう、聖像の安置してあります經卓の前には、わざわざお彌撒にお出ましになつたマルファ・アンドレーヴナが御自身たすんでをられますし、またその後には、只今

みなさまのお前にをりますこの姉のマリヤ・アファナーシエヴナをはじめ、兩親、弟が揃つて立つてをるのでございます。やがて、『聖なるニコライ神父さま』の歌がはじまりますと、どうでございませう、アレクセイ神父様は、わたくしの一家の者みんなのために祈り下さるのでございます。かうした格別のおとりはからひに、わたくしはしんから感動してしまひました。わたくしは、もとより貧者の一燈ではございますが、アレクセイ神父様が御辭退になるのを無理やりに、財布の底をはたいてお布施を差上げました。さうまでお祈りをして頂いて、ただで済ますわけには参りません。それから御挨拶を言上しようとマルファ・アンドレーヴナのお傍へ参りますと、奥方さまはお手でわたくしをそつと押し戻されまして、かう仰せになりました。――

『さきに親御さんに挨拶をしていらつしやいよ！』

そこでわたくしは親父、お袋、弟と絶えて久しい對面をいたしました。それもお互ひに涙ながらにでございます。姉のマリヤ・アファナーシエヴナは（とニコライ・アファナーシエヴィチは、優しい微笑をうかべて姉を指さした）、さつぱり泣きませなんだ。と申すのも、これは氣性のしつかりした女でありますから、それに引きかへわたくしはから意氣地なしで、めそめそ泣くのでございます。さてそこでわたくしどもが御堂の入口まで出て参りますと、マルファ・アンドレーヴナ様はかくしから瓶子形の財布を取り出されましたが、それはわたくしも現にこの眼で奥方さまがお手づから編まれるところを拜見してをりながら、誰におつかはしになるお心算やらと存じ上げなかつたのでございます。奥方さまの仰しやるには、『さあニコライシヤ、これで親御やきやうだいに贈物をなさい

よ」とのことでもございましたから、わたくしは仰せに甘え、まづ親父に一ルーブル銀貨、お袋にも一ルーブル、弟のイヴァン・アフアナシエヴィチにも一ルーブルと贈物をいたしました。それがみんなぴかぴかと新しい銀貨で、あとにまだ財布の中には四ルーブル残つてをりました。『さてこれは、奥方さま、誰に贈りましたら宜しうございませう?』とわたくしが伺ひますと、その時ちやうど管理人のデメンチイが、一人の花嫁さんと三人の赤ん坊を案内して、わたくしの方へ進んで参りました。みんなゆつたりした百姓外套を着てをります。そこでわたくしは奥方さまの御仁慈のお蔭でこの四人にも贈物をいたしました、さて一同打揃つて御堂をあとに家路につきました。今は亡き奥方さまをはじめ、アレクセイ神父様、わたくし、姉のマリヤ・アフアナシエヴナ、兩親、それから弟の子供たちみんな、といふ顔ぶれでございます。そのときも姉のマリヤ・アフアナシエヴナは平氣な顔をして歩いてをりましたが、愚かなこのわたくしとききましたら、途々ゆゑ知らぬ涙を瀧津瀬のやうに流しつづけでございました。さはさりながら、皆さま、それまでは泣く泣くにせよ兎に角歩いてをりましたが、やがてお館の車寄せに差しかかりますと、思ひがけない光景を見まして立ちすくんでしまひました。そこにはマルファ・アンドレーヴナ様の旅行用のお馬の後に弟の馬を二頭つないだ荷馬車が三臺とまつてをりまして、その上にはわたくしの兩親や弟の荷物が残らず積んであつたのでございます。わたくしはもう氣も顛倒いたしました、何と考へていいものやら方圖がつかせませんでした。マルファ・アンドレーヴナ様にはその時までアレクセイ神父様と御同列で、しきりに草刈の話なされてお運びになつてをられました、別にわたくしのことにはお氣をお留めになつていらつしやらぬやうにお

見受けいたしました。そのとき急に御車寄せの段々をお登りになり、わたくしに向つてこのやうなお言葉を下されました。『さあ僕や、お前さんにこの解放證書を渡すよ。年とつた親御も弟さんも、またその子供たちも、これで自由の身になつたのだよ!』と仰せられました、その解放證書をわたくしのチョッキの中へお差し入れになりました。……さうなりますと、わたくしはもう感きはまつて……」

ニコライ・アフアナシエヴィチは兩の手を顔の高さまでもち上げて、言葉をついた。――
「わたくしは狂氣のやうな大聲をあげて、『ええ、愛い奴めが、愛い奴めが、宏大無邊な御仁慈でもつて、このわしをぺつちやんこに押し潰してしまふとは、さても惨たらしい奴だわい!』と喚き立てるなり、わたくしは胸が締めつけられ、こめかみが疼いてまわり、眼の中には見わたすかぎり一めに聖燈がちらちらいたし、そのまま氣を失つて父親の荷車の足もとに、その證書を抱きしめたまま倒れてしまつたのでございます。」

「ああ、なんといふ情のもろい爺さんだらう!」とアヒュラは感動のあまり叫んで、ぽんとニコライ・アフアナシエヴィチの肩を叩いた。

「左様でございますよ」と、侏儒は口もとを拭つて先をつづけた。「わたくしがやつと氣がつきましたのは、九日たつた後のことでもございました。熱病にやられたのでございます。やつと氣がついてあたりを見廻しますと、奥方さまが枕許に坐つてをられました、かう仰せになりました。『ねえ、後生だからわたしを宥してお呉れよ、ニコライシヤ。この氣ちがひ婆さんは、すんでのことでお前を殺してしまふところだつたよ!』さてさて、プロドマーソヴァの奥方さまは、何と申すお偉い方ござ

りましたらう！」

「ああ、實に何ともいへない爺さんだなあ！」と、冗談にニコライ・アフナーシエヴィチの上衣のボタンをつかんで、それをひんもぎる眞似をしながら、またしても補祭のアヒュラが大聲を上げた。侏儒は無言のままそのボタンが大丈夫かどうかを指でさぐつてみたが、大丈夫ちゃんと附いてゐるのを確かめると、更に言葉をつづけた。

「それは如何にも、わたくしは取るに足らぬ人間でございます。にもかかはらず、奥方さまはわたくしにお心をくばられ、信用して下さつたのでございます。時には、御胸の歎きをわたくしにお打明け遊ばしたとさへ御座いました。とりわけアレクセイ・ニキーチ様が隊へおはいりになる時には、大そうお歎きでございました。若殿様からお手紙が参りますと、まづ御自身で大急ぎでお眼をとほされ、それから聲をあげてお読み上げになつたものでございます。奥方さまが椅子にかけてお読み上げになるのを、わたくしは御前に立つて、靴下を編みながら拜聴いたします。それが済みますと、すぐさま種々のおん物語がはじまります。『きつともうぢきに、あれも士官さんに昇進するに違ひないねえ』と、そんなお話のあつたこともございます。『順序から申しますと、おつつけ御昇進でございませう』とわたくしがお答へいたします。するとまた、『どうだらうねえ、ニコラーシャ、もつとお金を送つてやつたものだらうかねえ？』『仰しやるまでもござりません、さうなりましたらもつと澤山お送りあそばしませ。』『さうだねえ、それに此處にかうしてゐるわたしたちには、どつちみちお金はいらないのだからねえ。』『まつたくでございます。わたくしどもに何のお金があることござい

せまう！」ところが姉のマリヤ・アフナーシエヴナは、そのやうな時にも御機嫌をとりむすぶどころか、つんと黙つてをります。奥様はそれがお氣に召さず、たちまち御機嫌を損ぜられて、かう仰せになつたものでございました。『この女は何といふ木偶人形だらう！ さすがは弟の景物にただで附けてよこしただけのことはあるよ』とね。

ニコライ・アフナーシエヴィチはそこで、これはしまつたと氣づいて、ひどく赤面して、うす野呂の姉の方をふり返つてかう言つた。――

「ねえ姉さんや、わたしがこんな話までするといつて、腹を立てないでお呉れよ。」

「かまひませんわ、どしどしお話しなさいよ」と、マリヤ・アフナーシエヴナは舌で頬をぺろぺろ舐め廻しながら答へた。

「姉は時によりますとめどもなく泣き出すことがございました」と、ニコライ・アフナーシエヴィチはほつとして先を續けた。「するとわたくしは、マルファ・アンドレーヴナ様のお目にとまらぬやう、どこかの片隅か階段の上へそつと連れて参りまして、さまざまになだめたものでございます。『ねえ姉さんや、氣をお落ち着け。恩を仇で返すやうな自分の振舞を、少しは羞かしいと思ひなさい』などと申し聞かせますうちに、これの上氣もすぐさままた冷めてしまふのでございました。もの一分ほどしますと『マリヤ！』とお聲がかかります。『駄々をこねるのもいい加減におしよ。何だつてまるで猫みたいにすぐ脹れるんだね。さつさと坐つて仕事をおし。』ねえ姉さんや、お前ほんとおこらないかい？」

「お話しなさいな、わたし平氣ですから、お話しなさいな」と、マリヤ・アフナーシエヴナは答へた。

「とそのやうな工合に、事は落着いたのでございました。姉は足臺の上に、足を敷いて坐つて、また編物にかかるのでございました。さてわたくしは、かうして穩かになりますと、すぐさまマルファ・アンドレーヴナの御前へ参りまして、お手に接吻いたし、『つつしんで御禮を言上つかまつります』と申し上げます。そこで奥方さまもわたくしども姉弟も、ともどもに感きはまつて涙を流しさへ致すのでございます。『ねえニコライ、お前は本當に氣立の優しい人だねえ。だのに何故あの子だけがあんな木偶なのか、わたしにはそれが分らないよ』と奥方さまはまた姉のことをお託ちになります。しかしわたくしは』と、そこでニコライ・アフナーシエヴィチはにっこり笑つて言葉をつづけた。『奥方さまのこのお言葉を、まるで祕書役みたい、すぐさまこつそり握りつぶしてしまふのでございました。』『ねえ姉さん、奥方さまのお手に接吻しておいで』とわたくしは耳打ちをいたします。それが奥方さまのお耳にはいつて、たちまち事はお仕舞ひでございます。『そのまま坐つておいでな、お前さんなんぞに接吻して貰ひたくはありませんよ』と奥様は姉に仰せになります。と申すやうな次第で、三本の手がせつせと編針を動かしはじめるのでございます。聞えるものと申せば、編針のトリ・チ・チ・トリ・チ・チといふ音、それに小蠅がジジジュ、ジジジュ、ジジジュと飛びまはる音ばかりで。まつたくかうした静けさの中で、わたくしどもは一生を暮して参つたのでございます！」

「ところで、あなた自身や姉御さんは、自由の身にしては下さらなかつたのですか？」と誰かがたづねた。侏儒は物語を終へて、席を立たうとしてゐた。

「自由の身に？ いいえ、あなた、解放しては下さりませなんだ。姉のマリヤ・アフナーシエヴナの方は、兩親の解放證書に加へてございましたが、わたくしは解放されなかつたのでございます。奥方さまはよくかう仰せになつたものでございました。『わたくしが死んだら、どこなりと好きな場所でお暮しへと申しますのは奥方さまはわたくしの爲に恩給を積立てて下さつておいででしたので、けれどわたしの生きてゐる間は、お前を自由の身にして上げることができないよ。』わたくしはかうお返事をいたします。『なんの奥方さま、わたくしに何の自由などがいらいますものですか？ なまじ自由の身などになりませんと、却つて雀に啄かれるのが落ちでございます』とね。」

「ああ、實に何ともいへん男だなあ！」とアヒルラは感歎の叫びをあげた。

「さやう、してあなた様はどのやうにお考へになりますので？ まつたくのところ、啄かれるにきまつてをりますよ」とニコライ・アフナーシエヴィチは斷言した。「論より證據、お邸の執事をしてをりましたグレープ・ステパトノヴィチを御覽なさいまし。まことによく出来た人であつばれな御仁でございましたが、それが解放して頂き、旅館をひらいて酒を飲み覺えました擧句の果には、今では勤工場をうろついて、『吝嗇の騎士』の聲色などを商人たちに聞かせては、僅かなお鳥目にありつてゐる始末でございます。一體これでよいものでございませうか！」

「實はこの男は、何かにつけて奥方の片腕だつたものでしてな、このニコライ・アフナーシエヴ

* 『吝嗇の騎士』——プーシキンの韻文劇。一八三〇年の作。

イチは」とトウベローゾフは好評を下した。一つにはこの好評をもつて侏儒の功勞を顯彰するためであり、また一つには會話の舵を望みの題目の方へ向けかへるためであつた。

「御奉公いたしましたよ、司祭長さま、一升枴は一升枴だけに御奉公いたしましたよ。モスクヴァヤ彼得塞へ奥方さまがお上りあそばす時にでも、ついぞ執事にお供をお仰せつけになつたことはござりませなんだ。さりとてまた女のお供では道中がまんがお出来になりませなんだ。よくかう仰せになつたものでございます。『どうも女をお供に連れて行くと、しよつちゆう雌鷄みたいにコッコッコの言ひつづけでね、宿屋に泊れば廊下罵ばつかりして餘計な知合ひを作り廻すんだよ。ところがニコライ・ヤだけは、まるで兎みたいにちやんとわたしの部屋の間控へてゐて呉れるのさ。』つまり奥様はまるでわたくしを人間の男並みにはお扱ひでなく、いつも兎あつかひになすつたわけでございますよ。」

ニコライ・アフナーシエヴィチは聲を立てて笑つて、かう附け加へた。――

「まつたくのところ、失禮ながら出来合ひの靴にせよ、男子服にせよ、買ったところで所詮合ひもなにも致しませんわたくしが、何で男一匹と申せませう。わたくしのことを兎と仰しやつた奥様のお言葉は、全くその通りでございますよ。」

「ウサさん！ ウサさん！ ウサギさん！」とアヒュラは、侏儒の兩肩を笑ひつつ撫でながら、さう言つた。

「だが奥方はお前さんを兎あつかひにばかりされたわけでもあるまいて、嫁を取らせようとされたのを見るとな」と、今度は町長のポロホンツェフが侏儒の相手になつた。

「いかにも、ヴォーイン・ヴァシーリイイチ様、そのやうな事もござりましたわい。ござりましたわい」と、彼は次第に聲を落しながら附け加へた、「ござりましたなあ。」

「本當に、ニコライ・アフナーシエヴィチ、そんな事があつたの？」と一どきに何人もの聲がそれに應じた。

ニコライ・アフナーシエヴィチはさつと顔を赧らめて、ささやくやうに聲を落して、

「嘘を申しては罰が當ります――ござりましたわい。」

その時その場に居あはせた人は、一人のこらす一齊に侏儒に向つてせがむのだつた。――

「ねえ、ニコライ・アフナーシイチ、それを話して聽かせて下さいな！」

「あいや皆様、なんのお話しいたすほどのことが御座りませう？」とニコライ・アフナーシエヴィチは笑ひながら、赧い顔をして、兩手で一同の願ひを振り拂ふやうな恰好をしながら、しきりに辭退した。

ところが頼む方はいつかな引き退らない。婦人連は彼の手をとらへて、彼の額に接吻するといふ騒ぎ。彼の方では自分にさはつた婦人の手を宙でつかまへて、それに接吻するのだつたが、さりとて話すとなればどうせ長たらしい詰らんものになるにきまつてゐると思つてゐるので、なかなか諾とは言はない。ところがその時、急にどすんと何か床へぶつかつたものがあつたので、ちやうど侏儒の椅子の前に立つてゐた今日の祝ひの女主人公はびつくり仰天して傍へ飛び退つたが、と見る、ニコライ・アフナーシエヴィチの眼前には、補祭アヒュラが兩手を空へあげた跪拜の姿で現れたのであつた。

「この通りだ！」と頭を振り立て振り立てアヒルラは強請むのだつた。「その君に嫁を貰つてやらうとなされた次第を、ぜひ話してお呉れよ！」

「申し上げます、一切合財お話いたしましたませう、ただお起ちなされませ、補祭さま。」

アヒルラは起ちあがると、袈裟についた埃をぼんと拂つて、得意満面で勝名乗りをあげた。――

「いやあ！ どんなんもんです？ だつて皆さんは、とてもこりや話しさうもないわいなんで仰しやるぢやありませんかい！ なんて話さんわけがありますかい！ そこでわたしは、ぢや一つねだつてお目にかかせうと申し上げたんだが、それこの通り、みごとになだり了せましたぞ。では皆さん、どうぞ御銘々の席へお戻りなすつて、御静肅にねがひますよ。それから奥さん、折角ニコライシャが話して呉れるといふんですから、一つその御褒美に、方々のお邸で出るやうな工合に、極上の葡萄酒のはいつた水を一杯お申し附けなすつて。」

一同は銘々の座を占めた。ニコライ・アフナーシエヴィチは出された一杯の水に自分で赤葡萄酒を二三點たらし込むと、新たにまた身の上話をはじめた。

四

「みなさま、あれはフランスと媾和になりまして程ない頃のことでございます、わたくしが先帝

陛下とお話をいたしましたのは。」

「おや、あなたが陛下とお話をしたんだつて？」と、その瞬間いくつかの聲が話し手を遮つた。

「けつたいもないことと思召しでございますうなあ？」と、物静かな微笑を浮べて侏儒は答へた。

「ほんとの話でございますとも。皇帝アレクサンドル・パーヴロヴィチさまと親しく言葉をまじへましたのみか、奉答の文句にも事缺きませなんだ次第でございますました。」

「は、は、は！ いやどうも、こりやあ参つたわい、このニコラーヴラは相當な曲者だぞ！」嬉しさのあまりアヒルラは突然さう唸り出すと、兩膝をぼんと掌で叩いて附け加へた。――「まあこの男を御覽なされ――この通り小つぽけぢやあるが、皇帝さまとお話をするたあ大したもんですわい。」

「坐れよ補祭、おとなしくせんか、靜かに坐つてをれよ」と、トゥベローゾフは訓すやうに言つた。

アヒルラは、もうこれ以上なんにも言ひませんといふ印に兩手を擴げてみせて、腰をおろした。

物語はあらためてまた始まつた。

「事のそもその起りは、わたくしが皇帝陛下とおん物語を致したことが因なのでございまして」と、ニコライ・アフナーシエヴィチは落着き拂つて語りだした。「皇帝さまがナポレオン・ボナパルトに對しあの世界史上かくれもない大勝利を收められまして、その還御をモスクヴァの人皆がお待ち申し上げてをりました時、わたくしの主人マルファ・アンドレーヴナも都へ上つてみたいと思召されたのでございます。申し上げるまでもなく、わたくしも奥方さまの御意により旅の供廻りに差加へ

られました、お傍近くに侍つてをりました。亡き御主人さまは、當時すでに餘程の御高齢でいらせられまして、御氣色がすぐれませんでした、よく御機嫌を損ぜられたりお腹立ち遊ばされたりしたものでございます。さういふわけで、若様がたとしましてはお邸においでになるのが屈託でならず、また奥方さまもその様子をお見抜きで、大そうそれを忌々しく思召され、とりわけアレクセイ・ニキーチチ様に對しては事々にひどくお腹立ちでございました。と申すのはつまり、お邸の中の秩序がみんなが面白可笑しく暮せるやうに出来てはゐない、そして誰もかもが奥方さまをなほざりにしてゐる、とお考へになつたからでございます。或る日のこと、アレクセイ・ニキーチチは、陛下の臨御がある筈になつてをります舞踏會への招待状を、母君のために手にお入れになりました。マルファ・アンドレーヴナは殊のほかの御満悦で、そのお喜びをわたくしのやうな者にもお匿しなされなかつた程でございます。御自身にはこの舞踏會の御着料として價も知れぬほどの御晴着をおつくり遊ばされましたし、またわたくしの爲には、わざわざフランス人の仕立屋を召されて、金ボタンのついたイギリス羅紗の青い燕尾服をはじめ、ズボン——奥様がた、おゆるし下さりませ——チョッキ、ネクタイから下着類一式に至りますまで、すつかり誂へて下さいました。襷のついた硬胸や、短靴の留金で、四十二ルブルもお拂ひになつたものでございます。アレクセイ・ニキーチチはお母様が心ゆくまで御満足のゆくやうにと、わたくしをもお供にお連れ遊ばして差支へないやう手続きをおとりになつたのでございます。そこで家令にお申付けになりました、わたくしをお屋敷に附屬して建てられてあります温室（それは丁度陛下が臨御になります廣間の眞向ひに當つてをりますのでした）——その温室へ連れ

て參つて、どこかその片隅の花の間に立たせて置くやうにお取計らひになりました。そこで皆様、萬事はこのお言付け通りに運んだのでございますが、それには些か手落ちもございました。と申しますのは、家令はわたくしを、片隅にありました支那棕櫚とか申しますこんな大きな木の傍に立たせまして、直立不動の姿勢をしてそこから見えるものをよく拜見してをれと申し附けたのでございます。ところが、そんな場所から一たい何が見えますか？ なんにも見えは致しません。そこでわたくしは、あの收税吏のザアカイのやうに、がりがりつとばかり、ほんのこれつばかりの小さな造り物の岩へ攀ぢ登つて、例の棕櫚の木蔭に立つてをりました。廣間はさんざめく人聲、きらびやかな装ひ、沸きたつ音樂の眞盛りでございます。わたくしは棕櫚の蔭の岩の上に立つてをるとは申せ、殿がたのお頭のおつぺんや婦人がたの髷のほかは何一つ見えは致しません。とその時、急にそのお頭がみんなそはと色めき立ち、さつと左右に分れたかと思ひますと、陛下がゴリーツイン公を隨へられて、日向から眞直ぐ温室の中へはいつておいでになりました。おまけにそれが、どうでございませう、温室へお通りになつたばかりではございません、わたくしを匿して置いてありましたそのすつと遠い、日かげの涼しい片隅へと、ずんずん歩みを向けられたのでございました。わたくしは、皆さま、縮みあがつてしまひました。岩の上で縮みあがつたなり、下りようにも下りられません。」

「怖しくつてかね？」とトゥベローゾフが訊いた。

「さあ何と申上げたら宜しうございませう？ 怖しいと申すより、ただ何がなしに胸がわくわく致

しまして。」

「わしだつたら逃げ出したね」と、我慢がならず補祭が口を出した。

「いや、あなた様、なんで逃げる事がございませう。それはわたくしにしましても、全然怖気がつかなくつたとは申せませんけれど、とにかく逃げ出しは致しませんでした。さうかう致すうちに陛下はずんずんこちらへ近づいていらつしやいます。もう御長靴がきゆつ・きゆつ・きゆつと鳴る音まで聞えて参りました。もはや、何ともいへず御物静かな龍顔も、御優しいお眼差しも見えて参りまして、今はもう無我夢中で、どうしてわたくしが龍顔に咫尺することになつたのかといふことを考へようにも、夢うつつの有様でございませう。と突然、陛下はお頭をかういふ工合に返させられて、畏れ多くもわたくしに御眼をとめさせられ、そのまま、じつとわたくしをお見守り遊ばしたのでございませう。」

「それから！」と、補祭は蒼い顔をしながら叫んだ。

「わたくしは取るものも取りあへず恭しく敬禮をいたしました。」

補祭はほつと溜息をついて、侏儒の手をぎゆつと握りしめると、かうささやいた。――
「さあ早く先をつづけて、お願ひだから、さうちよいちよい休まないで。」

「陛下はじつとわたくしにお眼を注がれましたが、やがてゴリーツイン公を顧みられて、フランス語でかう仰せになりました。――『いや實になんとも見事な小造りの標本であるな！これは一たい誰の持物かな？』拜見してをりますと、ゴリーツイン公は奉答に窮せられた模様でありましたので、

わたくしも些かフランス語の片端を解しますままに、自分でかう奉答いたしました。――『プロドマ
ーソヴァ夫人にお仕へ申してをりまする、皇帝陛下。』陛下はそこでわたくしに向はれ、このやうに御下問になりました。――『そなたはこの民であるな？』「畏れながら皇帝陛下の忠誠の臣でござい
ります。』そこで重ねて『生れはロシアかな？』と御下問がございましたので、『農民の出ではござい
ますが、陛下の忠誠の臣でござります』と奉答いたしました。陛下にはからからと御笑ひあそばされ、
畏れ多くも『Bravo!』と御戯れになつて、『bravo, mon petit sujet fidele』と仰せになりますと
もに、このやうな工合に御手をさし伸べられて、わたくしの頭を御自身の方へ引き寄せになりました。
た。」

ニコライ・アフナーシエヴィチは聲を低めて、静かな微笑を浮かべながら、さながら何か重大な政
治向きの秘密を洩らしでもするやうに、ひそひそ聲でかう言ひ添へた。――

「おん手づからわたくしを抱きしめようと遊ばされましたのでござりましたが、このところの
…袖の折返しのボタンがお目にとまりませんでしたので、その代りわたくしの鼻をぎゆつと痛いほど
お歴し遊ばされたのでございませう。」

「でお前さんは何か……かう喚き立てでもしなかつたかい？」と補祭がたづねた。
「どう致しまして、補祭さま、何を仰せになりますか？陛下の御愛撫をいただいて何の喚くことが
ございませう？わたくしは」とニコライ・アフナーシエヴィチは結論をつけた、「陛下がわたく
しをお放し遊ばしましたのち、御手に接吻いたしましたのでございませう……このやうに有難くも身にあま

る光榮に浴した次第でございますが、わたくしが陛下とお話をいたしましたのは、これきりでございました。それが済みますと、申すまでもなくわたくしは直ぐさま棕櫚の木蔭から下されまして、馬車に乗せられてお邸へ歸つたのでございますが、歸りましてからはすつと泣いてばかりをりました。」

「どうして後になつて泣いたりなんぞ？」とアヒルラが訊いた。

「どうしてと仰せられますか？ どうしてどころでは御座いませんわい。人間は感動のあまり泣くこともござりまするでな。」

「なりこそ小さけれ、實に情の深い男だ！」と、アヒルラは有頂天になつて叫んだ。

「まあ、お待ちなされませ！」と、語り手は再びはじめた。——「さてさうなりまして、測らずも陛下のお目にとまりました次第がモスクヴァのお邸お邸にひろまりますと、マルファ・アンドレーヴナさまはわたくしを方々へお連れ遊ばして、人にお見せになるやうになりました。これは全くの正直な話で決して嘘いつぱりではございませんが、當時わたくしはモスクヴァちゆうで一ばん小さな一寸法師だったのでございます。とは申せ、それも長いことではありませず、ほんの一と冬のことでございますまして……」

ところが丁度この時、補祭はどうした拍子か突然耳を聳せんばかりの音を立てて鼻を鳴らしたかと思ふと、椅子のもたれ越しに頭を垂れて、くすくす笑ひ出してしまつた。

自分の笑ひがせつかくの話の腰を折つたことに氣がつくと、彼は身を起してかう言つた。——

「いや、何でもありませんよ！……どうぞ先を續けて下さい、ニコラーヴラ。わしは自分のこと

獨り笑ひをしたまでなんです。いつぞやクレヌイヒン伯がわしと話をされた時のことを思ひ出したものでね。」

「いや、それはいけません、補祭さま、かうなつたらそれを一つ話しておしまひなさらぬと、また話の腰をお折りになるに違ひありませんわい」と侏儒は答へた。

「いや、何でもありませんよ、何でもありませんよ、實につまらん事なんですよ」とアヒルラは言葉を返して、「實はね、クレヌイヒン伯がわしらの神學生徒團を査閲に見えられた時、わしが敬禮をしたら、かう言はれたのさ、——『向ふへ行かんか、この馬鹿めが！』とね。それつきりの話なんだが、つゝ思ひ出して笑つちまつたんですよ。」

「まつたく可笑しな話でござりますなあ」とニコライ・アフナーシエヴィチは言つて、にっこり笑つて先をつづけた。——

「その翌冬には」と彼は口を切つて、「將軍の奥方ヴィヒオーロヴァ様が、エストニヤ生れのメッタと申す身の丈わたくしよりも指一本も低い女の一寸法師を、ペテルブルグから連れてお歸りになりました。マルファ・アンドレーヴナ様としては、これは何としても承知の出来ないことでございます。最初のほどは、あの女一寸法師は天然自然のものではなくして、鉛かなにかを飲ませて無理に拵へ上げたものだ、などと仰しやつておいででしたが、やがて御自身でお出掛けになつて、親しくその目でメッタ・イヴァーノヴナを御覽になりますと、その色白で完全無缺な容子にすつかり腹をお立てになつてしまはれました。何とかしてあのメッタ・イヴァーノヴナを買ひ取りたいものと夢にまで御覽あ

そばす始末で。ところがヴィヒオールシャ様は、いつかな手放さうとはなさりません。そこでマルファ・アンドレーヴナはつい、『うちのニコライシャは、利口もんで、陛下の御下問にお返事の出来るほどの男ですがね、あんなのこの娘つ子ときたら、ただ見てくれがいいだけぢやありませんか』などと負け惜しみがお出になる。たうとう私どものことが因で、奥方さま同士の諍ひになつてしまひました。マルファ・アンドレーヴナはその女一寸法師を賣れと仰しやる、先方様ではこのわたくしを賣れとお言ひ返しになる。とどマルファ・アンドレーヴナは突然かつとされて、かうお口走りになりました。——『わたしがあの女一寸法師をお前さんから買ひ受けたと言ふのは、なにも玩具にするつもりなんかぢやないんですよ。わたしはね、あの女を籍ぐるみ買ひ受けて、うちのニコライの嫁にしてやらうと思つてるんですよ。』ところがヴィヒオールヴァ夫人の方ではまた、『そんなら、わたしが邸ぢやうであの男を婚禮させてやります』とやり返しなされる。そこでマルファ・アンドレーヴナが、『ぢや、この夫婦の間に子供が出来たら、それをあんなに上げようぢやありませんか』と仰しやる、と、先様も負けてはゐず、子供が出来たら、こちらこそそれを差上げようぢやありませんかとお言ひ返しあそばす。マルファ・アンドレーヴナはすつかり御立腹で、わたくしにメッタ・イヴァーノヴナに左様ならお言ひ、とお申附けになりました。ところが暫くするとまた、マルファ・アンドレーヴナはやつぱり思ひ切りがつかず、相手の奥方様のお邸にわたくし共々お出掛けになつて、鬨をまたぐが早い早速、『ねえ、どうですね、將軍夫人、口先だけでも何だから、いつそあんなのこの片輪女のお代に、千ルーブル上げようぢやありませんか』とお切り出しになると、相手はまるで故意かぎとわ

たくしの男前を上げてくださるかのやうに、わたくしの代價として二千ルーブル出させようと、マルファ・アンドレーヴナにお申し出になる。雙方われ劣らじと競り上げ競り上げるうち、とどのつまり又もやマルファ・アンドレーヴナはお腹立ちになられ、『わたしはね、自分の家の者を賣りに出すやうな女ぢやありませんよ』と仰しやると、ヴィヒオールヴァの奥方も負けてはゐずに、こちらも憚りながら商賣は致しませんよ、とおやり返しになる。そこでまたわたくしに、メッタ・イヴァーノヴナに左様ならおし、とお言附けが下る。たうとう私どもの値段は一萬ルーブルまで競り上つてしまひましたが、それでも矢張り手打ちにはなりません。うちの奥様があちらの小人に一萬ルーブル出さうと仰しやると、先様ではわたくしに一萬一千ルーブルお張込みになる、といった調子でございましたから。かうして春の訪れる頃までも事が長引いたのでございますが、正直なはなし、なるほどマルファ・アンドレーヴナは氣象のしつかりと大きなかたでありまして、例の**ブガチョーフ**を相手に喧嘩をなすつたり、歴代お三方の皇帝様とダンスを遊ばしたりなされた方ではありましたが、それがヴィヒオールヴァの奥様のお手にかかつて、そのお氣象が見るも無慙なほど挫けてお仕舞ひになりました。鬱ぎ込んで仕舞はれたのでございます！ おそろしく鬱ぎ込んで仕舞はれたのでございます！ そししてしよつちゆう私の事をお腹立ちになるやうになりました。『みんなお前が悪いんだよ』と、よくそんな風に仰しやつたものでございます、『まつたく何て薄野呂だらうねえ、あつちの娘の方からは非お前のところへ嫁よめたいと主人にせがむやうに仕向けられたいものを、これんぼつちだつて相手の氣を

惹く能もないんだからねえ。」そこでわたくしが、『でも奥方さま、わたくしのやうな者に、どうしてあの娘の氣を惹くことなどが出来ませう？ それよりも御主人さま、どうぞこの馬鹿めにお手を頂かせて下さりませ』と申しますと、奥様は益々お腹立ちで、『お前は馬鹿だよ、ほんとに馬鹿だよ、能といつたらお手を頂くことだけぢやないか』と仰せになり、わたくしはそれなり黙つてしまふのでございしました。』

「こんな小つぽけななりをして、こんな小つぽけななりをして！ 可哀さうに、この男にそんな事の出来る筈がないぢやありませんか！」と、誰か隣席の人に向つて、補祭がさも同情に堪へんといつた面持でしきりに口説いてゐた。

侏儒はちらと彼の方を振り仰いで、そのまま先を續けた。――

「さて、まあそんな工合で御座いまして、たうとう春にもならうと致し、そろそろモスクヴァを引揚げてプロドマソヴォへ歸らなければならぬ時になりました。マルファ・アンドレーヴナは又もやわたくしに衣裳を着けるやうに仰せ出されましたが、それもわざわざイスパニヤ風の衣裳をといふ御註文でございました。そしてわたくし共々ヴィヒオールシャのお邸へお出ましになりましたが、又しても談判はうまく参りませんでした。マルファ・アンドレーヴナは相手の奥様に向つて、『ねえあんた、せめてあんたの女小人に散歩ぐらゐ許してやつたらどうなの。うちのニコラーシャと肩を組んで、邸の前を少し歩かせて御覽なさいよ！』と仰しやいます。將軍夫人もこれは承知なさいましたので、わたくしはメッタ・イヴァーノヴナと連れ立つて、窓の前の小徑を散歩いたしましたもので御座います。

マルファ・アンドレーヴナはこれが大そうなお氣に召しまして、わたくしども二人のために色々な衣裳をどつさり仕立てて下さいました。先様のお邸へ上りましてから、このやうな御命令が下ります。『今日はね、ニコラーシャ、メッタと一緒に老百姓の衣裳を着てごらん！』そこでわたくしども二人は木靴をはいて、わたくしは胴着に帽子、メッタ・イヴァーノヴナは高頭巾といふ姿で、お邸の前を散歩いたしますと、町の衆が足をとめてわたくしどもを見物するのでございました。時にはトルコの男女の衣裳をといふ御言附けが下り、その姿で散歩いたしましたことも御座いましたし、また水夫と水夫の衣裳で散歩いたしましたこともございました。また熊の衣裳といふのも御座いまして、これは焦茶色のフランネルをだん袋のやうな工合に仕立てたもので、その中にわたくしどもは、まるで手を手袋へ、足を靴下へ入れでもするやうにすつぽり押し込まれて、眼のほかには何も見えない始末、頭の上には耳のつもりで羅紗の紐がついてをりまして、動くともそれがぶらんぶらん致します。しかしこの衣裳の時は街路へは出されませず、奥方お二人が食卓に向つて珈琲を召上つておいでの折にこの衣裳を着けよとのお申附けのあるのが常で、珈琲を召上る折の御座興に、食卓の前の絨毯の上で角力をおとらせになるので御座いました。メッタ・イヴァーノヴナは、女のくせに大層な力持でありましたが、わたくしが巧く一番足がらを掛けてやりますと、あつと言ふ間にすつ飛んでしまふので御座いました。けれどわたくしは、いつもメッタ・イヴァーノヴナに成るべく勝を譲るやうに心掛けたものでございます。何せ女のことでは可哀さうではございませんし、それに將軍夫人が、旗色わるしと見るや忽ち狎を加勢にお呼びになり、わたくしは脛に噛みつかれる、マルファ・アンドレーヴナは御立腹になる、と

いふ始末でございましたので。……いやはやこれこそは全く閉口でございました！ また或る時などは、今は亡き奥方さまはわたくしどものため、飛切上等の衣裳を誂へて下さいましたが、それは今なほ大切に仕舞つてございます。わたくしにはフランスの將軍の服装、メッタ・イヴァーノヴナには侯爵夫人の衣裳でございました。わたくしには、こんな風な熊の毛皮の高い軍帽や、裳の長い軍服や、劍附鐵砲や、短劍までが揃つてをりましたし、メッタ・イヴァーノヴナには、ローブや大きな扇が揃つてをりました。わたくしが鐵砲を捧げて扉のところ立つてをりますと、メッタ・イヴァーノヴナが扇を手に扉からお通りになる、そこでわたくしが敬禮を致します、そこでまたマルファ・アンドレーヴナは私ども二人を結婚させようと將軍夫人を相手に、私どもを買ふ賣らぬの談判をお始めになるので御座いました。ただここで申し上げて置きたく存じますのは、さうした衣裳の類は、メッタ・イヴァーノヴナのも併せて、悉くわたくしの奥方様が御自辨でお作らせになりましたので、と申しますのも最早メッタ・イヴァーノヴナを買ひ取れるものと思ひ込んでおいでになりましたし、それにまたわたくしども二人のためかうした数々の衣裳をお作り遊ばせばお作り遊ばすだけ、愈々益々わたくしども二人を自分のものと思ひ込まれるやうになつたので御座いますから。ところが、風向きはまるで見當違ひに吹いたので御座います。ヴィヒオーロヴァ將軍夫人は、カロリーナ・カールロヴナといふお名前でも分ります如くドイツの御出でございましたが、御自身の得の行くことは何一つ反對なさらずにとしどし取込んで置きながら、手放すことといつたらこれんばかりの物もいつかな手放さない、といふ方だつたのでございます。愈々もう春といふ時になりまして、マルファ・アンドレーヴナは相

手の奥様に向つて、きつぱりとかう仰しやいました。『ところで、ねえ奥さん、かうして二人がかりで一體何をやつてゐるんでせうねえ、白も黒もさつぱり出て來ないぢやありませんか？ これは何とかきりを附けなけりやなりませんわ。』そしてとどのつまりは、うちの奥方さまがすんのでござアガニコヴォの墓地へ葬られてお仕舞ひになるところで御座いました。すつかりもう衰弱なされまして、お顔色は黄色くなり、何かにつけて御癩癩を起され、もはや只の一分間も待つことはならぬ、今すぐ即刻メッタ・イヴァーノヴナを御前に差出せ、そしていま目の前でわたくしと婚禮するのだ！ といふ騒ぎでございます。人様のお邸には朗かな復活祭の日曜が訪れてゐると申しますのに、お邸は上を下への大騒動、彼岸祭までには結着のお返事が先様からある筈になつてをりますけれど、それを何と奥方さまにお傳へ申上げてよいやら、とんと思案もつかぬ有様でございます。とそこへアレクセイ・ニキーチチが（どうぞ御息災でいらせられませ）、このいきさつを苦々しい事に思召されまして、最早このままには棄てて置けずと、御自分でお思ひ附かれましたか、それとも誰か聯隊の將校仲間の智慧を借りられましたか、とにかく母君に向つて、ヴィヒオールシャのところの女小人は急に行方知れずになつてしまつた、と言上されました。すると、その女が最早誰の邸にもおないといふことだけで、マルファ・アンドレーヴナは見る見るお樂になられまして、それにつきひつきりなしにかう仰しやるやうになられました。つまり、『行方知れずになつたつて、一體それはどうしたことです？』とお尋ねになるのでございます。實はユダヤ人に攫はれましたので、とアレクセイ・ニキーチチがお答へになります。『何だつて？ 一體どんなユダヤ人です？』とお問ひつめになります。そこで皆して

話をでつち上げまして、こんな風な栗色の髪をして、髻を生やしたユダヤ人が、あの女を攫つて逃げ出すところを、みんなが見掛けました、とお話申し上げますと、『どうして、その男をつかまへなかつたのだい？』とお問ひ返しになります。何しろ、その男は、通りから通りへ、横町から横町へと、雲を霞と攫つて逃げましたもので、とお返事をしますと、『だが、あの女もよくよくの馬鹿だねえ、現在攫つて行かれながら、叫び聲一つ立てないなんて。うちのニコライだつたら、おめおめ攫はれて行くなんて馬鹿はしますまいよ』と仰せになります。そこでわたくしが『さうで御座いますとも、奥方さま、どうしてユダヤ人なんぞに負けられませう！』と申し上げます。もはや奥方さまは、まるで赤子のやうに何でも真にお受けになるやうになつたのでございます。ところが折も折、アレクセイ・ニキーチチがふと何気なしに、ちよいとした失策をおやり遊ばした、と申すより、あんまり策をお弄しになり過ぎたとも申しませうか、とにかく若様のお心算としては、一刻も早くマルファ・アンドレーヴナをわたくしと一緒に田舎へ發たせて、このやうな出来事を忘れさせてしまひたい、といふお氣持だつたに相違ないのでございますが、母君にかう仰しやつたものでございます。『ねえ、お母様、安心しておいでなさい。あの女侏儒はおつつけ見附かるに違ひありません。みんなで搜してをりますから。見附かり次第、すぐさま田舎へ御通知しませう。』ところが奥方さまは、早速このお言葉に飛びつかれて、『いや、みんなして搜してゐるとのことならば、わたしはもう少しかうして待つておませうよ。第一あの女を攫つたといふユダヤ人の顔を、一目みてやりたいからねえ！』と、かうでございませう。そこでわたくしどもは、嘔吐きの助太刀に探偵を一人やとひまして、その男がそれからは毎

日毎日やつて参つて、『搜索してはをりますが、まだあの女は見つかりません』と嘘をつくことになりました。奥方さまは毎日その探偵に青紙幣を一枚おやりになり、わたくしはまたお言附けで朝早く教會へ、行方知れずの婢の上を聖ヨアン・ヴォインストヴェンニクにお祈りするため、遣はされたのでございました。……」

「ヨアン・ヴォインストヴェンニクだつて？ ヨアン・ヴォインストヴェンニクへ祈禱するためにお寺へ通つたと言ふのかい？」と補祭が遮つた。

「左様でございます、ヨアン・ヴォインストヴェンニク様でございます。」

「いやはやこれはお目出度い話だ。とんだ見當違ひな聖者にお祈りを上げたもんだ。」

「補祭どん！ まあどうか大人しく坐つておいで」とサヴェーリイは極めつけて、「さあニコライ、先をおつづけ。」

「でも和尚さま、このうへ何で先を續けることがございませう、わたくしのお話はもうこれで済んだも同然なのでございますから。或る日のこと、わたくしはマルファ・アンドレーヴナのお供をしてイヴェールスカヤ聖母寺から歸つて参ります途中で、ちやうどペトロフカ街でばつたりヴィビオーロヴァ將軍夫人のお馬車と行き會つてしまひましたが、あちらのお供は誰あらう、あのメック・イヴァーノヴナだつたのでございました。そこでマルファ・アンドレーヴナは一部始終を悟つてお仕舞ひあそばし……皆様はまさかと思召すかもしれませんが、聲を忍んで、しかもさめざめと、お馬車の中で泣き出されたのでございました。」

侏儒は口をつぐんだ。

「それから、ニコラ」と、サヴェーリイ法主は先をうながした。

「それから先は、もうかうなつては知れたことでございます。やがてお邸に歸り着きますと、奥方さまはアレクセイ・ニキーチチに向つてかう仰しやいました。『ねえ息子や、現在の母親をだますなんて、お前もよつぽどのお馬鹿さんだことねえ。おまけに探偵までも備ふなんてさ。』さう仰せになつて、すぐさま荷物をまとめさせて、都を去られたのでございました。」

五

ニコライ・アフナーシエヴィチは小椅子の上で、やをら聴衆一同をぐるりと見廻して、さてかう附け加へた。——「前以て皆様にお断り申上げて置きましたやうに、このお話はこの通りなんの曲もない、さつぱり面白くないものでございます。さてわたくしども姉弟は」と、彼は起ち上りながら言ひ添へた、「この邊で御免を蒙りまして、お暇をすることにしませうよ！」

マリヤ・アフナーシエヴナは歸り仕度をはじめた。ところが補祭は、ニコライ・アフナーシエヴィチが見當違ひの聖者にお祈りを上げたといふ論難を、又もやここで蒸し返した。

「それは、補祭さま、わたくしなんぞの心得ます筋合のものではござりませんので」と、ニコラ

イ・アフナーシエヴィチは毛皮の大黒帽子を捜しながら言譯をした。

「いいや、心得ておなけりやならん筋合のものだぞ！ 断然さうだぞ！ どなたにお祈りを上げたらしいかぐらゐは、ちやんと心得ておなければならん。」

「まあお待ち下さいまし、お待ち下さいまし、實はその御用を承りまして最初にお寺に上りまして、『逃亡した婢』といふ願文に五十コペイカを添へて差出しましたところ、坊様がヨアン・ヴォインストヴェンニクに祈禱をお上げなされ、その後もずつと左様になされたのでございます。」

「いやこれは！ それが本當なら、その坊主よつぽどの碌でなしだわい……」

「なに？ なに？ なに？ なんで坊さんが碌でなしなんだね？」と、思ひもかけずベネファクトフ師から横槍がはいつた。

「だつて、ザハリヤ師、自分の職分を辨へないぢやありませんか」とアヒラは、ぐつと碎けた調子で、ベネファクトフに應じて、「逃げ出した婢のことで、何もヨアン・ヴォインストヴェンニクにお祈りを上げる筋はないぢやありませんかい？」

「なある、なある。ぢやあ、お前さんは誰方にお祈りを上げろといふんだね？ 誰方だ？ さあ誰方にだ？」

「誰方にですつて？ あんたはぢやあ、忘れたんですかね？ 長老席のところに昔は貼紙が出ておりましたつけがね。今ぢや剝がしてしまつたが、何のときに誰方にお祈りを上げろと、ちやんと書いてあつたのをわたしはすつかり覚えておますぜ。」

「なるほどね。」

「それだけの話でさあ！ 断つてお聞きになりたいなら、フォードル・チロン聖人、この聖人にお祈りを上げるのが本當なんでさ。」

「兎に角お前さんの咎めだては間違つてゐるよ、ヨアン・ヴォインストヴェンニクにお祈りを上げたのは正しいことだ。」

「しつかりして下さいよ、出鱈目を言はないで、ねえザハーリヤさん。」

「だから、その祈禱の上げ方は正しい、と言ふんだよ。」

「だから、しつかりして下さい、出鱈目を言はないで下さい、と頼むんですよ。」

「だが、何だつてお前さん、わしに喧嘩を吹つかけて来るんだね！」

「そりや違ひます、あんたこそわたしに喧嘩を吹つかけて来るんですぜ！ いいですかい、わたしがその心算になつたら、あんたをぐうの音も出なくしちまふことだつて出来るんですぜ。」

「よし、ぢやあ一つぐうの音も出なくして貰はうぢやないかい。」

「いいですとも、ぐうの音も出なくして進ませうとも！」

「さあ、やつて貰ひませう、ぐうの音も出なくしてみるがいい！」

「いいですとも、して進ませう。これほどお易い御用はないですて、何しろわたしは、あの揭示を語で覚えてるんですからね。」

「餘計なことは言はんで、さあ早くぐうの音も出なくして貰ひませう、さあさあ」とザハーリヤ・

ベネファクトフは、補祭の方を見たり、あるひは端然と沈黙をまもつてゐるトゥペローゾフ師の方を見たりしながら、嬉々とした笑聲を立てて、さう疊みかけた。

「ぐうの音も出なくして呉れと仰しやる？ よろしい」とアヒュラはきつぱりと言ひ放つと、即座に廣い袈裟の袖をさつと腕まくりして、右手でもつて折れよとばかり左手の大きな指を一本ぎゆつと折り曲げて、辯じ立てはじめた。——「まず第一に、頼へのつく病ひを癒さんには、聖マロイに祈るべし。」

「いかにも聖者マロイぢや」と、ベネファクトフ師は同意を表して、さう相手について繰返した。「咬みつく類ひの病ひを癒さんには、大殉教者アルテミイに祈るべし」とアヒュラは前と同じ仕方です本目の指を折つて、さう數へ上げた。

「いかにもアルテミイぢや」と、ベネファクトフは繰返した。

「石女を癒さんには、奇蹟行者ローマンに祈るべし。良人が妻を憎むに至れるときは、殉教者グーリイ、サモン、ならびにアヴィフに祈るべし。狐憑きを祓はんには、聖者ニフォントに祈るべし。淫欲を除かんには、聖女フォマイーダに祈るべし……」

「ならびに聖者モイセイ・ウーグリンに祈るべし」と、それまで頭を振りながら拍子をとるだけだつたベネファクトフが、小聲で半疊を入れた。

補祭は、もはや左手の五本の指は残らず折り曲げてしまつてゐたが、それを聞くとザハーリヤ師の眼をじつと見詰めたまま、暫く思案してゐたが、やがて今度は右手の指を折るため左手をすつかり開くと、かう言つた。——

「左様、モイセイ・ウーグリに祈つても宜しい。」

「さあ、次を次を。」

「酒亂を癒さんには、殉教者ヴォニフアーチに祈るべし。……」

「それからまた、モイセイ・ムーリンにもぢや。」

「何ですつて？」

「ヴォニフアーチならばにモイセイ・ムーリンにぢやよ」と、ザハーリヤ師は繰返した。

「その通り」と補祭も繰返した。

「さあさあ、その次は。」

「妖魔のまどはしを避けんには、殉教の僧キブリヤーンに祈るべし……」

「ならばに聖女ウスチーニヤにぢや。」

「いやだなあ、ザハーリヤさん、一々さう半疊を入れるのはよして下さいよ！」

「よすも何もあるものかい！ ロシヤ語でぢやんと書いてあるではないか、ならばに聖女ウスチーニヤに、とな。」

「ぢや、よござんす！ ならばに聖女ウスチーニヤに祈るべし、さて失せ物ならばに逃亡せる奴婢を手に入れんにはへと補祭はこの邊から一語一語力を入れながら、フォードル・チロンに祈るべし、その祭日は二月十七日なり。」

ところがアヒルラがこの最後の言葉をラッパのやうな大音聲で述べ立てるが早い、ザハーリヤ師

は相變らずの物靜かな冷やかな口調で、その文句の先をかう續けた。

「ならばにヨアン・ヴォインストヴェンニクに祈るべし、その祭は七月十日なり。」

「ならばにヨアン・ヴォインストヴェンニクに祈るべし、——」

アヒルラは大きな眼をぱちくりさせて、思はずかう言つた。

「さうだつた。やつと思ひ出した、——ならばにヨアン・ヴォインストヴェンニクに祈るべし、だ、つたつた。」

「そんなことなら、ねえ補祭さま、なんで一時間も言争ひをなさりましたので？」と、ニコライ・アフナーシエヴィチは、別れを告げようと手をアヒルラの方に差し伸べながら訊いた。

「さうさ、まつたく俺といふ人間には愛想が盡きるなあ。ならばに、つていふ奴を度忘れしたもんで、つい喧嘩をしちまつたのさ」と、補祭は答へた。

「それがつまり、頭の上の帽子、といふあれで御座いますよ。ところで、わたくしはその帽子を捜してをりますので。では眞平御免くださいまし、補祭さま。」

「『帽子を捜してゐる』だつて。……ええこの小つぽけな先生！」と、アヒルラは齒を剥き出してにやにや笑ひながら言ふと、ニコライ・アフナーシエヴィチを床から持ち上げて、手の平の上に坐らせて、かう叫んだ。——「どうだこの軽いことは、まるで綿毛みたいぢやないか！」

「おやめ」と、トゥベローゾフ師が命令した。補祭は侏儒を放して、床におろしてやると、おどけた調子で、ニコライ・アフナーシエヴィチがかう軽くつちやとても目方で賣るわけには行きませぬわい、と洒落れたことを言つた。が法主は、そ

ろそろアヒルラの落着きのなさ加減を些か苦々しく感じだしてゐたので、自らかう彼に答へた。――
「ぢや一つ訊くがな、目方で値段のつくのは一體誰ぢやらうな？」
「はて誰でせうかなあ？」

「どこかの巨きな圖體をした腕白者ぢやよ。」

「いや、これは一本まゐりました。」

「まあ怒らんで呉れよ、なあ。」

補祭はすつかり鼻白んで、木綿の鼻拭きでもつて自分の帽子の毳を撫でながら、呟くやうにかう言つた。――

「だが、あなたといふ方は、どんな場合にも何か策を使はずにはゐられないんですねえ」と言ひ棄てるなり、些が膨れ面をして、扉口から出て行つてしまつた。

間もなくほかの客たちも銘々にお辭儀をして、思ひ思ひの方角に散つて行つた。

ニコライ・アフナーシーエヴィチは姉と一緒に、青銅張りの三頭曳の馬車でまっしぐらに運び去られて行つたし、トゥベローゾフは他ならぬ例のダリヤーノフ青年と二人で、徒歩で川向ふへ歸つて行つた。法主がこの男と一緒に、聖餅焼きのプレボテンスカヤ婆さんの小屋にゐたところを、私どもは既に見た筈である。

一緒に橋を渡りながら、二人は一分ほど途中で立ちどまつたが、そのとき法主は、ふと思ひ出したやうにかう言つた。――

「思へば不思議なことではありませんか、今しがたあの侏儒がした昔語りは、わしはもう何べんとなくああして聞かされたものぢやが、それでゐながらあの婆様の編針がどうしたの何のといふ一向つまらん話が、わしを爽かな氣持にして呉れたばかりか、先日來の世間の新しい出來事のお蔭で、わしの陥つてゐた苛立しい氣分をも、きれいに鎮めて呉れたといふのは？　つまりこれは、わしがもう老境に入つて、回顧的になつてゐるといふことの、立派な證據ではありませんまいかな？　だがいや、さうばかりとは限りませんわい。わしは子供の頃からさういふ傾向がありましたな、今もひよいとこな事のおつたことが頭に浮んで來ましたわい。――それはもうわしが學生になつた頃のことぢやが、或る年のこと、わしが子供の頃をすごした村に歸つてみると、ちやうど其處では昔の木造の會堂を取毀して、恰好のよい石造りの寺を建ててゐるところであつた……それを見てわしはおいおい泣き出したものでしたわい！」

「何が悲しくつてですか？」

「まあ考へてもみて下され、その木造の會堂が名残り惜しくなつたのですわい。立派な明々とした新しいお寺がまた一つ露西亞の土地に建つ、その中はいかにも明るからうし信心ぶかい我等の子孫にとつてはいかにも温くもあらう。それを思はぬではないが、古い梁桁などが無慈悲に割られて薪にされるのを見れば、痛はしくてなりませんわい！」

「ですが、編針を動かすだけが能だつたり、自分の氣慰みのために侏儒に嫁さんをもらつてやつたりした時代から何の保存に値するものがありませう。」

「さやう。まあよく考へて御覽なされよ、さういふ乏しさの中に、實に夥しい豊かなものが潜んでをりますぢや。わしには、さういふものからロシヤ魂が息吹いて来るやうに思はれましたわい。わしはあの婆様のことを思ひ出してたちまち元氣で愉快な気分になりましたがの、つまりこれはわしの儉しさに對する悦ばしい酬いなのですわい。ねがはくはロシヤの人々よ、まあどうか皆さんも、この國の昔語りの趣きに合せてお暮しなされ。まつたく昔語りといふものは有難いものですわい！ 老境に臨んでそれを持たぬ人は、實に氣の毒なものですわい！ あんたがた若い人にとつては、かうした老人の杖の響きは單調でたまらんぢやらうが、わしにとつてはその杖の先から甘美な昔語りの泉が滴るのですわい！……おお、わしは叶ふことなら、わしの昔語りと一緒に、平和のうちに死んでゆきたいものですわい。」

「そりや仰しやるまでもなく、お望みどほりになりませう。」

「さうは言はれるが、どうもわしはの、叶はぬ望みのやうな氣がしますのぢや。」

「取越し苦勞ですよ。誰があなたの邪魔をするのですか？」

「いやいや、誰か邪魔だてをする者がないとは限りませんわい、限りませんわい。ぢやがな、ちよつと御覽、あそこに見えるのは一體なんぢやらう？」と司祭長は、坂の上に立ちはじめた濛々たる一團の埃に眺め入りながら、言葉を結んだ。

その濛々たる埃は、三頭立の旅行馬車に件つて起つてゐるもので、車上には二人の男が坐つてゐた。一人は丈高く肉づきよく、顔色は黒々と、眼は爛々と、そして途方もなく大きな上唇をしてゐる。も

う一人は、ほつそりして、くりくりと頭を剃つて、全く何の表情もない顔をして、淡色のうるんだやうな眼をもつてゐる。

この二人の旅人に乗せた馬車は、まつしぐらに橋を過ぎて、川を渡り終へるとともに岸について左へ折れた。

「なんといふ氣持のわるい連中だらう！」と、法主は振返りざまさう言つた。

「あの連中だれだか御存じですか？」

「いいや、仕合せと知りませんわい。」

「ぢや一つ、厭な報せを呈上しませうか。あれはつまり、かねて當地に来ることになつてゐた役人の、ボルノヴォロコフ公爵ですよ。久しく會はずにゐますが、ちやんと見覚えがあります。そら、やつぱりさうだつた。ね、ビジューキンの門のところまで停つたでせう。」

「ひとつ教へて下さらんか、あの中のとつちが當のボルノヴォロコフですか？」

「ボルノヴォロコフは左手の小さい方ですよ。」

「してもう一人は何者ですか？」

「もう一人の男は、多分ただの彼の書記でせう。これも何かと有名な男ですよ。」

「大法律家かな？」

「うむ！ いや、そのことは聞き及んでゐませんが、なんでもあの男は何か學生時代の事件で、要塞に禁錮されたことがあるんです。」

「いやはやこれは！　してその仁は何といふ名ですな？」

「イズマイル・テルモシヨソフ。」

「テルモシヨソフですと？」

「左様、テルモシヨソフです。イズマイル・ペトロフ・テルモシヨソフといふんで。」

「やれやれ、この御代には實に何とも色んな人間があるものですわい！」

「と仰しやるのは？」

「だつてさうではありませんかな。唇が厚かつたり、妻まじい形相だつたり、要塞に禁錮された
り、その擧句に自由の身になつたり、おまけにその男の名がテルモシヨソフだつたり。」

「まつたく、物凄いいことですねえ？」と、ダリヤーノフはからからと笑つて大聲を出した。

「してあんたはどうお考へかな、こりやてつきり、本當におそろしいことになりますぞ！」とトゥ
ペロゾフは答へた。――「名は體をあらはすと言ひますからのう。『オデュッセア』の歌びとが、

『人生れ落つるや美しき贈物としてその名を受く』と言つたのは本當ですわい。ぢやが、一たんこ
でお別れませう。今晚またお目にかかれますの？」

「必ず。」

「いや恐悦至極ですわい。その時また、名前や、その名の持主のことを、とつくり話し合へるでせ
うて。」

と言ひながら法主は道連れの手を握つて、そのまま二人は袂を分つた。

トゥペロゾフはその夕刻、イの一番に町長の邸に到着したが、來方があんまり早かつたので主人
はまだ午睡の夢をむさぼつてゐるし、命名日を祝はれる當の夫人はといふと、小やかな客間の片隅に
しつらへたソファをぐるりと取圍んでゐる愛玩の椿や夾竹桃の花にかかつた埃を、海綿で拭ひとつて
ゐる最中だつた。

夫人と法主とは互ひに頗る愛想よく、且つ平生の昵懇さを物語るさつぱりした態度で、挨拶を交し
合つた。

「これは早く來過ぎましたかの？」と法主はたづねた。

「早いなのつて、おつそろしくお早いお着き様で」と、夫人は笑聲を立てながら答へた。

「本當ですかい！　ぢややつぱり、愚妻が止めたのも尤もでしたわい。ところがどうも家にじつと
してゐる氣がしませんでな、お客になり來たくつてうづうづしましてなあ。さあ一つ、そのお花の
洗濯のお手傳ひでもませう。」

さう言ふなり老人は袈裟を脱ぎすて、下衣の袖をたくし上げると、濡れ雑巾をつかんで早速働き
はじめた。

かうして仕事にかかつて、その合間合間にこの花はどうかうのと夫人を相手に暢氣な言葉を交し
てゐたのも、まだ半時とはなるまいと思はれる頃、ふとこの邸の窓の下にあたつて、四頭立ての馬車
の乗りつける蹄の音がきこえた。トゥペロゾフはぎくりとして、窓の外を一瞥したが、思はずかう

* テルモシヨソフ——テルモは希臘語で熱を意味する。

獨り言をいつた。「やれやれ！ 違つたわい、急いで来てよいことをしたわい！」それから今度は大音聲で、かう呼びかけた——『バルメン・セミョーヌイチかね？ やあ君だつたのか？』そして、やをら馬車から立ち出でた貴族團長トゥガーノフを出迎へに、法主は、一さんに走り出た。

六

さて今や否でも應でも、私どもの年代記の途上に横たはる萬やむを得ざる事情のため、一時ここで古スタールイ・ゴロド市の法主とも貴族團長とも袂をわかつて、同じ町の全く別の一團の人々と交りを結ばざるを得なくなつた。私どもは消費税吏のビジューキンの家へ足を踏み入れなければならぬのであるが、そこへは今日、久しい前から今日来るか明日来るかと待たれてゐたペテルブルグの客人たちが、到着したのである。その一人はすなはち消費税吏の大學時代の同窓であるボルノヴォロコフ公爵で、今はなかなか羽振りのいいペテルブルグの役人、やれ何の檢察でござれの、やれ何の實施でござれのと、東奔西走席の暖まるひまとはない人物である。もう一人はその書記をつとめるテルモシヨソフで、これまたビジューキンの會での知人であり、思想の上の同志でもある。さて私どもがこの家へ足を入れるのは、すなはちこの家の前に、以上のやうな都の客人たちを古スタールイ・ゴロド市に送りつけた三頭立ての驛遞馬車がはたと停つた時刻、ちやうど夕食前のひと時と承知されたい。

そのとき當の消費税吏は不在で、この家の主人役は専ら消費税吏夫人によつて代表されてゐた。これはまだ若盛りの婦人で、その噂は既に何かとアヒュラ補祭や、聖餅焼きの婆さんや、乃至は教師ブレボテンスキイの口から、私どもの聞及んでゐるところである。實はこのたびの大切な客人たちを首を長くして待つてゐたのは、この美貌の婦人一人だけだつたのだが、なかんづく彼女が一方ならず待ち焦れてゐたのはテルモシヨソフの方で、その譯はつまり彼女が、この男のことを豫てから頗る勢力ある政治上の闘士と聞き及んでゐたからであつた。この人物の偉大なる性格や、この人物が如何に大切な人間であるかに就ては彼女は耳に聒聒ができるほど良人から聞かされてゐたので、それ故にこそ、自らも政治婦人を以て任ずる手前、この客人を待つ彼女の胸は一種のときめきを禁じ得ない次第なのであつた。かうしてお初にお目にかかる以上は、ねがはくは自分の評判にとつて都合のいい有利な面をお目にかけたいものだと思つたので、ビジューキナはその日は朝つばらから、彼女の住居の外観に加へられるそもその最初の一瞥からしてが、客人たちの胸にこちらの思はく通りの印象を生ぜしめるやうに、家の様子をとのへて置かうと大車輪のていだつた。消費税吏夫人は朝はやくから、數回にわたつて部屋々々を一つ残らず廻つてみて、どこもかしこも土臺お話にならん有様だと思つた。家具調度の申し分なくしつらへてある小ざつぱりした客間の眞中に立ちどまつて、彼女はこんな風に絶望の叫びを上げたものである、——『駄目々々、まるつきりお話にも何もならないわ！ これちやまるで、あのポロホンツェフだの、あのダリヤーノフだの、あの郵便局長だのと、まるつきり同じぢやないの。早い話がそんじよそこの連中の家と同じだし、ひよつとすると、それよか

すつと上等かもしれやしない！ 例へばポロホンツェフの家には、壁爐カミンの上の置時計がない、だいいち壁爐なんていふものがまるつきり無いんだものねえ。だがまあ、假に壁爐はどうでもいいとしませう、何しろ衛生上いるものなんだから。それにしても、この壁からにゅーつと出てゐる仰々しい燭臺は何のぞまだらう、このお人形は何のぞまだらう、それにこの置時計だつて、ちゃんと廣間に時計がある以上、無用の長物ぢやないか？……そのまた廣間はどうか？ ああ情ない！ ピアノがある、樂譜がある。……駄目々々、とてもあの儘にしちや置けないわ。お初にお目にかかる方々から、假にもこのわたしがあんな下らない物のお蔭で、變な目で見られるやうなことがありでもしたら、わたしとても我慢がならないもの。あの何時か讀んだ『生ける魂』といふ聰明な小説の中に、マーシャといふ聰明な少女が、立派な邸に住んで銀のサモヴァルでお茶を飲んでゐる約婚の男に向つて手紙を書くところがあつたけれど、あんな風な手紙をテルモシヨソフがわたしに呉れるやうなことがあつたら、わたし、とても我慢がならないもの。あの聰明な少女は、その約婚の男に眞向からずばりと、こんな文句を書いてやつたのだつたわ、——「わたしが自宅の御様子を拜見した今となつては、二人のあひだのお約束は残らずお仕舞ひでございます」つてね。おお厭だ、そんなことになつてたまるものか。闘士といはれる人をお迎へする仕方なら、わたしちゃんど心得てゐるわ！ ただ一つ残念なことは、あの人達のペテルブルグの生活ぶりがわからない。……きつとあすこのあの人達の住居は、何もかもがむさくろしく出来てゐるに違ひないわ……いやつまり、立派にいついふ意味だけれど……ちよつ、つまりそのむさくろしくさ。……ええ、じれつたいわねえ。さうだ！ けれどねえ、これをみんな

な何處へ片附けたらいいんだらう？ いつそみんな棄ててしまはうかしら？ でもそれは勿體ないわ、毀れてしまふもの。それにみんなお金のかかつたものなんだし、おまけにそこらちゆう一面、何を見ても蟲唾の走るやうなものばかりなものを、今さら棄ててみたところで始まらないわ……ああ、寢室にはレースのカーテンが掛けてあるわ……まああれは、お客さんの目にかからない寢室のことだから、いいにして置ませう……けれど、何かの拍子にお目についたらどうしよう！……まつたく厭んなつちまふわねえ。おまけにそら、うちの子供たちは上等な着物をきてゐるわ！……いや、子供たちは出さないことにすればいい。いつものところに大人しくさせて置けばいいわ。それにしてもねえ……残らずみんな打棄うちやつてしまふのは勿體ない話だわ！ よし、かうなつたらもう、主人の部屋だけ模様替へして置くに限るわ。』

と思案をきめると、うら若い官吏夫人は下男たちを呼んで、良人の書齋にある餘計な（と彼女の考へるところの）飾りを、一つ残らず今すぐ物置へ移してしまふやうに命じた。

消費税吏の書齋は、何分にもこの家の専制君主である奥さんの部屋の方へ重點が置かれてゐるため、それだけでなくさへ飾りの乏しいところへもつて来て、今や根こそぎ剥ぎとられてしまつて、見るも無慙な光景を呈するに至つた。残つてゐるものといつたらテーブルが一つ、椅子が一脚、それにソファが二つだけで、そのほかには一物をもとどめなかつた。

『さあ、これで出来た』とビジューキナは考へた。——『わづか一部屋にしろ、とにかくちゃんと法に叶つた部屋があるんだわ。』それから彼女は書き卓の上にインクのしみを二つ作り、片隅の痰壺

を脚でひつくり返して、床べたへ砂を撒きちらした。……ところが南無三！ 廣間へ取つて返した消費税吏夫人は、自分がすんでのことで最も怖るべき品を見逃すところだつたことに氣附いたのである。視よ、壁間には聖像がかかつてゐるではないか！

「エルモーシカ！ ねえエルモーシカ！ 早くこの聖像を外して、物置へ……いや、わたしが簞笥の中へかくしちまはう。」

聖像は首尾よく匿されてしまつた。

「あの結婚の男は」と彼女は考へるのだつた、『生ける魂』の來るのを待ちながら、自分の胸像を毀したり、カーテンを破いたりしたつげが、なんて馬鹿げたことをしたもんだらう？ ねえエルモーシカ、カーテンを外してここへ持つておいで！ 早くお卷きつたら。さう、それでいいわ！ さあ今度は、お前さん、自分の服装をよく御覽。もうちつとましな服を着たらいいぢやないか！

「もうちつとましなと仰しやいますと？」

「さうさ、もうちつとましなのをさ。ほかにどんな服があるの？」

「韃靼風の半上衣がございます。」

「韃靼風の半上衣だつて、頓馬、『韃靼風の半上衣がございます』だとさ！ チョッキも、硬胸も、新しい裾長上衣も、みんな着込むんだよ、一分のすきもないやうにね。——それからね、『何の御用でござりますか、はい』とか、『畏れながら言上致しましたでござりまする、はい』とか、そんな從僕言葉を使ふのはやめにして、簡單明瞭に、『何か御用ですか？』とか、『先ほど申上げました』と

か言ふんだよ。分つたね？」

「分りましたでござります、はい。」

「駄目、『分りましたでござります、はい』ぢやないよ、馬鹿な子だわえ、簡單明瞭に『分りました』、ました、ました、ました、だよ。簡單明瞭に、分りました、だよ！」

「分りました。」

「さう、その通り。さ、早く着替へをしておいで、お客様がいらつしやるんだからね。分つたか

Sei.]

「分りましたでござります、はい。」

「分りました、と言ふんだつてば、馬鹿、分りましただよ。『分りましたでござりまする、はい』ぢやないつてば。」

「分りました。」

「分つたら、さ、向ふへおいで。」

わくわくと胸をはすませた主婦は自分の居間へはいつて、胡桃の木で造られた大型の衣裳簞笥をひらき、一渡り自分の衣裳を残らず檢分してから、その中で一番わるい着物を選び出すと、小間使を呼んで着替への手傳ひを命じた。

「ねえマルファ！ お前、領主様とか地主様とかいふ連中は大嫌ひだらうね？」

「それはまた、なぜでござります、はい？」

「ほらまた『なぜでござります、はい?』と来た。簡單明瞭に、『なぜですか』とお言ひ。お前さんがあの手を好くわけがあるものかね。」

小間使はさつぱり譯が分らず、途方にくれてしまつた。

「あの連中がお前さんに何のいい事をして呉れたといふんだい?」

「別にいい事と申して、何もござりませんでござります、はい。」

「そらまた、何もござりませんでござります、と来た。馬鹿だよ、お前は。するとつまり、お前さんあの連中は嫌ひだつて言ふんだね。ちやこれから先は、後生お願ひだから、あたしに向つて『何故でござります、はい』とか『何もござりませんでござります、はい』とか言ふのはやめにして、簡單明瞭に『何故ですか』とか『何にもありません』とか言ふんだよ。分つたね?」

「分りましてござります、はい。」

「そら、その『分りましてござります、はい』がいけないつてば。簡單明瞭に『分りました』だよ。」

「でも奥様、なぜさう致すのでござりますか?」

「あたしがさうしたいからさうするんだよ。」

「畏まりましたでござります、はい。」

「そらまた『畏まりましたでござります、はい』だ。今言つたばかりぢやないか。簡單明瞭に、『畏まりました、分りました』と言ふんだつてば。」

「畏まりました、分りました。でも奥さま、どうも申しづらひので。」

「言ひづらひつて? その代り、今に樂になるよ。今にみんなさういふ言葉遣ひをするやうになるんだよ。聞いてるね?」

「伺つてをります、はい。」

「そらまた『伺つてをります、はい』だ。……馬鹿。もう向ふへおいで! もう一ぺんそんな受け答へをしたら、今度こそ追ん出しちまふよ。簡單明瞭に『聞いてゐます』と、それだけでいいんだよ。間もなく領主様とか何とかいふ連中は一人もなくなつちまふんだよ。お前にはこれが分るか? 根こそぎ無くなつちまふんだよ。ああいふ連中はもう直き……斧でもつてばつさりやられちまふんだよ。分つたね?」

「分りました」と小間使は、どうしたらこの窮地を脱することが出来るのかまるで無我夢中で、さう答へた。

「さ、向ふへおいで、そしてエルモーシカにおいでとお言ひ。」

「序でもう一つ、あたしが家で學校をやつてゐるといふ事にしなければいけない」と思つたので、ビジューキナはエルモーシカに五コペイカ銅貨を十枚わたし、これを餌にして往來から出来るだけどつさり男の子を集めておいで、來たらもう五コペイカ宛あげると言つて——と言ひ附けた。街エルモーシカはもの十分ほどすると、檻襖を引きすつた男の子を大ぜい引連れて歸つて來た。街のいたづらつ兒の面々である。

ビジュリーキナは彼等に五コペイカ宛分けてやり、良人の書齋に坐らせてから、かう言つて聞かせた。

「わたしはこれからお前さん達に勉強をさせて上げて、その御褒美に五コペイカ宛上げませう。いいこと？」

腕白たちは小鼻をびくつかせて、シュツシュツいふ發音で、

「ふうん、悪くねえなあ。」

「でもあたいたち、本なんか讀めねえよ」と、ほかの連中よりはちつと利口な兒が答へた。

「唱歌を教へて上げるわ、本ぢやなくね。」

「うん、唱歌か、そんならいいや。」

「エルモーシカ、さあお前も並んでお掛けな。」

エルモーシカは腰をおろして、極り悪さうに口を手で蓋をした。

「ぢや、あたしの後をつけるのよ！」

鍛冶屋の店から、ひよつくり出て來た、鍛冶屋の若い衆。

子供たちは飛び飛びながら、何とかかとか後をつけた。

「『よいよい！』とビジュリーキナが音頭をとつた。」

「『よいよい！』と子供たちは繰返した。」

匿し持つたは、ナイフが三挺、するどい切れ味、よいよい！

そのときエルモーシカは頭をもたげると、窓の外をみて、かう叫んだ。――

「奥さん、お客さんですよ。」

ビジュリーキナは、子供たちに唱歌を教へながら振つてゐた定規を、思はず手から取り落して、一さんに廣間へ駈け込んだ。

エルモーシカは奥さんを追ひ越して、眞先に玄關へ飛び出した。ちやうどその鼻先の登り段へ、今やまさにボルノヴォローコフとテルモジョーソフが馬車からひらりと跳び下りるところだつた。うら若い政治婦人は頗るもつて得意であつた。つまり客は、彼女がいはゆる満飾を施し了せた折も折、都合よく來て呉れたのである。

ボルノヴォローコフ公爵とテルモジョーソフとは、仔細にこれを眺めると、ちらつとトウペローソ

フの眼にうつつたのとは大違ひで、遙かに興味津々たる人物であつた。

當の檢察官ときたら、ぐつすり寝込んだ金目鯛きんめたいに生き寫し、ちんちくりんで、縮くれあがつて、鰭が廣くて、眼は何だか寝呆けたやうな水氣で一ぱいに張られてゐる。打ち見たところこの人物は、何の役にも立たぬ、何の取柄もない男にみえる。人間なんぞぢやなくて、まさに寝呆けた金目鯛だ。それも、海といふ海、湖といふ湖を渡りあるいた擧句、今やぐつすり寝込んで、體內には燃えるものも光るものも何一つないまでにちんと凝固してしまつた、といつた鹽梅だつた。

一方テルモシヨソフはといふと、さながら神話に出て来るあの半人半馬の怪物をつくりだつた。いかにも男性的な堂々たる身長へもつて来て、その體格は健康さうでありながら、しかも純然たる女性の恰幅だつた。つまり肩幅が狭くつて、腰廻りがやけに廣いのである。腿はまるで馬の腿にそつくりだし、膝のところも團々として肉附きがいい。腕は瘦せこけて筋張つてゐる。頸すぢはひよる長いけれど、大多數の成年男子に見られるやうな喉佛は出てをらず、むしろ馬の頸みたいに贅肉がついてゐる。頭には鬘が四方八方へばさばさ垂れてゐるし、顔は淺黒く、それへちよいとアルメニヤ人みたいな長い鼻がくつき、方圖もなく大きな上唇が、さも重たさうに下唇のうへにどつしりと載つかつてゐる。テルモシヨソフの眼は茶色で、瞳玉の上にはくつきりと黒い斑點が幾つもついてゐる。その眼差しはじつと穴のあくほど人をみつめるたちで、いかにも敏さうな眼つきである。

新來のこの客人たちの服装も、やはり注目を惹くに足りるものだつた。ボルノヴォロコフは、乗馬用上衣に類した小さな灰色がかつた外套を着込み、色どりのある縁をつけたスコットランド風のシ

ヤッポをかぶつてゐるし、テルモシヨソフの方は、だだつ廣い焦茶色の羅紗の寛衣に、幅の廣い黒い革帯をしめ、緑色の縁に前立てのついた制帽をかぶつてゐる。ボルノヴォロコフはキッド革の半長靴をはき、テルモシヨソフは所謂スヴォロコフ型の長靴をはいてゐる。

これを通觀するに、テルモシヨソフの出來は、裁ち方もゆつたり裁つてあれば縫ひ方も丈夫に縫つてあつて、全體としてその長官に比べて遙かにどつしりとした存在である！ このどつしりした感じは、彼の頗る立派な舉措動作によつて、彌が上にも強められるのである。

檢察官ボルノヴォロコフは、馬車から立ち出ると、玄關の昇降段に歩み着くまでに、あたかもこの町を觀察するかのやうに、否むしろこの町に見惚れでもしたかのやうに、きよろきよろ四邊あたりを見廻したりうしろを振返つたりしながら、足早な、しかも不規則な歩みを五六歩あゆんだが、一方テルモシヨソフの方はぼかんと見惚れるでもなく、きよろきよろ見廻すでもなく、かといつて別に尊大ぶつた顔をするでもなく、ただボルノヴォロコフの左肩のところあたりに附いて、靜かに悠々と歩いて行くのだつた。テルモシヨソフは例の馬みたいな頭を稍と胸もとへ垂れるやうにし、さながらそのとき彼の長官が腦裡で考へてゐる事柄を恭しく拜聴してゐる、といつた風情であつた。ビジューキナはかうした一切の様子を目にしたのである。彼女は新來の客人たちの一舉一動を窓框のかけから觀察して、當惑のあまり茫然自失の體だつた。一たいこの二人のうちどつちが檢察官ボルノヴォロコフで、どつちがテルモシヨソフなんだらう？ 彼女の考察にしたがへば、ボルノヴォロコフ公爵は必ずやあの大男の方でなければならなかつた。蓋し彼は制帽をかぶり、帽子に前立をつけてゐるからで

ある。そしてもう一人の、制服をつけずに乗馬服をまとひ、色模様の帽子をかぶつた方は、てつきりテルモシヨースフに違ひない。蓋しこれは自由の人で、自由雇傭契約で勤務してゐる人間だからである。なほそのほかに、もう一つ主婦の頭を悩ましてゐる問題があつた。それは、どんな工合に彼等を迎接すべきか、といふことだつた。……表へ出て出迎へるか？……それぢや何だか儀式ばつてしまふ。いつそ何もしないで、二人が上つて来るまで坐つてゐるか？……それもわざとらしくて變だ。本を讀んでゐたらどうだらう？……それぞれ、本を讀んでゐるのが一等自然だ。

そこで彼女は、手當り次第に本を一冊とりあげて、その上から窓の外へ眼をはなつと、彼女がテルモシヨースフとばかり思ひ込んでゐるボルノヴォロコフの手が兩方とも、ひどく穢いのに氣がついた。その一ぱう彼女の安逸な兩手は、泡のやうに眞白なのである。

ビジュキナは忽ち、窓の上に置いてあつた植木鉢から土を一握りつかみとると、それを兩手の平でこすり合せ、さて膝をぽいと組んで、本を手に、窓の方へ半身をひねつて腰かけてゐた。

と丁度その瞬間、玄關に當つて陽氣な、愛嬌たつぶりの低音が聞えて、つづいて扉が音高くひらいたかと思ふと、二人の客は前房へはいつて來た。テルモシヨースフを先頭に、つづいてボルノヴォロコフが。

八

主婦は坐つたまま、身じろぎもしなかつた。彼女はその時になつてやつと、窓の上に置いてある花がお客様の眼にはさぞや場違ひに見えることだらうと思ひ當つて、すつかりどきまぎしながらも、何とかしてそれを聞いてゐる小窓から手際よく抛り出せないものかと思ひ廻らしてゐたのである。この思案にすつかり夢中になつてゐたので、新來の客人のうちの一人が彼女に向つて放つた第一の質問も耳にとめない始末だつた。そのお蔭で彼女は、正銘讀書に没頭して吾を忘れてゐる人物らしく見えたのであつた。

テルモシヨースフは闕ごしに彼女を打眺めて、その質問を繰返さざるを得なかつた。

「ちよつと伺ひますが貴女はどなたで、ひよつとしてビジュキナ夫人では？」と彼は、そろそろ廣間へはいり込まうとしながら訊ねた。

「わたくし、ビジュキナですわ」と、席を起たずに主婦は答へた。

テルモシヨースフは廣間へはいつて、こんな風に喋りだした。――

「僕はテルモシヨースフといふ者で、つまりペトロフの息子イズマイル・テルモシヨースフでして、その昔あなたと同窓に學んだものでしたが、その後ばかけた事から絶交してしまひまし

た。それからここにおいでになるのは公爵アファナーシイ・フェドセーイチ・ボルノヴォローコフでして、ペテルブルグのお役人、このたび檢察官として當地の人たちを残らず點檢に参つたのです。今日は！」

テルモシヨソフは手を差し出した。

ビジューキナはその手をテルモシヨソフに與へると同時に、残る片手で窓框に本を置きながら、例の鉢をみごと往來へ突き落してしまつた。

「やあこれは。あなたはどうかやら、花を窓の向ふへ落してしまはれたやうですね？」

「いいえ、なに、空っぽなんですの。……あれは花どころか、切創に利くほんの草なんですけれど、もう利かなくなりましたの。」

「そりや勿論、利く筈はありませんとも。今どき切創を草で癒さうなんて唐變木がどこにゐるもんですか。だが、しかしですね、ひよつとしたらまだそんな頓ちきがゐるかもしれませんなあ。時に御良人はどこにおいでで？」

ビジューキナはちらつと、一言も發することなしに靜かにソファに腰掛けてゐる檢察官の方を眺めて、宅はただいま不在ですとテルモシヨソフに答へた。

「御不在！ いや、結構々々。内輪同士の勘定は後でいいです。何しろ昔は大の親友だつたものですからねえ。ところが後で、馬鹿なことからちよいとばかり喧嘩をやつたんですよ。だがまあ、そんなことは兎に角、さつくばらんに言つちまへばですね、あなたの御良人にとつちや貴女は過ぎ者です」

よ。いや全く、あんたは過ぎ者ですよ、——あんたが過ぎ者だつていふことは、こりやもう議論の餘地もないところですよ。あの男はお人好の薄野呂さ——それだけの人間なんだが、果報至極にもあんなのお蔭で、歴乎とした消費稅吏の椅子にありついたので。しかもあんたはその若さで、何から何まできれいに巧くやりなすつた。亭主に椅子を運動してやつた上に、どうですこのお住居の見事さは！」と彼は、廣間から見渡せる限りの部屋を一々覗き込みながら附け加へたが、ふと一切の裝飾を引つ剝がれてしまつた書齋の閶際に、一團の子供がかたまつてゐるのを發見して、更に言ひ添へた。

「や、や！ さては學校をやつてをられるんですね。なある、さればこそあの部屋が粗々末々のだといふわけですな。なあに、學校ならあれで結構。ときに貴女は、あの腕白どもに何を教へておいでなんで？」と彼は俄然さう言葉を結んだ。

機轉の利かないビジューキナは、ぐつと返答につまつてしまつたが、テルモシヨソフが自分で助け舟を出して呉れた。彼女の返事を待たずに、彼はつかつかと腕白連の方へ歩み寄ると、その中の一人の顔をぐいともちあげて、かう話し掛けた。

「どうだい？ 豌豆まめがうまく盗めるかい？ しつかり盗むがいいぜ、なあ兄弟、そしてお前さんがシベリヤへ流されたら、その時は僕が祝福を授けてやるぜ。ねえビジューキナ夫人、こいつらを歸してやんなさい！ さあさ腕白さんたち、家へ歸つたり歸つたり！ 豌豆行進曲はじめえ。」

子供たちはそつと進み出ると、鷺鳥みたいに一列を作つて廣間の端から端へ延び、すばやく壁づた

ひに走り抜けて、それから庭先を駆け行つてしまつた。

「一たい學校なんてそも何ぞやですよ。退屈きはまる代物でさあ！」

「わたくしもさう思ひますの」と、主婦は勇を鼓して口を挿んだ。

「勿論のことですとも。ときに、何か補助金をお貰ひではないので？」

「いいえ。補助金なんてとんでもない！」

「なぜです？ ほかの連中は貰つておますぜ。やあ、あれは多分あなたの愛の結晶でせうな？」と彼は、一張羅を着込んで部屋にはいつて來たエルモーシカを指さしながら訊いたが、別に返事を待つでもなく、早速彼に話しかけた。

「ねえ君、愛の結晶くん！ ひとつ顔を洗ふ仕度を女中さんに言つて呉れたまへよ！」

「それはわたくしの子供ではございませんの」と、主婦はあわてて抗議を申込んだ。

が、テルモシヨーフには聞えなかつた。てつきりこれがこの家の主婦の息子とばかり思ひ込んだ彼は、この子の教育法や指導法に關する所信を彼女に向つて開陳するのだつた。

「役人になるやうに仕向けるんですな。文學好きになんぞしちやいかんですぞ。現にこの僕なんぞは、役所勤めをする資格なんか土臺ないんですが、それでもどうやらかうやら、よしんば曲りなりにせよ、とにかくこの道に入り込みましたよ。まつたくでさ。現にこの僕なども、昔はやつぱりニヒリストでしてね、あなたの良人が役所勤めの口を見附けたのを見て、向つ腹を立てさへしたもんでしたつけ。いやはや思へば若氣の過ちでさ！ なぜまた役所勤めが悪いことがありませう？ 役所勤めを

してこそ兄弟を可愛がつても貰へるし、勤めてこそお金も取れるといふ譯でさ。おまけに勤めれば勢力も得られるし、——これなんぞは文學なんかには無いことですからね。向ふぢや天稟とか何とか喧しいことを言ふが、こつちの世界ぢや天稟なんぞ百害あつて一利なしでね、さつぱり人氣がありませんよ。ええ、さうですとも、奥さん、さうですとも！ 息子さんには役所勤めを教へ込むんですな、役所勤めを。」

「それもさうですけど……。でもしかし、工業方面もだいたい流行のやうで」と、ダンカは一矢を報いた。

「流行？……なるほど流行か」と、皮肉な調子でテルモシヨーフは答へた。「だがあれはね、しよつちゆう流れて行くよりは、もう少しどつしりとすわつた方がいいんですけどねえ。いや、これで分つた、あなたは矢張り舊來の陋習が破れん人なんですわねえ。このロシヤぢや、生活の力は役所勤めにこそあるんで、工場なんかにはありませんよ。ありやあ暢氣儘な生活にすぎないんだが、僕はこれでも正銘な仕事に奉仕してるんですからねえ。僕は人間の品別けをやるんですよ。お前はそんな人間か？——そんならお前はかうかう。お前は左様な人間か？——ぢやお前はしかじか。お前はこつちの味方ぢやないね？ よし、ぢや俺はお前を締め上げるぞ、首を絞めちまふぞ、破滅さしちまふぞ。さてこの手数料は國庫から頂戴しますぜ。なに、澤山はいりませんや、まづ三千か四千ほど出して下さい。今どきはまあその位の相場なんです。おや、あなたは何故さう穴のあくほど僕をみつめておいでなんです？ それともお慣れでないもんで、かうした荒療治がお耳障りなんですかね？」

呆れ返つて物も言へない主婦を尻目に、客は滔々と辯じつづけた。――

「あんたはかうして學校を經營してらつしやる、それが何ですか？ 本來なら、そこいらの張三李四の作法で行けば、いや感服の至りですとか何とか、あんたを褒め上げるべきところでせうがね、どこいこのテルモシヨソフは實行派でね、生憎そんなお世辭は言へませんや。テルモシヨソフに言はせりや、かうです――學校なんか廢めなさい、害になるだけですから。なまじつか民衆に讀み書きを教へると、聖書を讀みだすのが落ちですからね。一體あなたは、教育といふ奴が破壊的要素に屬するとでもお考へですかね？ いや、どう致しまして。教育といふ奴は創造的要素の組でしてね、僕たちに差當つて入用なのは一切の破壊なんですからねえ。」

「でも世間では、かう申してゐるぢやございませんか――今どき我國の民に革命を起すことは不可能だ」と、思ひ切つて主婦は反駁した。

「左様さ、だいいち今なんの革命の必要が僕等にありませんかね。革命なんぞなくつたつて、この通り、事が僕等にとつて申分なく運んでゐるこの際さ。……だがそら、あんたの息子さんが、あの通り突つ立つて、聴耳をたててゐますぜ。大人の話さ、なんだつてあなたは聴かして置くんです。」

「あれはわたくしの息子なんかぢやありませんの」と、消費稅吏夫人は答へた。

「なに、息子さんぢやない。ぢや一體何者です？」

「小僧ですの、召使なんですの。」

「小僧だ、召使だ！ それにしちや乙に氣の利いたなりをしてゐる。おい小僧、俺たちの顔を洗ふ

仕度をして來い。」

「出來てます」と、エルモーシカはお仕込みの甲斐あつて、ぶつきら棒な返事をした。

「ぢや何故もつと早く言はんのだ？ 向ふへ行つとれ！」

テルモシヨソフはそこで、右の對談の間ぢゆう身じろぎもしないでゐたボルノヴォロコフの方へ振り向いて、頗るもつて愛想たつぶりの猫撫聲をして、かう言つた。――

「お鍵を拜借いたしませう、信玄袋からあなた様のタオルを出して参りますから。」

しかし黙りこくつた公爵はぶいと顔をそむけて、鍵を渡さなかつた。

「タオルなら、ちやんとお出ししてありますわ」と、主婦が口を挿んだ。

「あります」と、書齋からエルモーシカが金切聲を出した。

「『あります』か。なんて大聲を出すんだ、こん畜生。」

テルモシヨソフは、なかなか滑稽にエルモーシカの口眞似をしてみせて、『これこそ生粹のニヒリストぢやわい！』と付け加へると、そのままボルノヴォロコフのあとについて書齋へ行つた。そこには顔を洗ふ仕度が出來てゐた。

かうして初對面が濟んで、主婦は一人になつた。――一人になつたものの、山のやうな數々の新しい感情と底なしの思案とが、彼女のお相手をお勤めるのだつた。

ビジュキナはよもやテルモシヨソフがあんな男だらうとは豫期しなかつたので、すつかり度膽を抜かれてしまつた。彼女としては、この男の思ひがけない、彼女にとつて全く初耳の名論卓説を聴

くのは、いい氣持でもあり空恐ろしくもあつた。それが自分の待ち設けてゐたものより良かつたか、それとも悪かつたか、それはまだはつきりと判断はつかなかつたが、何はともあれ、彼女の耳にした話の中におそろしく便利な都合のいいことがどつさり詰つてゐることが、快いのだつた。それが彼女のお氣に召したのである。

『あれがつまり、賢くあれ、と世間でいふそれなんだわ!』と、テルモシヨソフの姿の消えた扉に感動の眸をじつと注いだまま、彼女はさう思案した。『誰を見ても彼を見ても、嚴格だつたり註文がやかましかつたりするものだけれど、あの人にはそんなところがちつともありやしない。何をしても許される、何をしてても宜しい、それでゐながらあの人には、怖ろしい人なんぞ一人もないんだわ。あんな人とならさぞ暮しいいことだらう。いやそれより、あんな人になら楽しく服従して行けるんだわ。』

この悪賢い新來者は、まんまとダンカの心を征服してしまつたのだつた。鼻つ柱の強いことでは、子供の時から父親にも良人にもヴァルナーフカにも、いや人間社會の誰にだつて退けを取らなかつた彼女だつたが、その鼻つ柱が突然へなへたと折れてしまつたのである。テルモシヨソフと對談したあとでは、ビジューキナは奴隸のやうに服従したくつて堪らなくなつてしまつた。彼女は早くもこの男に惚れてゐたのである、——惚れたといつても勿論それは合理的な惚れ方で、この男の一點の疑も挿むべからざる優越に惚れ込んだのである。この客の身についたものは何から何まで、ビジューキナの氣に入りだした。何といふいい聲だらう? 何といふ力強さのある聲だらう? それに押しなべて

何といふ立派な男だらう!……何といふ惚れ惚れするやうな人だらう! 彼女の良人みたいなにやけ男でもなし、プレポテンスキイみたいな薄野呂でもない。それどころか、あの人はきつぱりした、後へは退かぬ……つまり真正正銘の男性なのだ。……あの人は何事につけても後へは退かない。……あの人は、さうねえ……正銘の颯風ハヤテだわ……どおつと吹いて、火の手を煽つて、焼きつくして……といつた調子で、可哀さうにダーリヤ・ニコラーエヴナ・ビジューキナは、ただの惚れたはれたの騒ぎぢやない、猛烈な欲情の毒氣に當てられて、お醫者様でも手がつけられぬ状態になつてしまつた。それどころか、束の間は氣を失ひさへしたほどで、臉をとちて、今までついぞ經驗したこともない、ぎゆつと硬直させるやうな悪寒が、からだぢゆうに漲るのを感じた。口の中の、舌の根のところが痺れ、唇は冷たくなり、耳の中には急調になつた動悸の音がひびき、頸根つこで頸動脈がどきんどきんと波打つ音までが聞えた。

嗚呼! 萬事休すである! 可哀さうな消費稅吏よ、お前は一たい何處をうろろしてゐるのだ? お前は額がむす痒くはないか?——ちやうど仔山羊が角を折られる時のやうに。

九

戀のやつこになつたビジューキナの耳には、もう餘程まへから閉された書齋の扉ごしに、まるで家

鴨のやうに静かに水をはねかす音や、手荒に水を流す音や、喉頭で發する裝飾音やが聞えてゐた。が、それももうすつかりをさまつてしまつた今になつてもテルモシヨソフは姿を現さない。一たい彼は、あの黙まりこつくりのくしやくしやくした公爵を相手にまだ喋り足りないものであらうか、それとも眠つちまつたのであらうか？……としてさらさら無理からぬ次第で、何せ旅の疲れでぐつたりしてゐるんだから。それとも本でも読んでゐるのかもしれない？……何を読んでゐるんだらう？ それにしても、現に誰にも負けないほどの智慧者で、ものを書くほどのあの人が、何の讀書なんかする必要があらう？……とそんな感想が去來するうちに扉があいて、闕際にエルモーシカ少年がシャボン水を滿々と湛へた盥をささげて現れ、うしろの扉をあけつ放しで向ふへ行つてしまつたので、戸口ごしに何もかも手にとるやうにダリーヤ・ニコラーエヴナに見えはじめた。すつと向ふの、部屋の奥の方には、くしやくしやくした公爵の小つぽけな姿が立ち、窓の外を眺めてゐる。そのすぐ傍に、幾分こちらに寄つたところに、肉づきのいいテルモシヨソフの胴體が見える。檢察官もその書記先生も、二人とも帯ひろ裸の姿だつた。ボルノヴォローコフはラツパズボンをはいて、水の泡のやうに眞白なオランダ麻のシャツを着て、その上には絹のズボン吊の眞紅な紐が、肩からぶつちがひになつてゐる。彼の小つぽけなブロンドの頭は、きれいに撫でつけてあつたが、彼はまだそれを金屬製の櫛で念入りに撫で上げてゐた。テルモシヨソフの方はといふと、全身をこれみよがしにむき出した恰好で、その特徴やからだつきを惜しげもなく公開してゐた。シャツの襟はボタンがかけてないし、肘の上までまくり上げた袖は、筋骨隆々たる毛むくじやらかな腕をむき出しにしてゐた。

その兩腕にテルモシヨソフは、兩端に赤い雄鶏が刺繡してあるロシア製のタオルを持つて、自分のもじやもじやになつた濡髪を力一杯ごしごし拭いてゐた。

世にも快適なこのイズマイル・ペトロヴィチが、この作業を行つてゐる威勢のよさから判断すれば、ほんの今しがたまで、閉つた扉ごしにその部屋から聞えてゐたあの陽氣な力づよい、眞心のこもつた裝飾音は、てつきりテルモシヨソフが發してゐたものと斷定して間違ひはなく、ボルノヴォローコフの方は、ただ家鴨みたいにはちやばちやぼちやぼちややつてゐただけに違ひない。そこへエルモーシカが戻つて來て、ばたんと扉がしまつて、甘美な幻影は消え失せてしまつた。

ところがテルモシヨソフは、この短時間のうちに首尾よく鷲のやうな鋭い眼光で情勢を一望の下に收めてしまひ、くしやくしやくと公爵を置きざりにして姿を現し、以てビジューキナを慰める絶好のチャンスをとらへたのだつた。彼は乗馬上衣を肩へ引つかけたまま姿を現すと、エルモーシカの耳をつかんで玄關の方へ突き出して、そのあとからかう浴びせかけた。――

「こつちの呼ぶまで面を出したら承知せんぞ！」
それから彼は、公爵の残つてゐる書齋の扉にしつかりと錠をかけると、そのままの服裝で消費稅吏夫人の傍へびつたりと腰かけた。

「ねえ、ビジューキナさん、あんたの遣り方は怪しからんですぞ！」と彼は、無遠慮に相手の手を取つて口をきつた。「自分でも考へて御覽なさい、あんたはあの頓馬な小僧を甘やかして、すつかり駄目にしちやつたぢやありませんか。僕はね、あいつが公爵の袖をすつかり濡らしてしまつたから、こ

の仔豚めがけて嘔鳴りつけたんです。ところが奴の返事がね、『僕のお母さんは豚ネグロぢやありません、
アクシニヤつていふんです』だとさ。こりやつまり、みんなあんだのせぬですぜ、あんだが奴に解放
風を吹つ込みすぎたせぬですぜ。どうです？」

そこでテルモシヨソフは、がらりと聲を變へて、飛びきり柔しい調子でかう言つた。——「ねえ、
どう、どうなの？ どう？」このどう、といふ言葉には何ともいへぬ調子が籠もつてゐたので、ビジュ
ーキナは心臓がぞつと凍るやうな氣がした。彼女は、これは今しがた問ひかけた問題に對する返事を
求めてゐるのではない、實はそれは、さすがの彼女でさへその餘りといへば餘りの現實味の濃さに度
膽を抜かれずにはをられない、或る底意を含んだ事がらに對する返答を求めてゐるのだと察しがつい
たので、彼女は黙つてゐた。だがテルモシヨソフはぐんぐん押し來た。

「どう？ それともいけない？ どう、それともいけない？」と、ひどくもどかしげな調子で彼は
追求して來た。

ゆつくり思案してゐる場合ではなかつた。でビジューキナは、不安の眸をちらとテルモシヨソフ
の顔へ投げて、おづおづと言ひかけた。——

「ええ、でもわたし知らな……」

がテルモシヨソフは、ずばりと彼女の言ひさした言葉を遮つてしまつた。

「ええ！ ですね」と彼は大聲をあげた。「ええ、と言つたのね！ それでよし！ それ以上きみ
から何の聞きたいこともないんだ。さ、その可愛い手を出したまへ。僕はきみを一目みたときから、

お互ひに他人ぢやないと悟つた。だから別の返事がきみの口から出ようなんて思つちやゐなかつたん
だ。……」

「お茶を召上りませんか？」と消費税吏夫人は、相手の口説が耳にはいらなかつたやうなふりを
して、舌もつれのした聲を出した。

「いや、いらん。そんな手にや乗らないぜ。僕はそんな茶つばい男ぢやないんだ、滅茶苦茶な男な
んだ。」

「ぢや、葡萄酒でも？」と、相手の手を振りもぎりながら、ダーリヤ・ニコラーエヴナはささや
いた。

「葡萄酒？」とテルモシヨソフは鸚鵡返しに、「きみは『没藥より葡萄酒よりかぐはし』さね。
さあ、手を呉れたまへな」さう言ふなり、彼はその手にキスをした。

「そこで一つ伺ひたいことがあるんだが、きみは何だつてさう頑固に尼さん然と構へてゐるのさ？」
と彼は、相變らず相手の手をしつかり握つたまま、口をきつた。

「とんでもない、わたし尼さん振つてなんぞおませんわ！」と、ビジューキナはあわてて打消した。
「ぢやなんだつて、こんな喪章なんかくつ附けてゐるのさ。メキシコのマクシミリアン王の喪にで
も服してゐるといふわけかな？」さう言ひながらテルモシヨソフは、にやにやしなから彼女の指の
爪にたまつた黒い條を指さしてみせ、彼女を押しつけてかう言つた。「向ふへ行つて、手を洗つてお
いでー！」

消費税吏夫人はさつと耳まで眞紅になつて、危く泣きだすところだつた。ふだんは非の打ちどころのないほどきれいな爪をしてゐるのに、今日は褒められたい一心で、わざと穢なくして置いたのだが、今さら言ひ譯なんぞしても始まらない。……彼女は自分の寢室へ駈けだして行つて、手を洗ふと、微笑を浮べてとつて返し、かう宣言した。――

「さ、これでまた共和黨の女黨員になりましたわ。ほら、手が白くなつたでせう。」
しかし客は親指を立てて脅かす眞似をして、共和黨なんて言ひだすのは、馬鹿げきつた洒落だよと應酬した。

「そもそも共和國なんて糞くらへだ！」と彼は言つた。「そんなものを擔ぐとひどい目に逢ふのが落ちさ。ときに僕は政府の顯官連の寫眞を一揃もつてゐるんだけど、欲しかつたら進呈しようか。一緒に壁に掛けようぢやないか。」

「わたしもちゃんと持つてゐますわ。」

「どこにあるのさ？ ははあ、隠しちやつたんだね？ さうだらう？ サタンの親玉にかけて言ふが、どうだ圖星だらう。ペテルブルグからお客さんが見えるから、リベラリズムでお化粧をしとかうつてわけで、外して隠しちまつたんだね？ 馬鹿なことさ、ねえきみ、馬鹿なはなしだよ！ さあ行つて、早くここへ持つて來たまへ。僕が元のところへ掛けて上げようぢやないか。」

まんまと取つ捕まつて泥を吐かされてしまつた消費税吏夫人は、またもや耳たぶまで火のやうになつたが、卓子の抽斗からちゃんと額縁に嵌めた寫眞を一かかへ出してくると、テルモシヨーフの命

令で金槌と釘を持つて來た。相手は仕事にかかつた。

「僕はね、ここんところが一番いいと思ふな、この壁にこんな風に並べるのが？」と、彼は指で壁に線を引きながら思案した。

「どうぞあなた様のお宜しいやうに。」

「どうしてまだそのあなた様なんて言ふのさ。僕の方ぢやちゃんときみと言つてるのにさ。さ、肖像を順々にこつちへ寄越した。」

「みんな主人が買ひちらかしたものでなんですの。」

「上官を敬ふとは感心々々、まさに感服の至りだ！ 大臣さん達はずつと一列に下のところに並んで貰はう。さ、よこしたまへつてば？ こりや誰だい？ ゴルチャコーフか。これはカンツレル、素敵々々！ 僕らのためにロシアを守つて呉れた人だからなあ！ 護國の英雄といふわけだ、――よし、

この人を第一に掛けるとしよう。おや、こりや誰だい？ おやおや！」

テルモシヨーフは顔の高さまで、故ムラヴィヨフ伯の肖像をもち上げて、歌ふやうな調子で、

「ミハイロ・ニコライイチ、今日は、今日は、御機嫌よう！」

「お知合ひでしたの？」

「僕が？……つまり個人的に知合ひだつたのかと訊くんだね？ いや、僕は幸ひその厄を免れたけど、――仲間の誰かれは、この人の御高説を拜聴したものさ。評判はなかなかいいんだ、みんな褒めちぎつてるよ。この人は或る婦人をキリスト教に導いたことさへあるし、ネクラソフの詩興を掻き

立てたこともある。さ、よこしたまへ、早くこの人を掛けちまはう！」

「まあ、これですつかり納まる場所に納まりましたわ。」

テルモシヨソフは床へ跳びおると、主婦の肘をとらへて言った。

「さあそこで、御褒美にきみは何を呉れるつもり？」

それがビジュキナの耳にはとても滑稽にひびいたので、彼女はくすくす笑ひながら聞き返した。

「それは何の御褒美ですか？」

「分つてゐるぢやないか。骨も折つたし、氣もつかつたし、配列まで考へたんだからね。きみは、ぢや、恩知らずだね？」さう言ふと、テルモシヨソフはビジュキナの右手をとつて、自分の胸に押しつけた。

「どう、僕の心臓は熱いだらう？」と、相手の混乱に乗じて彼はたづねた。

ところがダリーヤ・ニコラーエヴナは氣を悪くして、ぐいと手を振りきると、むつとした調子で極めつけた。

「あなたは、しかし、何ぼなんでも無遠慮すぎますわ！」

「痛、痛、痛、痛！」にやんぼにやんども御無禮至極」と來たね。どう致しまして、「にやんぼにやんども」どころか、機を見るに敏、といふ次第さ」とテルモシヨソフは相手をおひやらかして、あいてゐる片手を彼女の腰へまはした。

「あなたの鐵面皮にも呆れますわ！ わたしたちがまだ知合ひになるかならぬかの間柄だといふことを、あなたは忘れておいでなんです」と、柳眉を逆立てたダリーヤ・ニコラーエヴナは、その身をふりもぎらうとしながら言ひだした。

「とんだことだ、僕はこれんぼつちも鐵面皮ぢやないし、何一つ忘れてなんかおやしない。それどころか、このテルモシヨソフは聰明で、率直で、自然で、生れながらの實行派だ、といふだけの話さ。君もし聰明な女なんなら、さつき君が僕と話をしたやうな親密な調子で男と話をするのがどういふ譯だか、自分で分つてゐる筈さ。そんな振舞ひをした譯が自分で分らないなら、つまりきみは馬鹿だといふことになる、一文の値打ちもない女といふことになるのさ。」

ビジュキナは勿論、是が非でも聰明な女性でありたかつた。

「あなたは、とても狡い方ね」と、彼女はテルモシヨソフの顔から自分の顔をかすかに外らせながら言った。

「狡いつて！ 僕のどこが狡いの？ もちろん、きみが僕を愛してゐる以上、それとも僕がきみのお氣に召した以上は……」

「一たい誰が、わたしがあなたを愛してゐると申しましたの？」

「へん、心にもないことを言ふのはいい加減にしないか！」

「いいえ、本當のことを申し上げてるんですわ。わたし、あなたなんかちつとも好きぢやありませんし、ちつとも氣に入つてなんかおませんわ。」

「でたらめも休み休み言ひたまへ！　なんで好きでないことがあるもんか？　いや、ぢやかうしよ。僕にはきみの氣持がよく感じられる、よく分る。だから一つ、僕の本心をきみに打明けようぢやないか。ただね、それには二人つきりでないといふのが困るんだが。」

ビジュキナは黙つてゐた。

「分つたの、僕の言ふことが？　お互に底の底まで分り合ふためには——ランデヴーが必要だと言ふのさ……勿論それは、政治的な目的があるんだが。」

ビジュキナは又しても無言だつた。

テルモシヨソフは溜息を一つして、靜かに相手の手をはなし、かう言つた。——

「いやはや、きみたぢや女といふものは、ロシヤぢゆうの女といふものは、胸甲斐のないものだなあ！　それでポーランドの女性と肩を並べようなんて、押しが太いといふものさ！　それどころか、きみらは遠くポーランドの女性に及ばないぜ！　願はくはこのイズマイル・テルモシヨソフを一人のポーランド女に授け給へ、だ。彼女は僕と一生涯連れ添つて、力を協せてアララト山をもくつがへすだらうて。」

「ポーランドの女は——わけが違ひますわ。」

と、消費税吏夫人はやつと口を切つた。

「なぜ違ふの？」

「だつて、あの連中には愛國心があるのに、わたしたちは祖國を憎んでるんですもの。」

「ふん、それが何だね？　ぢやあつまり、ポーランド獨立の敵は悉くポーランドの女性の敵だが、きみたちにとつては、ロシヤの愛國者が全部敵だといふわけだね。」

「その通りですわ。」

「よし、ぢやあこの土地で君にとつて一番手強い敵は一體誰なんだ？　それを言つて御覽、さうしたら、その男にこのテルモシヨソフの腕つぶしの強さを、しみじみ思ひ知らして呉れるんだ！」

「わたしの敵は大勢おますわ。」

「一ばん手強い奴をさ？　一ばん手強い奴の名を言つて呉れ！」

「一ばん手強いのは二人おますの。」

「その不運な奴の名を言ふんだ、名を！」

「一人は……この町の補祭のアヒルラですわ。」

「よし、補祭のアヒルラめ、覚えておろよ！」

「もう一人は、法主のトゥベローゾフですの。」

「ようし、法主のトゥベローゾフめ、今に見ろよ！」

「この土地ぢや、町ぢゆうが、人民が残らず、この二人の味方なんですの。」

「ふん、町ぢゆうが、人民が残らずさうだとしたところで、何のことがあるもんか。テルモシヨソフは當局の親玉連と馴染なんだ。だから町であれ、人民であれ、何の怖いものもないんだ。」

「しかも、その當局のお偉方は、大してあの人を最眞にしてゐるのでもありませんの。」

「大して眞屑にしてゐない、ぢや奴さんの破滅は益々確かになるわけだ。そこで一つ、然るべく固めの儀式を願ひたいもんだな。歌の文句にも、『われを愛せ、わがものとなれ、エロディアードよ!』つていふぢやないか。」

ビジューキナは臆する氣色もなく、彼にキスをした。

「いや立派々々!」とテルモシヨソフは歡聲をあげると、根ほり葉ほり彼女がその敵のトゥベロソフ及びアヒルラから酷い目に逢はされた次第を訊き出して、それが濟むとにやりと笑つて彼女の手を握りしめ、先刻からずつと彼の道伴れが居残つてゐた部屋へ引つこんでしまつた。

10

果報者の書記が戻つて來た時、檢察官はまだ眠つてはゐなかつた。

白い亞麻の上衣を着込んだ、このテモルシヨソフの道伴れ閣下は、彼のために用意された寢床に身を横たへて、脚を軽い毛皮にくるみ、臉をおろしてうつらうつらとまどろんでゐるか、それとも夢想に耽つてゐるところだつた。

テルモシヨソフは、閣下が本當に眠つてゐるのかそれともただの狸寝入りなのか確めたくなつたので、そつと寢臺へ歩み寄ると、その顔の方へかがみ込んで、名を呼んでみた。

「おやすみですか?」とテルモシヨソフは彼にきいた。

「うん」とボルノヴォロコフが返事をした。

「おやおや、うんはないでせう? 返事をなさる以上、おやすみぢやないわけですぜ。」

「うん。」

「いやはや、さつぱり辻褄が合はないなあ。」

テルモシヨソフはもう一つのソファの方へ退いて、例の乗馬上衣をかなぐり棄てると、同じく晝寝にかかつた。

「僕は、あなたがここであつたとしてらつしやるうちに、一稼ぎして來たんですよ」と、寢床へもぐり込みながら彼ははじめた。

ボルノヴォロコフはその返事に、又しても同じうんを發したが、この『うん』たるや全く特別な代物で、物問ひたげなうんとでも言ふのか、一種疑問の調子を帯びてゐたのである。

「いやこれはどうも、うんとは恐れ入りましたね。僕がこれでも、われわれにとつて頗るもつて有り難い或る種の發見をしたといふのに。」

「あの奥さんのことですか?」

「あの奥さんのことですか? 奥さんのことは奥さんのことで、自ら別問題でしてね、——行きがけの駄賃つてわけでさ! それどころか、あなたは覺えていらつしやるでせうね、モスクヴァのサドヴァヤ通りであなたにやつとのことでお目にかかれた時、僕が申上げたことを?」

「ああ、さうさう！」

「僕はかう申上げたんですよ。——閣下、至仁なる公爵閣下！ そんな風に舊友を振棄てようとして、逃げ廻るのは、よくない心掛けといふものですよ。そんな真似をするのは卑劣な奴だけですよ。僕はあなたにさう申上げましたつけね、それとも申上げませんでしたかね？」

「うん、あんたはさう言つたつけな。」

「有り難い！ 覚えておて下さつたんですね！ ぢや、これも序でに覚えていらつしやるに相違ないですね——あの時、すぐその後で引續き僕の考へを發展させてお目につけ、あなたは、つまり我等の平等の殿様ですよ、そろそろ自分の門地や官職の特権を笠に着て、僕達あなた方の舊友である舊山岳黨員に對して兎角横柄な態度を見せる傾向があるが、そんなのは悪い心掛けだといふことを、ちやんと論證してお目につけましたつけね。僕はそのことをすつかり筋道を立ててお話ししましたつけね。」

「さう、さう。」

「これは素敵だ！ あなたは、この僕をおひやかすのは不得策だとお悟りになつて、頗る従順になられたものでしたが、これは大いに褒めて上げますよ。あなたは、この僕を袖にしちや損だ、といふことに気がつかれた。だつて何しろ、諺にもある通り飢餓は大敵でしてね、人間一たび飢うれば何をしでかすか分つたもんぢやありませんからねえ。しかもこのテルモシヨソフの物覺えのいいことときたら正に一流だし、分別もなかなかある方ですからねえ。論より證據、あなたがその昔まだ錚々たる革命家として鳴らしてゐた時代にすら、僕はあなたがそのうち必ず轉向なさるに違ひないと、ちや

んと睨んでたんですからねえ。」

「うん。」

「そこであなたは、僕を書記として手許に飼つて置くことに決心なすつた。……いや、柄にもないお世辭をいつてあなたのお氣に障つちや悪いから、本當のところをあげすけに言つちまへば、それはあなたが決心されたんぢやなくつて、僕の方から無理やり僕を雇はせちまつたんです。まかりまちがへば、あなたが僕たちヴィスラ沿岸の仲間の誰彼と取り交した手紙を暴露しちまふてなことで、あなたをちよいとばかり脅迫してね。」

「やれやれ！」

「平氣ですよ、公爵。まあさうお歎きなさるには及びませんよ。モスクヴァの、あのサドヴァヤ通りで、僕があなたのボタンを引つつかまへて、あなたがそれを振りもぎらうとなすつてらした時、僕があなたに申し上げたことを此處でもう一ぺん申し上げませうか。テルモシヨソフに襲はれたからといつて、まあさう悲觀なさるには及びませんよ。イズマイル・テルモシヨソフは、かう見えてもあなたに大いに忠勤を勵まうといふんですからね。あなたは、テルモシヨソフみたいな騙兒がゐない代りに、もうちよいとばかり強かな奴等のゐる現代の黨と組んで、色んな新聞を發行なすつて、手を變へ品を變へて何とか人民どもを監督する地位にありつかうと、あくせくしてらつしやる。」

「なるほど。」

「ところが、そんなこつちや、いつまでたつたつて志は遂げられませんよ。」

「なぜね？」

「なぜつて、ひどく不手際だからですよ。今ちや愛國家連中にはあなたの正體が丸見えで、その旋毛を引つつかんで街路へおつぽり出されちまひますぜ。」

「ふうむ！」

「さうですとも。だからあなたは、新聞なんかみんな廢めちまつて、テルモシヨースフに『頼む』と一と言ひさへすりや、萬事よろしく事を運んでお目にかけますよ。あなた一つ、お伽噺のイヴァン王子におなりなさい、僕は及ばずながら灰色狼の役を勤めようぢやありませんか。」

「なるほど、きみは灰色狼ぢやわい。」

「そらね、その通りでせう。僕は灰色狼ですよ、だから、もしその氣になりさへすりや、あなたの手助けをして、黄金の鬘をした馬でござれ、火の鳥でござれ、王女でござれ、何でも手に入れて御覽に入れますよ。そしてまたもとの王侯の位に即けて上げますよ。」

さう言ひ放つと、灰色狼はさつとばかり自分の巢から飛び出して、主君と仰ぐイヴァン王子の寢臺の上に跳び移り聲を低めてかう言つた。――

「もうちいと壁の方へ寄つて下さいな。内々でお耳に入れたいことがあるんですよ。」

ボルノヴォロコフが身をにじらせると、テルモシヨースフは寢臺の端に寄添つて腰をかけて、相手を片手で抱きかかへるやうにしながら、ひそひそ聲で語りはじめた。

「まづ、手初めに教會を叩くんですな。禍根ここにあり矣ですよ。教會の親玉連を一つ小つぽどく

威しつけるんですよ。」

「おしにはさつぽり分らん。」

「ですからさ、一たいキリスト教といふものは人間を平等にするものか、さうでないか、と僕は伺ふんですよ。現に有名な爲政家のかたがたにしてからが、聖書を俗語に翻譯したのは、有害無益だと認めてをられるではありませんか。いやもう斷然、あのキリスト教といふ代物は……これを危険な意味に解釋しようとするれば、朝飯前に出来るんですよすからねえ。しかもさうした解釋をして民衆を煽て上げることは、どんな坊主にだつて出来る仕事なんですからね。」

「なあに、ロシヤにや碌な坊主はをりやせん、怖れるには及ばんよ。」

「左様、奴らが碌でもないうちは天下泰平ですがね、中にはおせつかいな奴のゐることも忘れちやいけません。その連中が坊主どもを嚇けないものでもないし、さうなつたら最後、坊主どもは俄然おそるべきものになつちまひます。奴らを大目に見ちやいけません、ぐいぐい緊め上げるやうにしなくちや。」

「なある、さうかも知れんな。」

「さうですとも。すつかり内狀を洗つて、ぐいぐい緊め上げる、といふ心掛けを忘れちや駄目ですよ、そこであなたは、運命がこのテルモシヨースフをあなたに賜つたことを感謝なさるやうになる。あくまで、あのイヴァン王子が灰色狼を頼りにしたやうに、この僕を頼りになさることですな。すれば僕は、報告書でござれ上申書でござれ天晴れ見事にでつち上げて、あなたを敵視してゐる連中まで

があなたに敬意を拂ひ、あなたの行政的天才を認めずにはゐらないやうにして差上げますよ。」

テルモシヨトソフはここで一段とまた聲を落して、こんな事を言ひだした。――

「ね、覚えていらつしやるでせう、――あなたがこの縣市に滞在してらした時のこと、縣知事官房の主事とお名残り晩餐か何かをなすつて、一緒にクラブから出ていらつしやりながら、お二人でなすつた話のことを。あの時、主事先生はこんなことを言ひましたつけね、――知事閣下は先頃の不手際な言動をわれながらつくづく後悔してをられる、とりわけ、色んな愛國主義者の連中と狎々しいまでの親密な仲になつたことで、後悔の臍をかんでをられるつて。」

「うん。」

「覚えていらつしやるでせう、その主事がこんなことも話しましたつけね、――或る自由思想派の坊主の如きは、知事閣下に毒舌を浴せかけたことすらあつたつて。」

「うん。」

「そこですすよ、あなたははつと思ひ當りやしませんでしたかね、――その坊主こそ名をトゥベロゾフといつて、ほかならぬこの町におるんだといふことにです。あなたがさうして長々と寝そべつて、報告の中に一字一句だつて書き込める筈もない、當のこの町にですすよ。」

ボルノヴォロコフは矢庭にがばと跳ね起きると、寢臺に腰をかけて、かうたづねた。――

「ちやが、官房主事がわたしに話したことを、君はどうして知つてをるのかね？」

「なあに、そのわけは頗る簡単です。あの時そつとあなたの方のあとをつけてゐたんです。あなた

のお目附役をするのも、萬更わるいことぢやないでせう。だがそんなことはこの際どうだつていい、よござんすか、われわれは先づこのトゥベロゾフといふ坊主に向つて作戦を開始するんです。その作戦が進展するにつれて、その坊主のながす害毒が明るみに出されるばかりでなく、さういつた類ひの僧職中の自主的な奴ばらの流す害毒といふものが、すつかり證據だてられるんです。その擧句の果には、宗教といふものは單に行政上の一形態としてのみ存在を許し得るものだ、といふ論理的結論が出て来るはずです。信仰といふものが眞剣な信念になるが早いか、もうそれは害毒なのであつて、従つて糺明して緊め上げなくちやならんのです。といつた思想は、あなたによつて初めて天下に唱道されることになり、行末ながくあなたの名とともに世に喧傳されるやうになるでせう。ちやうどマキアヴェルリやメッテルニヒの思想が喧傳されるみたいにね。どうです、僕の言ふことがお氣に召しましたか、殿様。」

「うん。」

「で、僕に行動をとる全權をお與へ下さいますか？」

「うん。」

「その『うん』は、どういふ意味にとつたらいいんです？ さうしろと仰しやるんですか？」

「うん、さうだ。」

「さう、さう來なくつちや！ なにしろあなたのその『うん』は、應とも否とも兩方にとれますからねえ。」

があなたに敬意を拂ひ、あなたの行政的天才を認めずにはゐらないやうにして差上げますよ。」

テルモシヨトソフはここで一段とまた聲を落して、こんな事を言ひだした。——

「ね、覚えていらつしやるでせう、——あなたがこの縣市に滞在してらした時のこと、縣知事官房の主事とお名残り晩餐か何かをなすつて、一緒にクラブから出ていらつしやりながら、お二人でなすつた話のことを。あの時、主事先生はこんなことを言ひましたつけね、——知事閣下は先頃の不手際な言動をわれながらつくづく後悔してをられる、とりわけ、色んな愛國主義者の連中と狎々しいまでの親密な仲になつたことで、後悔の臍をかんでをられるつて。」

「うん。」

「覚えていらつしやるでせう、その主事がこんなことも話しましたつけね、——或る自由思想派の坊主の如きは、知事閣下に毒舌を浴せかけたことすらあつたつて。」

「うん。」

「そこですよ、あなたははつと思ひ當りやしませんでしたかね、——その坊主こそ名をトゥベロゾフといつて、ほかならぬこの町にゐるんだといふことにですよ。あなたがさうして長々と寢そべつて、報告の中に一字一句だつて書き込める筈もない、當のこの町にですよ。」

ボルノヴォロコフは矢庭にがばと跳ね起きると、寢臺に腰をかけて、かうたづねた。——

「ぢやが、官房主事がわたしに話したことを、君はどうして知つてをるのかね？」

「なあに、そのわけは頗る簡単ですよ。あの時そつとあなたの方のあとをつけてゐたんです。あなた

のお目附役をするのも、萬更わるいことぢやないでせう。だがそんなことはこの際どうだつていい、よござんすか、われわれは先づこのトゥベロゾフといふ坊主に向つて作戦を開始するんです。その作戦が進展するにつれて、その坊主のながす害毒が明るみに出されるばかりでなく、さういつた類ひの僧職中の自主的な奴ばらの流す害毒といふものが、すつかり證據だてられるんです。その擧句の果には、宗教といふものは單に行政上の一形態としてのみ存在を許し得るものだ、といふ論理的結論が出て来るはずですよ。信仰といふものが眞剣な信念になるが早いか、もうそれは害毒なのであつて、従つて糺明して緊め上げなくちやならんです。といつた思想は、あなたによつて初めて天下に唱道されることになり、行末ながくあなたの名とともに世に喧傳されるやうになるでせう。ちやうどマキアヴェルリやメッテルニヒの思想が喧傳されるみたいにね。どうです、僕の言ふことがお氣に召しましたか、殿様。」

「うん。」

「で、僕に行動をとる全權をお與へ下さいますか？」

「うん。」

「その『うん』は、どういふ意味にとつたらいいんです？ さうしろと仰しやるんですか？」

「うん、さうだ。」

「さう、さう來なくつちや！ なにしろあなたのその『うん』は、應とも否とも兩方にとれますからねえ。」

テルモシヨールソフは長官の寢臺から引揚げて、かう言ひ添へた。

「だつてさうでせう……われわれ貧書生といふものは、いつまでもかうぶらぶらしてもおられないんですからねえ。あなたと違つて僕にや、昨日のニヒリスト約變して今日の暴吏となる、なんて器用な真似は出来さうもないんでねえ。僕はね、あなたのこと、自分のことも、ともに良かれと骨を折つてゐるんですよ。この上もう、食ふや食はずの貧乏暮しは眞平御免です。なにしろ僕といふ人間はどこへ首を突込んで、いつもきまつて『赤い』、『赤い』の一點ばりね、誰も使つちや呉れないんです。」

「ちつと白粉でも塗つてみちやどうかね。」

「その白粉を買ふ金もない始末でしてね。」

「なぜ君は、ペテルブルグでスパイを志願しなかつたのかね？」

「方々歩いて、志願してみましたよ」と、テルモシヨールソフは恬然として答へた、「ところがね、何しろ今日のこの一世に澎湃たる實利主義のおかげでね、みりりのいい空席は残らずもうふさがりだしてゐたんです。で先方ぢや、とにかく先に何か手柄を立てて見せて貰はうぢやないか、といふ言ひ分なんです。」

「だから手柄を立てて見せたらいいぢやないか。」

「ですから、腕を見せる機会を與へて下さいよ。さもないと僕は、先づあなたを初陣の血祭にあげますぞ。」

「畜生めが」とボルノヴォロコフは呟いた。

「むむ、む、む、う、う、う！」とテルモシヨールソフは大声で唸りはじめた。

ボルノヴォロコフは跳びあがつて、恐怖のあまり頭をかかへると、かう訊いた。

「そりやまた何かね？」

「これですかい？　こりやつまり黒い畜生が唸つてるところですよ、犠牲が欲しいつてね。そして、白い畜生どもに、もう少し俺に敬意を拂へつて言つてるところですよ。」

ボルノヴォロコフは忌々しさうに齒をぎりぎりいはせると、無言のまま壁の方へ寢返りを打つた。

「ははあ！　さうなすつた方がいいですわ！　おとなしくなさいよ、お上品な公爵さん、色が白いなんて自慢するぢやないですよ。さもないと、折角のその顔一めんに繪具を塗たくつて、灰黄茶いろにしちやひますぞ。おまけに半影のところは空色にして、ぼつぼつあばたを付けちやいますぞ！　よく覚えときなさいよ、この僕はね、あんたを罰するために派遣されて来たんだ。僕はあんたの冠の葉の中にある荊なんですぞ。恭しく僕を頭上に戴いてゐるがよろしい！」

ぐつたりしてしまつたボルノヴォロコフは息を殺して、狸寝入りを極めこんでしまつた。その一方勝ち誇つたテルモシヨールソフは、狸ならぬ正銘の堂々たる眠りに落ちたのである。

ビジュニーキナ夫人の遠來の客人たちの間に上記のやうな場面が演じられてゐる折から、當のダリーヤ・ニコラーエヴナは、召使たちを残らず召集して、自分のアパートメントの復舊をめざして、大活動を開始した。べつにスパルタ式生活をせんでも宜しいといふお許しが出たのに欣喜雀躍した彼女は、小さな夜會をまで催さうと決心したほどだつた。その席上、この小さな町の交際社會に立ち越えて彼女がいかに優れた人種であることか、しかるに、この鋭敏に潑刺たる自分は、理解もされず正しい評價も受けずに空しく減んでゆくのである——といふことを、珍客の前に誇示したかつたのである。

大童の作業はどしどし捗つていつた。部屋々々には、晴れの装ひが施されていつた。ダリーヤ・ニコラーエヴナも手も休めず、自身からテーブルの上に立つて、寢室の窓にかけ直したふかふかした両面織の白い窓掛の襷を、手づからとのへたのである。

窓掛の吊下げ作業が済むか済まぬうちに、暗い物置の部屋々々から續々として様々の小間物が脚光を浴びて登場し、壁にはあとからあとから繪があらはれる、壁爐の前には豪華な衝立がたてられる、壁爐の上には星形の振子のついた黒大理石の時計がのせられる、テーブルといふテーブルには眞新し

い高價な卓布がかけられる、ランプ、陶器、青銅、人形、その他ありとあらゆる小物が、苟も立て並べる場所がある限り所きらはず、寢室や客間のそこかしこにばら撒かれる——といつた騒ぎになつた。そのお蔭でこの家のなかは何處もかしこも、見境もなく無暗やたらに物を買ひ込む花柳界の金廻りのいい女の居間そつくりの體たらくになつてしまつた。

この作業が今や酣といふ折しも、ひよつこり教師のプレポテンスキイが現はれて、あつと仰天して二の句がつけなかつた。彼が『かうして洒落れたもの』を斷じて良しと認めるわけに行かなかつたことは、今さらあらためて言ふまでもない。苟も『新しい女』ともあらうものが、完全に氣でも狂つてしまはない限り、ペテルブルグの歴乎とした事業家の前に、かうまでの厚かましさをどうして發揮できるものか、彼としては常識ではとても分らなかつたのである。従つてプレポテンスキイはその場に突つ立つたまま、毒々しい微笑を浮かべながらかうした一切の贅澤品をじろじろ睨め廻してゐたが、教師の出現なんぞは氣の端にもかけぬダリーヤ・ニコラーエヴナが、家具にかけてあるカバーをみんな取つてお仕舞ひと、人もあらうに教師のゐる前で召使に横柄な調子で命令するのを聞くと、プレポテンスキイは到頭かんにん袋の緒を切らして、かう訊いた。

「そんな眞似をして、あなたは恥かしくはなんですか？」

「ちつとも。」

そして、呆氣にとられた教師を又もや全然氣にもとめず、ビジュニーキナは昨日擔ぎ出させたばかりの緑いろの常春藤を這はせた四ツ目垣をソファのうしろに据ゑるやうに命じ、さて壁爐のところを、

ふかふかした椅子の極上等なのを選びすぐつて、世にも居心地のいい一隅をしつらへはじめた。
「いやこいつは、厚顔無恥にもほどがある！」とプレポテンスキイは絶叫すると、傍へ歩み移して腰をおろし、何か新刊の本に目を通しはじめた。

「まあま今に御覽なさいよ、そんな事いつて、きつとひどい目に遭はされるから！」と、ダリーヤ・ニコラーエヴナは返事の代りに言つた。

「僕がひどい目に遭はされる？ 何が悪くつてですか？」

「二度と再びそんな大それた考へ方が出来ないやうにですよ。」

「一たい誰が僕をひどい目に遭はせることなんか出来るんですか？ 僕が潔白な考へ方をするのを禁ずる権利が、どのどいつにあるといふんです？……」

ところがその時ちやうどテルモシヨールソフの咳がきこえたので、ビジュエーキナはプレポテンスキイに向つて、手短かにきつぱりと申し渡した。――

「悪いことは言はないから、早くここを出てらつしやい！」

それがあまりにも出し抜けた意外な言葉だったので、相手にはそこに含まれてゐる厳しい意味が呑みこめず、従つて彼女はその命令をもう一度繰返さなければならなかつた。

「なぜ出て行けなんて言ふんです？」と、プレポテンスキイは呆れて問ひ返した。

「なぜつて、至極簡単な話ですわ。つまり、今後は一切お出入りをお断り申します、つていふことです。」

「こりやひどい、ねえ奥さん……そりやあなた、真面目な話ですか？」

「ええ、これ以上真面目になりやうがないくらゐにね。」

客人たちのゐる部屋からは、立ち上つて動き廻る物音がきこえた。

「ねえお願いだから出て行つて頂戴、プレポテンスキイさんてば！」と、苛立たしげにビジュエーキナは叫んだ。

「聞えるんですか、――出て行つて頂戴つてば！」

「だがまあ待つて下さいよ！……僕は何の邪魔にもならないぢやありませんか。」

「いいえ、違ひます、邪魔になりますわ！」

「そんなら、態度を改めるといふ手もあるぢやないですか。」

「態度を改めるなんて、あなたには出来ない相談ですわ」と、無理やりに客をその席から追つ立てながら、主婦はさもじれつたさうな立腹の語氣で言ひ張つた。

ところがプレポテンスキイの方でも、そろそろ持ち前の氣象を發揮しだして、穩かではあるがしつかりした語調で「なぜあなたは僕には態度を改めることが出来ないなどと断定するのですか」と、その理由を問ひつめはじめた。

「なぜつて、あなたは底なしのお馬鹿さんだからよ！」と、たうたうマダム・ビジュエーキナは狂氣のやうになつて絶叫した。

「いやはや、そんなら話はまた別だ」とプレポテンスキイは席を起ちながら答へて、「だがさうな

れば、一つ僕のあの骸骨を返して貰はうぢやありませんか……」

「あつちへ行つて、エルモ一シカにさう言つて頂戴。棄てておいでと言つてあの子に渡しときましたから。」

「棄てて来いつて！」さう絶叫するなり、教師は猛然と臺所へ飛んで行つた。やがて半時間もして彼が引き返して来てみると、ダリーヤ・ニコラーエヴナは既に目も眩いばかりの盛装を瀕らしてゐたので、教師は一目みるなり思はずたじとなつて、その肩をぎゅつとつかんだ。

「おや！ あなたはまだお歸りぢやなかつたの？」と、物凄い剣幕で彼女はたづねた。

「いや……僕は歸るところか、歸らうにも歸られないんです……なぜつて、あなたのとこのエルモ一シカが……」

「へえ、どうかしまして？」

「場所もあらうに、とんでもない所へあの骸骨を棄てやがつたんで、今ぢやもう手の施しやうがない始末なんで……」

「でもね、あなた、どうやらお話が長くなりさうですわねえ！」と、忿怒にいきり立つたビジュ一キナは絶叫するなり、プレポテンスキイの肩先をつかまへて、ぐいぐい玄關の方へ押して行つた。ところが丁度この瞬間、別の扉口にあたつてテルモ一ソフの姿が、組んづほぐれしてゐる兩人の眼に映じた。

一一一

「おや、おや、おや！ そりやまた何の故の追放沙汰ですかね？」と、些かまだ寢ぼけた眼をみはつて、彼はビジュ一キナに訊ねた。

「何でもございませんの、これはほんの……以前ちよいちよい宅へ参つたことのある馬鹿者なんですの」と、彼女はプレポテンスキイを放しながら答へた。

「だが何だつて今その男を追ひ出しますか、——どんな無作法な眞似をしたんです？」

「斷然そんなことはありません、斷然そんなことはありません」と教師が答へた。

テルモ一ソフは彼の顔をちらりと眺めて、かう言つた。——

「ところであなたは、どういふ方です？」

「教師のプレポテンスキイです。」

「どうしてその人を怒らしちまつたんです？」

「何一つ怒らすやうなことはしません、何一つそんなことはないんです。」

「よろしい、ぢや引つ返しておいでなさい、僕が仲直りをさせて上げませう。」

プレポテンスキイは即座に戻つて来た。

「なぜまたあなたは、この人のことを馬鹿者だなんて仰しやるんです？」と、教師の両手をぎゅつ

と掴みながら、テルモシヨールソフはビジュールキナに向つて訊ねた。「僕の見るところぢや、べつにそんな徴候もないやうだが。」

「そりや、勿論のことですとも、誓つて申しますが、僕は決して馬鹿者なんぢやありませんので」と、ヴァルナーヴァはにやにやしながら答へた。

「まつたくその通りだ。あなたをあんな風に扱ふなんて、奥さんもあまり褒められた話ぢやありませんね。だがそれはさうと、その罪ほろぼしに、手打ちのお茶を一つ所望したいですなあ。僕は寝起きにちよいちよいお茶を頂くことがありますんでね。」

主婦はお茶の用意をさせに行つた。

「まああなた、お掛けなさい、語り合はうぢやありませんか、ねえ先生！ 拜見するところ、あなたは頗る立派な、素直な方のやうですね」と、二人きりになると早速テルモシヨールソフは始めたが、それから五分ほどの間にまんまと、ヴァルナーヴァの口から彼の内憂外患の一切を、洗ひざらひ聞き出してしまつたものである。その告白のなかには、例の母親のことから、骸骨のこと、アヒルラのこと、トゥベローゾフのことまで、何一つ言ひ漏らされなかつたのであつた。就中このトゥベローゾフの名を聞くと、テルモシヨールソフは層一層聴き耳を立てたものである。それから、先日の朝補祭と萬屋ダニールカの間に展開された武勇傳も、やはり語り漏らされなかつたのである。

この最後の話を耳にすると、テルモシヨールソフは思はず喉を鳴らして、プレポテンスキイの膝をぽんと叩くと、小聲でかう言つた。――

「ぢや、ねえプロフェッサー、その町人に明朝わたしのところへ来て貰ふやうに、お取計らひを願ひたいですなあ。」

「あのダニールカにですか？」

「さうです。その補祭から酷い目に遭はされた男です。」

「お易い御用ですとも、これほど楽な仕事はないくらゐです！」

「ぢやお願ひしましたよ。」

「朝、日の出る前によこしませう。」

「日の出前すこぶる結構。いやいや、お見受けするところ、あなたといふ人は中々天晴れな方ですなあ、プレポテンスキイさん！」とテルモシヨールソフは褒め上げて、さてそこへ戻つて来たビジュールキナに向つて、かう附け加へた。――「いや奥さん、僕はこの人がすつかり氣に入つちまひましたよ。この上もしこの人が、トゥベローゾフといふ坊さんに僕を引合せて呉れたら、僕はこの人を立派な賢者と呼ぶことさへ吝みはせんですよ。」

「いや、僕にはあの坊主がとても我慢がなりません。あんな男と交際なさらんやうにお勧めしますよ」とヴァルナーヴァは舌たるい聲を出した。「でも、もしあなたが必要とされるのでしたら……」

「必要なんですよ、先生、必要なんですよ。」

「さういふ次第なら、御一緒に町長さんのお宅の夜會に参らうではありませんか。その席でなら、あなたはこの町の連中と一人残らず知合ひになれますよ。」

「それもいいでせう。どこへなりとお供はしますがね、それにや矢張りお招きがないと工合が悪いですなあ。」

「いや、そりや造作もないことです」と教師は遮つて、頗る簡單明瞭な計畫を披露した。つまりそれは、彼が今すぐこの足で町長夫人のところへ行つて、ダーリヤ・ニコラーエヴナから頼まれて來ましたが、今晚遠來のお客を一人お連れしたいと思ひますから何卒宜しくとの事です、と一言口上を述べて來るといふのであつた。

「プレポテンスキイ君、ここへ來たまへな、僕は君を抱擁するぜ！」とテルモシヨソフは叫んだ。「おまけにです」と、有頂天になつて教師はつづけた。「さうなれば先方の皆さんも、新しいお客様が見えるといふので御満足のこととせうし、あなたとしてもその席で、あのトゥベローゾフだけではなく、あの忌々しいアヒルラや、それにまた貴族團長とも知合ひにおなれになるわけですよ。」

「プレポテンスキイ君！　こつちへ來たまへ、僕は君にキスするぜ！」とテルモシヨソフは絶叫したが、やがて教師が席を起つて歩み寄つてくると、彼は本當に相手にキスをして、序でにくるりと廻れ右をさせると、かう言つた、「さあ行つて來たまへ！」

自分の評判のよさにすつかり氣をよくしたヴァルナーヴァは、意氣揚々として帽子を引つつかんで、駈け出して行つた。

その留守の一時間ほどを、テルモシヨソフがビジューキナを相手に、およそ馬鹿といふものには自分が愚かだといふことを感じさせてはいけない——といふ話をしてゐると、そこへ教師が戻つて來

て、ポロホンツニフ家の夜會に御光來を願ふ旨の一同に宛てられた招待狀を齎し、序でにかう言ひ添へた。——

「それから例の、あなたが會ひたいと仰しやつた町人のダニールカのことですが、僕はもうちゃん

と見附け出して引張つて來ました。いま門のところにて待たせてあります。」
テルモシヨソフはあらためてまたさんざんにヴァルナーヴァを褒め上げて、席を立つと、教師を連れてその部屋を出て、どこかひっそりとした場所へ案内して呉れ、そして其處へそのダニールカを連れて來て呉れ、と命じた。

プレポテンスキイはイズマイル・ペトロヴィチを、がらんとして人氣のない消費稅史の事務室へ連れて行つて、御用の町人をその前に立たせた。

「やあ今日は、市民君」とテルモシヨソフは如才ない調子でダニールカを迎へて、「この間の朝、この補祭が君を酷い目にあはせたつてね、どんな工合だつたの？」

「酷い目なんて、そんなことはありませんでした。」

「ない事があるものかね？　遠慮はいらんから、坊さんの前で打明話をする氣持で、ざつくばらんにすばすばすつかり話して呉れ給へよ。僕は民衆の味方だね、敵ぢやないんだからね。補祭のアヒルラに酷い目にあはされたんだらう？」

「いいえ、酷い目なんてことはなかつたんです。もうすつかりお互ひの話し合ひで鼻がついてゐることなんです。」

「鼻がつくなんて、あれだけの事にどうしてさう簡単に行くものかね？ あの男は君の耳朶をつかんで往來を引き廻したつていふぢやないか？」

「それが何のことが御座いませう？ ほんのくだらぬことでして。」

「何がくだらないどころなものはかね？ 立派な侮辱ぢやないか。ねえ君、市民君、よく考へてみ給へよ、——あの男は君の耳を引張つたんだぜ。」

「それにしたところでありや寧ろ冗談でしてね、わたしどもは侮辱なんて風に考へないんでして。」

「なぜ考へないのかね、ねえ市民君？ あれほどの立派な侮辱を、なぜ黙認するんだね？ しかも人の話によると、ほとんど衆人環視の中でやつたことださうぢやないか？」

「さうです、人中でございました、たしかに人中で。」

「ぢやあ君は、訴状を出さにやならんぢやないか！」

「どなた様へ出すのでございます？」

「そりや君、今度僕と一緒にここへ見えた公爵閣下にさ。」

「なるほどな。」

「でどうかね、君は訴状を出すのかね、出さんのかね？」

「でもその訴状のめあてといふやうなものは一體どんな物で？」

「罰金百ルーブルは課されるな、これがつまりそのめあてさ。」

「それは確かなお話で。」

「ぢや君は、つまり承知だね。早くさうすればよかつたんだよ。プレポテンスキイ君、さあここへ坐つて、僕の言ふことを書き取りたまへ。」

そこで、テルモシヨソフはプレポテンスキイに向つて、ボルノヴォロコフに宛てた請願書を口述しはじめた。その請願書たるや、かなり短いものではあつたが、頗る念入りの舞文曲筆を弄したもので、専斷の風の鼓吹者として法主の名までが擧げてあり、ダニエーラが補祭から糺明されたのも平生の心掛けが悪いからで、至極當り前な話だ、と當のダニエーラに向つて言つたことにさへなつてゐた。

「さあ署名をしたまへ、市民君！」プレポテンスキイが最後の一行を書き終へると、テルモシヨソフはダニエーラに向つてさう呶鳴つた。

ダニエーラはぎよつとして、ぶるぶるつと顫へた。

「署名をしなさい、署名をしなさい！」無理やりにその手にペンを押しつけながら、テルモシヨソフは説き賺すのだつたが、相手の「市民君」は藪から棒に、訴状なんか署名するのは厭だと駄々をこねだした。

「何んだつて、なぜ厭なんですか？」

「なぜつて、つまりわたしはそれが不承知だからなんで、はい。」

「なんだつて不承知なんだ！ ええ、この野郎、何だつてそんなことを言ふんだ！ 今まで黙つてやがつて、人に無料で訴状を書かしたときながら、今になつて不承知だなんて抜かしやがる。」

「不承知なんで、はい。」

「ははあ、署名の駄賃にルーブルの銀貨が欲しいつていふのかね？　なるほど君には分限者の相があるよ。さあ、さつさと署名をするんだ！」

と言ひながらテルモシヨールソフは、腹立たしげに相手の襟を引つつかんで、テーブルの方へ引き寄せた。

「わたしは……なんなりと思召しのままですが、とにかく署名だけは致し兼ねますんで」と町人は廻らぬ呂律で言つて、わざとペンを床へとり落した。

「ようし、その『思召しのまま』つて奴を見せてやらうか！　しやつ面を十ほどぶん殴られたら、お前さんさぞ気が済むことだらうなあ？」

度膽を抜かれた『市民君』は、いきなり全身をばつと退らせて、呂律の廻らぬ舌で言ひだした。

「閣下さま、お情でございます、無理を仰しやらないで下さいまし！　だつて、わたしが請願を致したところで、何の利目もありつこは御座いせんもの！」

「そりやあまた何故だ？」

「ほかでも御座いせんので、いつぞやわたしが町長さんの頼みで馬を盗み出す仕事を引受けました時、公爵の差配人のグリーチから蕁麻責めにされましたもんで、口惜しまぎれに請願を出さうとしたことがありますたが、皆の衆が寄つてたかつて反対を唱へましたんで。皆の衆の言ふことにや、やめにしろよダニールカ、さうなるとお前さんのとこを家宅搜索しろつてお布令が出るし、おいらはみ

んなで、お前さんはもうとつくにシベリヤ送りになつてのが本當でございますつて申立てることになるぜ——と、かうなんで。いやまつたく、わたしだつて自分で、自分の名譽のことを彼是言ひ立てるなんて柄にもないことだらう、重々承知してゐますんで。」

「ふん、自分の名譽とか何とかいふことあ、お前さん勝手にどうとも考へるがいいやね……」

「この土地の役人がたにしち、みんなわたしの行状は御存知なんで……」

「この土地の役人連中なんか、勝手にどうとも思はしとけばいいさ。おれ達はこの土地の人間ぢやないんだぜ、ペテルブルグの官員なんだぜ。分つたかい？——正銘の都から、ペテルブルグから遙々お下り遊ばした人間なんだぜ。そのおれが、お前さんに命令するんだ——即刻署名するがいいぜ、この極道者めが、とやかく屁理窟なんぞこねずにさ、さもないと……家宅搜索も何もなしで、早速シベリヤへ吹つ飛ぶことになるぜ！」

さう言ひながら金剛力のテルモシヨールソフは、力まかせに片手でダニールカの手を、残る片手でその喉もとを、ぐいぐい締めつけたので、相手はあつといふ間に忽ち茹で蝦みたいに眞赤になつて嘎れ聲をふりしぼつた。

「後生でございます、おゆるしを！　何でもお望みどほり書きますから！」

と言つたかと思ふと、ごほんごほん咳き込みながら身をちぢみ上らせて、例の訴状の下のところに金釘流で自分の名をのたくらせた。

テルモシヨールソフは直ぐさまその紙片をポケットへ納めると、ダニールカの鼻尖へにゆつと拳固を

突きつけて、かう言つて威しつけた、――

「いいか市民君、お前が請願を出したことを、事前に誰かに口外してもしたら、これだぞ……」

ダニールカは相變らず咳き込みながら、痺れた片手を振つただけだつた。

「いいか、こののらくら者めが、もしそんなことがあつたら、そのしやつ面をのしちまふぞ、頬つぺたを一枚に合せちまふぞ、齒をばらばらにしちまふぞ！」

町人は今度は両手を振つた。

「さあ、もう此處でごほんごほんやるのは澤山だ。出口へ進めつ！」とテルモシヨソフは號令をかけ、扉にかけてあつた掛金を外すと、力一ぱい闕の上でダニールカを突きとばしたので、こつちは玄關の段々にくつつけて建ててあつた鶏小舎の上をすつ飛んで、ぽかぽかした芝生の上にどすんと尻餅をつくつと、きよとんと振り返り、それからペツと唾をはいたかと思ふと、咳もどこへやら置き忘れたまま、四つん這ひになつて、門の外へとび出して行つてしまつた。

ブレポテンスキイはこのお仕置きを目にすると、有頂天になつて拍手した。

「どうしたんだい？」とテルモシヨソフは訊いた。

「あなたはアヒラより強いですなあ！ あなたと一緒になら、もう怖くはありませんよ。」

「さうさ、怖がることはないさ。」

一三

町の上に降りて來た黄昏に照らされて、消費税吏の家から町長の家へとみちびく往還の上をまっしぐらに飛ばしてゆく、一臺の三頭立馬車があつた。その構造は、今朝がたプロドマソフゾの侏儒の姉弟をここへ乗せてきた馬車とは全然別物だつた。轆のところには、さながら草原産の野生の跑馬のやうな姿よろしく、屈み込んで両手で物をささげてゐるやうな恰好をして、頭をうしろへ反つくり返らせたビジュニーキナが乗つてゆく。その右手には、縁なし帽を阿彌陀にかぶつたテルモシヨソフが風を切つて進み、左手にはブレポテンスキイが、兩の脚をふらつかせ、頭を振りたててゐる。その三頭の馬はどうかといふと、いづれも平凡な馬の寄合世帯で、一頭が中庭からなら、一頭は裏庭から、もう一頭は坊さんの馬小屋からでも持つて來たといつた鹽梅式で、一頭は踊り跳ねてゐるし、もう一頭は疾驅してゐるし、最後の一頭は鼻唄をうたつてゐる。とは言つても調子が合はないわけでもなく、不規則な駆け方ながらも三匹とも仲よく同じ車杠を、同じ目的めざして引つ張つてゆく。その目的が何であるかはテルモシヨソフだけが心得てゐる。遠大な志を懷いて働いてゐる彼一人だけで、教師も税吏夫人も彼に操られて御用を勤めてゐるだけの話なのだが、とにかく浮々といひ氣持なことは三人とも變りはない。テルモシヨソフが、彼の霸氣満々たる勇ましい魂が嬉しくつて躍り立つてゐるかをちやんと知つてゐる以上、ダリーヤ・ニコラーエヴナやブレポテンスキイの胸が躍り立つてゐるのも萬ざら無駄なわけではなからう。この二人は、今やまさに彼等の身を包まんとしてゐる至福

の前味を、ひそかに賞味してゐるのである、——つまり彼等は、ゴグ對マゴグの合戦を、——言ひ換へればトゥベローゾフ對テルモシヨースフの合戦を心ゆくまで見物して樂しまうと、今や固唾をのんでゐるところなのである！……

さて、この驅引上手の精力絶倫な新來者は、どんな工合に仕事に着手するであらうか。そしてこの均衡を失した喧嘩で、最後まで持ちこたへるのは果して誰だらうか？

どうとも宜しく御想像が願ひたい。ただしこれは、全くのところなかなか面白いのである！

——上巻了——

※ゴグ對マゴグ——動機をもつて鳴る古代傳説の王とその民。默示録二十八章の八、及びエゼキエル書三十八章参照。



僧院の人々 第一卷

譯者 神西 清

刊行 思索社

片山修三

東京都千代田區代官町二

印刷 曉印刷

中内佐光

製本 鈴木製本

鈴木俊一

一九四九年九月二〇日

印刷

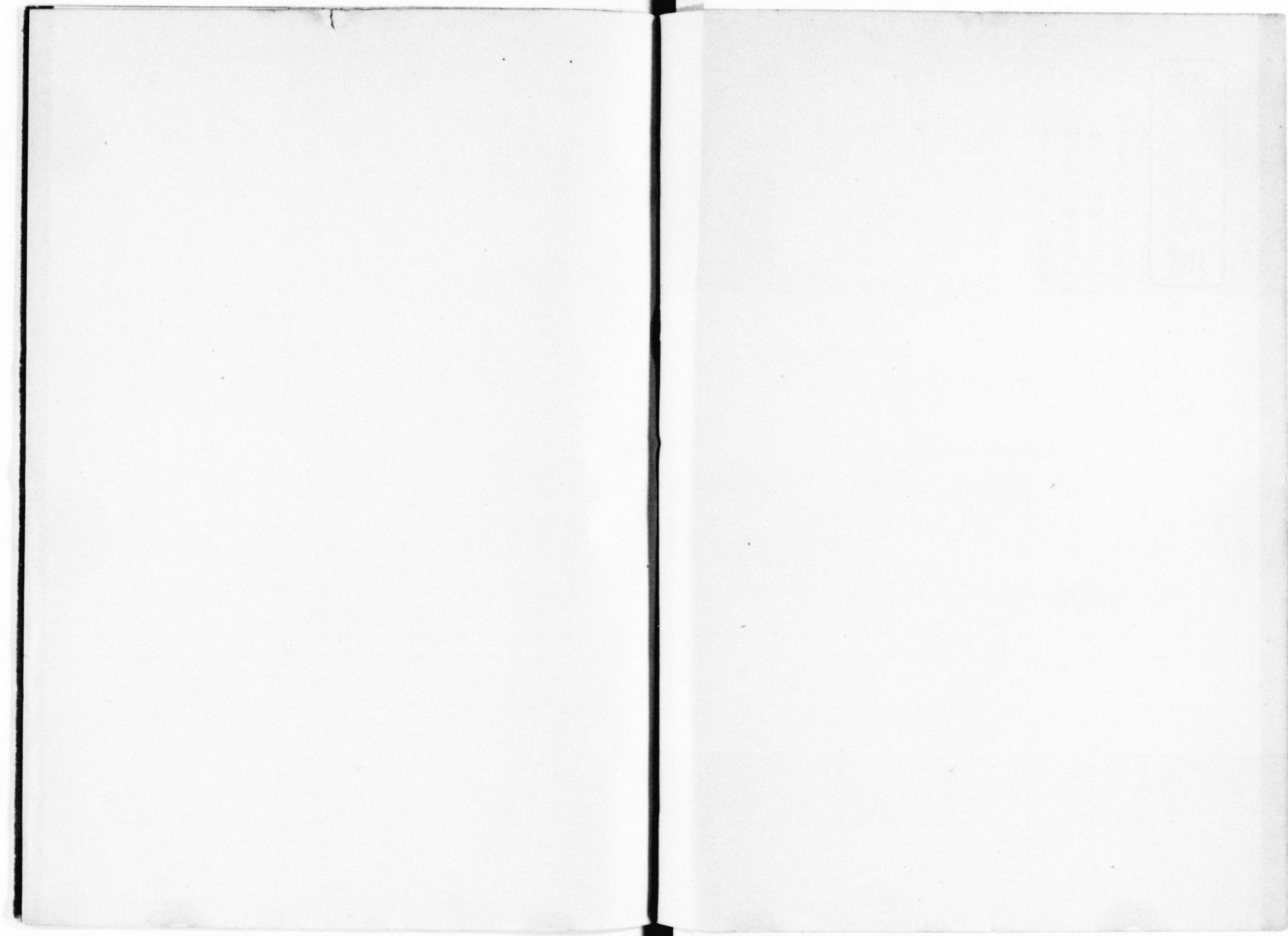
一九四九年九月三〇日

發行

思索選書 103

定價二一〇圓

發行者寄贈



終

思索社